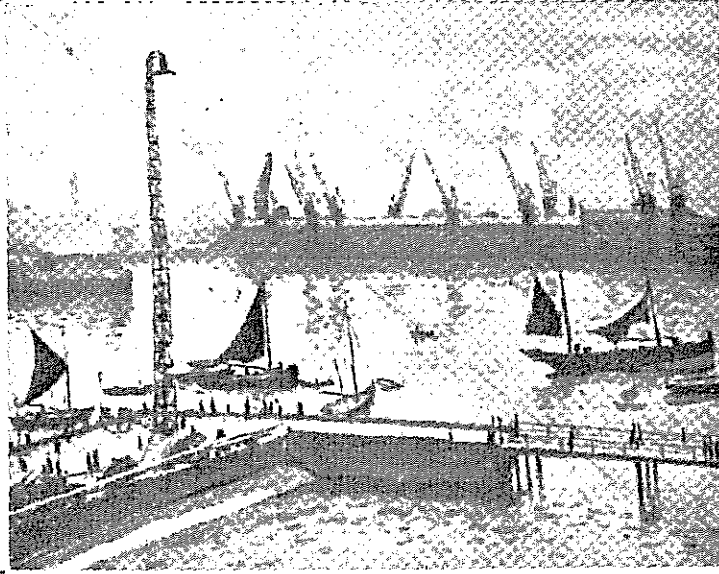


号数	発行日	見出し	内容等1	内容等2
36	昭和35年12月28日	20世紀フランス美術展	1/3～29	
		マルケ展	1/3～15	
		絵画と工芸の総合	20世紀フランス美術展	風景画の詩人
		わが師わが友5	聖護院洋画研究所	洋画家 黒田 重太郎
		展覧会案内		
37	昭和36年3月30日	京都バリ交歓陶芸展 準備進む		
		常設陳列の作品から	村上 華岳(日高河)	三宅 鳳白(秋林小景)
		わが師わが友6	加藤 源之助さんのこと	洋画家 黒田 重太郎
		展覧会案内	第13回京展作品募集要項	
38	昭和36年7月5日	ピカソの作品もふくめて	11日フランス陶芸展	
		トピック	美術館の壁面一部改装	文部省が県展選抜展
			チェコ版画とリアリズム	秋から冬まで後半期の催
		わが師わが友7	研究所時代の安井層太郎	洋画家 黒田 重太郎
		展覧会案内		
39	昭和36年11月10日	秋の視覚	抽象絵画とはなにか団体展の第一室から	
		トピック	常設展と現代日本版画展	ピカソ版画展
			子供の絵とおとな 桑田 道夫	
		展示会案内	鎌倉時代の美術	京都国立博物館
40		第4回日展	今年も話題集め600点	12/16～1/7 京都市美術館
			大家も出揃い壮観	地元作家7人が特選
		展覧会案内		
41	昭和37年2月10日	フランス展ひらく		
		わが師わが友8	若い日の梅原龍三郎	洋画家 黒田 重太郎
		須田国太郎死去	洋画壇の重鎮	
		前進したアンデパンダン展		
		展覧会案内	1962年京都アンデパンダン出品者	
42	昭和37年7月20日	来春に須田国太郎遺作展		
		日本画の推移		
		今回の常設展		
		夏期講座の開催		
		見聞紀談	岡部 三郎	
		わが師わが友9	浅井忠の弟子たち	洋画家 黒田 重太郎
		美術甘酸	加藤 一雄	
		展覧会案内		
43	昭和37年10月8日	京都におけるシュール・リアリズム	常設展にちなんで 今井 憲一	
		見聞紀談	岡部 三郎	菊池 芳文の作品
		展覧会案内	美術シーズンの話題	
44	昭和38年1月31日	特集須田国太郎遺作展	須田国太郎略年譜	須田国太郎画伯を憶う
			不世出の画家 井島 勉	研究所と須田先生 今井 憲一
			須田先生のこと 上田 秀雄	
		ピカソ・ゲルニカ展		
		京都アンデパンダン展作品募集		
		展覧会案内		
45	昭和38年6月25日	世界気楽旅行1	下村 良之助	
		富本、福田両氏惜しまれて逝く		
		エジプト美術五千年展	開館した国立近代美術館京都分館	
		展覧会案内		
46		美術館と平常陳列	安部 弘	
		美術館と平常陳列		
		「国展」の回顧		
		世界気楽旅行(2)	ヴェネチヤの思い出	
		展覧会案内		
47		国画創作協会の思い出	回顧展に際して	語る人 小野 竹喬
		世界気楽旅行3	不遇の作家マンズーニー	下村 良之助
48	昭和39年6月1日	美術館特別展	近代日本の絵画	
		ミロのビーナスをみる	美術史家 村田 数之亮	
49	昭和39年10月20日	京都の伝統展		
		京都日本画の200年	京都日本画の200年出品作品から 10/4～27京都市美術館	
			円山 応挙「写生図巻」明治7年	竹内 栖鳳「あれ夕立」明治42年第三回文展
			菊池 芳文「小雨ふみ吉野」大正8年 第三回文展	堂本印象「調鞠図」大正10年第三回帝展
			徳岡 神泉「枯葉」昭和33年第一回日展	
		展覧会案内		
50	昭和40年2月1日	所感	美術館長 重 達夫	
		京都と近郊の美術館	京都・藤井有隣館、池大雅美術館	大阪・大阪市立博物館、藤田美術館、逸翁美術館
			奈良・大和文華館、天理参考館、草堂美術館	兵庫・白鶴美術館、市立神戸美術館
			滋賀・滋賀県立琵琶湖文化館	和歌山・和歌山県立美術館
		展覧会案内		

マルケ展

1月3日-15日

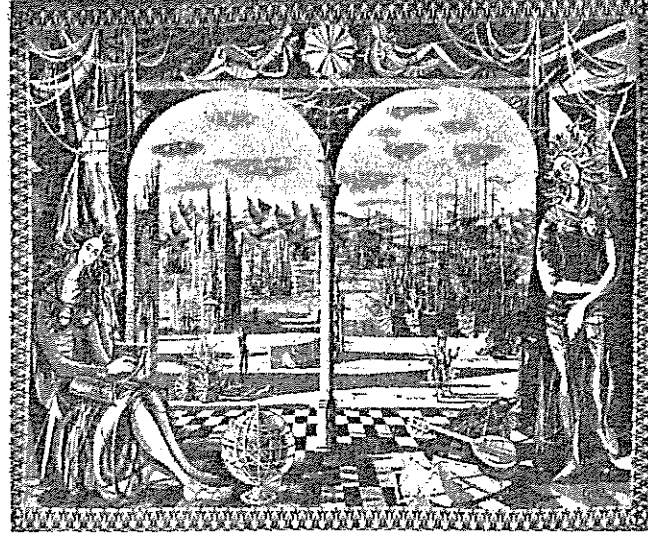
ル・アープル



京都市 美術館ニュース No.36

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園

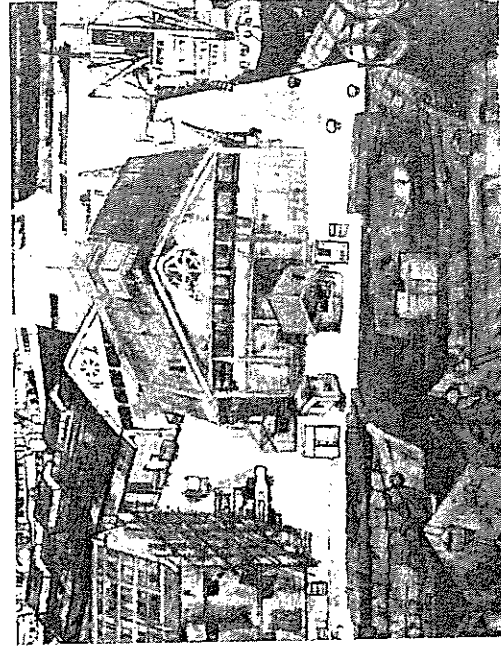
昭和35年12月28日発行



カルズーへ旅への誘い

20世紀フランス 美術展

1月3日-29日



特選の作家たち

日本画、洋画、彫刻、工芸、書画の余料を通じて、その特選は三十八点であるが、京都関係では日本画の池田道夫、岩沢重夫、大塚明、三輪良平と工芸の森野泰明、東端真作の六人が受けた。

ふた昔ほど前日本画壇で特選をとれば流行作家としての地位も確立し、家に書生の一人も置けるほどの社会的反応があつた。経済事情の変化した今日では生活のうえにそれほどのね返りはないが、特選が榮譽であることは変りない。

さて、日本画の大塚明は、美大出の新進で、日本画の研究グループ村土社のメンバーである。こんどは初の特選であるが、港湾風景を力強く描写している。描写という言葉がびびりたりする画風で、船や倉庫の輪廓線がびびり

びした筆致でめくくられている。画面はワイドスクリーンのようなひろがり野性的魅力がある。

これに対して見た目にも美しいのは三輪良平の「舞妓」である。三人の舞妓が袖をふれ合つて坐っている図柄だが、着飾つた舞妓さん健康で普通の女性と全く異なりが。そのういうところを表現しようとしたと作者も語っている。着物の色彩はある程度抽象されてはなりとりとやわらかい色合いである。新しい感覚の美人画といえる。三輪良平は山口章樹良鳥社の新進塾員で、最近舞妓を盛んに描いている。

岩沢重夫は常木印象塾東丘社の塾員で、これも若い。作品「賑」は落下する瀑布を前面に押し出し、上部に河の水流と堤防、家影をたたみ込みような調子で配置している。構図も大胆で幾何学的な構成美をもっている。こ

ういう構図は悪くするといやみに映る場合もあるが、この作品にはそういつたものがない。

池田道夫は池田通郎氏の令息でやはり新進気鋭の画家。受賞作「卓上静物」は卓上にランブ、水差し、花瓶など置かれた静物、ずつと以前から追及してきたテーマであるが、従来はどちらかという純粋に造型美を求めようとすこの作品ではそのほかに水さしやランブなどのあたりにつ

つましい生活においていたがだつた。一つの変化であらう。

京都関係の漆芸部門での特選は最近ほとんどなかつたが、今回は東端真作が受賞した。森の中の夜明けの情景を描いた「漆スクリーン・明ける」がその作品。晩の光が暗い森の木立の奥にさし込み、鳥たちがねむりから醒め、はばたく。木かげと鳥は漆黒に、光は黄に、そのコントラストが鮮やかだし、抽象化された造型感覚にもなかなか新鮮なものがある。

陶芸で特選をとつた森野泰明は陶芸家森野嘉光氏の令息で、二十代の新人である。陶器の形も従来の古典的な形姿にくらべたら随分変化して来たが、特選作「青細花器」は胴部がデフォルムされて、ところどころに小さな突起がつけられている。土器のもつ野性的な美観と素朴な味わいを感じられる。写真は太塚明「頭」

第3回日展

12月14日-27日(9時-5時)

入場料	大人	高校生	小中学生	前売割引券
個人	100円	70円	50円	80円
団体(20人以上)	80円	50円	30円	—

団体の場合は、観覧当日に入口で一括料金を払つて御入場下さい。「観覧日隨意」の団体取券券も前もって発行いたします。前売券の完納者には手数料を支払います。

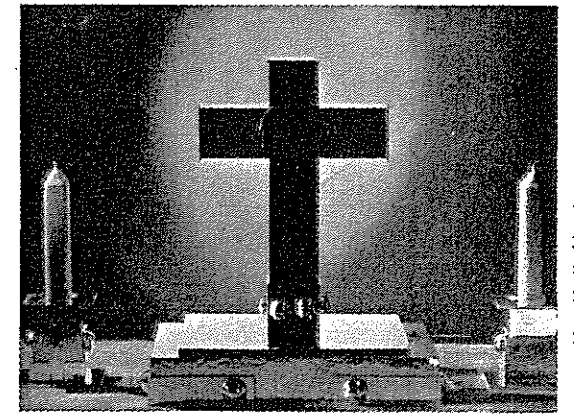
その他のお問合せは

京都市美術館まで 電 ④ 4 1 0 7

美術館友の会の方には割引するほか、招待券を本号に同封しました。

絵画と工芸の総合

20世紀フランス美術展



デブレ作「十字架と燭台」

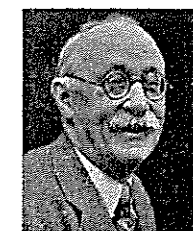
いて、これらの現代絵画がどのような青色を奏するか興味深い。フランス美術展のタビスリーをみて、だれでも気付くことは、工芸制作と画家たちの共同が見事に進んでいるということだろう。

この二月、フランスの有名な作家であり、文化担当でもあるアンドレ・マルローが日本を訪問したとき、読売新聞社との間に日仏芸術文化の広い範囲にわたる交流計画をとりきめたが、二十世紀フランス美術展はそのプランの第一陣をなすものである。

戦後、諸外国との芸術、文化の交流はめざましいものがあり、美術の分野でも多くの展覧会がもたらされたが、その大部分は絵画展であった。しかし今回の二十世紀フランス美術展の第一の特色は総合的な美術展だということである。絵画だけでなく、工芸、壁掛、陶器、精緻な金銀細工、ステンドグラスなどが加わっている。

でも、ここではあまり知られなかった別の活動の分野にふれることができる。そしてこれらのタビスリーは出品数も多く、この展覧会の中心をなしており、圧巻である。タビスリーは、わが国のつづれ織に相当する豪華な織物で垂幕のほか壁面や椅子にも張られるなど用途もひろい。日本へは桃山時代から輸入され、陣羽織や山車の見送りに用いられ、明治時代には京都の川島甚兵衛が渡仏してゴブラン工場で本格的技術をもたせている。

フランスにおけるタビスリーの歴史は十四世紀にはじまりといわれるが、壁掛は広い部屋の寒さや、すき間風をふせぎ、太広間を豪華にかざる機能と装飾を兼ねた道具として流行し、ゴチックの時代には寺院の内部をも壮麗に飾った。



風景画の詩人

マルケ展

マルケ、フランスの画家アルベール・マルケは一九四七年（昭和二十二年）パリで死んでいる。生年は一八七五年だから七十二年の生涯だったわけである。マルケの特徴は何んとい

ても、その優雅で清楚な色調、彼が好んで描くセーヌ川の川岸など水のある風景からにみえる和やかな親み深い情趣であろう。日本人のセンスに合う油絵として愛好者も多い。

このように穏やかな調子の持主であるマルケの出発点が野獣派であったことは意外の感があるが、マルケはたしかにマチスやドラゴンとともに印象派に最後の

自の芸術性を復興する運動に興った。古いタビスリーの研究や、新しい制作が盛んに行われ、戦後には中世から現代までのフランス・タビスリー展が開かれたし、画家、彫刻家として名を知られている人を会員に「タビスリー画家協会」も結成された。このようにタビスリーの制作が盛んになったことの裏には、何の装飾もない現代建築の大きな壁面がタビスリーを自由にうけいれる余地をもっているという事情が大きく響いている。

ともあれ、わが国のつづれ織に相当する高度な織の技術の厚みと有名な画家たちの斬新なデザインとの融合が二十世紀のフランス美術展のタビスリーの特徴である。さらにステンドグラスには巨匠ルオーのデザインによるものもあり、色と光の芸術として、会場の中心をなしている。またピカソやミロ、シャガールの制作した陶器も美しいし、ほかにフランスの装飾美術家が腕によりをかけてみがかげた銀の燭台ブローチ、指輪など金細工も展覧される。

員であつた。フォービズムという言葉は一九〇五年のサロン・ドートンヌに出されたマチスらの作品が反動的で情熱的な原色のはんらんであつたことに由来する。フォービズムは時間的には一時の熱病のようにして去り、フォービストと呼ばれる画家たちは、それぞれ別の画風を示しはじめる。終生の友であるマチスと一九一四年にモロッコへ旅行するころからは、マルケの色彩はフォービズムの原色を離れ、いぶしのかかった淡く、洗練された色合いに帰っていく。こんどの出品は一八九五と六の「赤い着物の母の像」から死の前年までの油絵、水彩七十点のほかにデッサン六十点である。油絵、水彩画、それにデッサンも年を追ってあり、マルケの絵の移り変りがよくわかる。

パリ風景のほかマルセイユ、ノルマンディ、アルジェリアなど各地の情景が扱われており、もちろん人物画もある。マルケは水のある風景を愛した。川や港の水の見える風景があり、行きかう船が描かれている。それらは文字通り自然であり、静かな調和のうちに、微妙なニュアンスがいきいきとあり、一見平凡に見えながら新鮮な情感を失っていない。風物に対する静かな愛情が二十世紀のさわがしさを見事に制しているようにみえる。

洋画家二十会の記録「二十日会記事」の表紙 田村宗立筆



さて私はここで、その後の京都洋画界にとつて、発祥を成した聖護院洋画研究所（いまの関西美術院の前身）の成り立ちについて、一応触れておく必要があるかと思う。

この研究所の母胎となつたのは、洋画家二十日会で、浅井先生が京都に來られたのと前後して、明治三十五年九月、当時祇園下河原月見町におられた田村宗立先生の宅で、第一回の会合を催された。会場はまわり持ち、毎月二十日を期して集まつたので、当初は地元洋画家をおもに、数名の会合に過ぎなかつたが、回を重ねるに従つて、学者、文士、日本画家、工芸家のある

術会が発足して、十余年に亘る沈滞期を脱した京都洋画界が、その勢を駆つて、広く洋画に対する理解を一般に呼びかけると共に、将来の発展を期したいと云うようなところに、主旨があつたのではないだろうか。従つて会合においても、多くは肩の凝らない清談に終始したのであるが、時には美術界の現状、洋画界将来の帰趨等、真面目な話も出たので、研究所設立の問題もその中心の一つであつた。

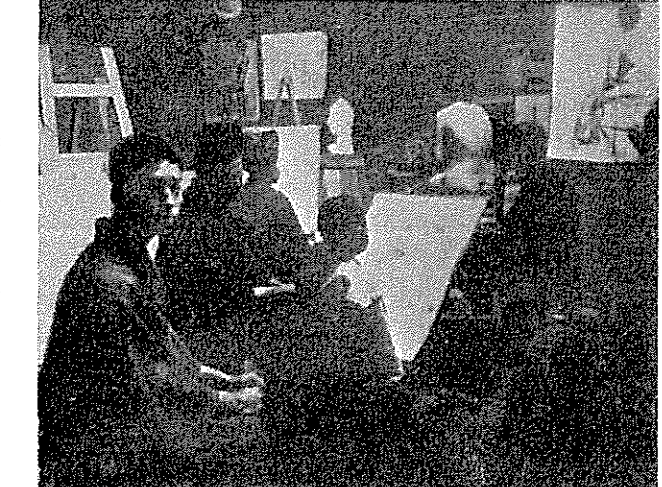
この問題が議せられたのは、記録によると、明治三十五年十月、牧野克次氏邸での記事に、「絵画研究会々所借入の事」とあるのが最初である。次いで翌三十六年一月、仲町丸太町上ル浅井邸での記事に「研究所問題出て新築の予算多額を要せざるを以て見積り書を取り予算の範囲内で為し得るならば実行せんと議に決せり」とある。これで見ると、新築はかなり早くからの理想であつたらしい。

しかしその実現には多少の曲折が伴つたので、同年三月、洛東若王子神社境内の伊藤快彦氏邸、五月牧野氏邸での会合を経て、いよいよ本きまりとなつたのは、その頃熊野神社東横へ移られた浅井先生の邸内の一部をこれにあてるとで、開所は二十日会の記録によ

人たちから、新聞記者と云う風に、次第に範圍をひろげたのである。

思うにこの前年六月、京都各界における有力者を背景に、関西美術会が発足して、十余年に亘る沈滞期を脱した京都洋画界が、その勢を駆つて、広く洋画に対する理解を一般に呼びかけると共に、将来の発展を期したいと云うようなところに、主旨があつたのではないだろうか。従つて会合においても、多くは肩の凝らない清談に終始したのであるが、時には美術界の現状、洋画界将来の帰趨等、真面目な話も出たので、研究所設立の問題もその中心の一つであつた。

研究の窓から見ると、鼻をつきそうなるところに、熊野神社の玉垣があつたのだから、その変りようも大よそは想像がつくと思う。正確に云うと、銀行も店屋も、もとの浅井邸の一部でなかつたかと思ふ。私たち研究生がモデルと首つ引きをしていたアトリエ——と云うと大層であるが、実は門つづきの長屋の土間を利用して、急造の板敷の低い床をしつらえた研究室——の本当の位置は、電車線路の下になつてゐるに違ひない。



聖護院洋画研究所の内部 左端は権原、その隣は浅井

わが師わが友

— 5 —

聖護院 洋画研究所

洋画家
黒田重太郎

事「研究所問題出て新築の予算多額を要せざるを以て見積り書を取り予算の範囲内で為し得るならば実行せんと議に決せり」とある。これで見ると、新築はかなり早くからの理想であつたらしい。しかしその実現には多少の曲折が伴つたので、同年三月、洛東若王子神社境内の伊藤快彦氏邸、五月牧野氏邸での会合を経て、いよいよ本きまりとなつたのは、その頃熊野神社東横へ移られた浅井先生の邸内の一部をこれにあてるとで、開所は二十日会の記録によ

り遙かに手広く、且つ設備もある程度まで整つてゐる。白木の下邸であつたか云う、怪異の噂まであつて、久しく空家になつてゐた、この古い屋敷の一部に設けられた研究所は、冬にはストーヴなど暖房の設備もなく、大きなトタン張りの、木の角火鉢に炭火を焚いていたので、一酸化炭素の中毒で、モデルが卒倒すると云うような騒ぎもあつた位である。

この狭い、云はばむさ苦しい研究所から、梅原、安井をはじめ、俊秀の多くを輩出させたことを思うと、指導者や生徒の質と云うことも無論であるが、現在のそれと比べて、私は感慨なきを得ないのである。

昭和36年 3 月30日発行

- 1 -

— 4 —

◀ 村上翠岳 <日高河>

三宅 凰 白 <秋林小景>

— 6 —

加藤源之助
さんのこと

洋画家
黒田重太郎

浅井先生が京都へ來られて、まだ宿屋住居をしておられた頃、止宿先の柵屋へ、紹介狀一つ持たずに訪ねて行つて、敷へをうた若い画生たちがある。先生の声望を慕つての余で、加藤源之助さん、芝千秋さんが最初で、それから仲町丸太町の方に飯寓された頃に、小川千鶴さんがこれに加はつた。三人とも中京の人で、互いに家が近か

つたのと、同好の誼みもあつて、前からの友人であつた。それでこの人たちは、浅井門京都派中での最古参となるわけである。

このことは偶々当時の京都洋画界の、先生に対する待望を物語るものであるが、聖護院の研究所が出来ると、これを機としてそれまでにあつた伊藤快彦さん、桜井忠剛さん、牧野克次さん等の家塾を解消し、一本の研究機関にまとめられた。この時ここに移つたのは、前記三先輩の外に、伊藤塾から中林徳、梅原寛三郎、牧野塾から井上悌蔵、新井謹也、榎原一広、桜井塾から大塚知三と云つた人たちがあつた。守住勇魚門の沢部清五郎、牧野門の加藤タキノ(当時山川姓)、国松桂溪、中林徳の紹介で安井曾太郎が入所したのは翌明治三十七年である。その他東京美術学校出身の松岡文三、岡四郎、茨木篤之介、明石精一(榎原しな子(当時田中姓)、矢野ノ子(当時桑田姓)と云つたような人たち。

電子木塾から西

読みもあつて、つた。それでこの門京都派中でのである。

当時の京都洋画の展望を物語る護院の研究所が機としてそれま彦さん、桜井忠さん等の家塾を研究機にまゝとつた。ここに移つた伊藤塾が、牧野塾が、榎原一三郎、牧野塾が、外に、伊藤塾が、松本桂溪、中田中姓)、矢野ノ、松本塾が、西

郎、内海吉堂門の久井翠桐、菊池芳文門の神坂松涛、竹内栖鳳の千種掃雲と云つたような人たちが、この研究所の門を潜つているところを見ると、浅井先生の京都來住につづいて、在洛洋画壇にあらはれた動きが、相当地日本画方面にも影響を与へたことが窺はれる。何でも千種掃雲さんが、日本画の套習を打破したい一念から、ことを志して、八田高容氏と伴なつたが、熊野神社の境内を斜に通り抜けようとする辺で、二人の間に議論が沸騰した結果、八田氏はそのまゝ踵をもと来た方へめぐらした、千種さんだけが研究所に向つたと云う話を聞いている。

以上挙げた中で、特に私と親しい交渉のあつた人たちを云うと、加藤源之助さんのことなどが、最初にあたまたに浮んで来る。加藤さんの家は、六角鉄屋町の、代々各宗本山の御用を掌つてゐる。吉川口素

A black and white photograph of a steep, rocky hillside. A winding dirt path leads up the slope, with a person standing on it. The hillside is covered in sparse vegetation and trees. In the background, a large, multi-story building is visible on the crest of the hill. The foreground shows a rocky, uneven ground.

△若葉の丘▽

筆画を見ると、この筆力の鋭どさがあらはれ、これが水彩画のすぐれた効果を支えていることがわかる。

前に云つた芝
千秋さんは梅村
影山門、田中千
麿さんは小川中
華門の、いづれ
も日本画家であ
るが、それから
続いて芝さんと
同門の杉浦宗三

に、才能と云い人物と云い、旧浅井門下で傑
出していたが、惜しいことには家兄が、日
露戦争に出征中戦歿されたので、家業を継
がねばならなくなつたのである。少年時代
から絵が好きであつたが、洋画に志したの
はその頃出版された大下藤次郎氏の「水彩
画の菜」の影響によると云う。そして伊藤
快彦さんの家塾、鍾美会に入つた。浅井先
生の教えを受けるようになってから、加藤
さんの芸術は急速に進展を遂げ、先生の衣
鉢を受けた水彩画は、筆力勁駿、時に先生
以上との評もあるが、寒林などを描いた鉛

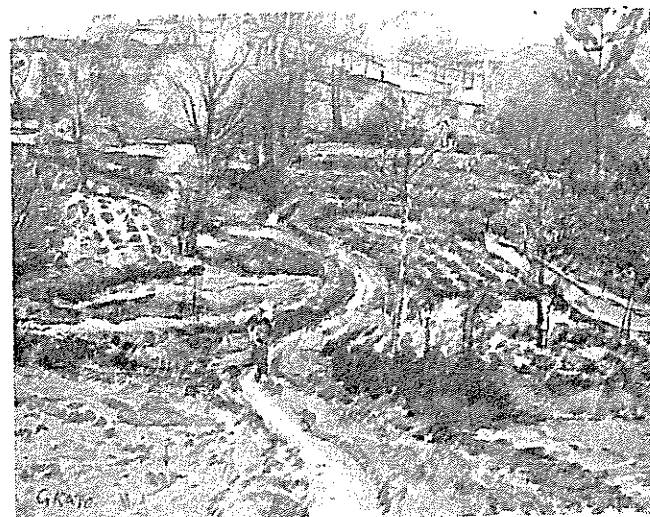
いまでも時々思い出すが、田中善之助君と二人、浅井先生の内弟子としていた頃、画材を求めて高瀬川のおたりを連れ立つてあるいていると、唐草模様の風呂敷に、画板と三脚とを包んだのを抱えている加藤さんと逢つた。あんた方も写生ですか、と云うようなことで、そのまゝ川ぶちを一しよに、松原辺まで下つたが、加藤さんが腰を据えると、常々敬服している人が、どう云う風にして描くのか見たいと云う欲望の方が先に立つて、二人とも自分の仕事は

(8頁へつづく)

(8頁へつづく)



△大和初瀬村▽



△若葉の丘▽

展覧会案内

4月

美術館	新作家展 4日-9日	日吉四人展 27日-30日	古美術と茶器展 20日-5月31日
京都府ギャラリー	京都府ギャラリー 5日-9日	産経画廊 9日-16日	大和文華館 3月25日-6月18日
室町美術協会	室町美術協会 8日-9日	土橋画廊 4日-9日	中国陶磁展 4月9日まで
京都府ギャラリー	京都府ギャラリー 11日-16日	富士一雄画展 18日-23日	大坂大丸 現代スペイン絵画展
新制作日本画展	新制作日本画展 11日-16日	東丘社展 25日-30日	大坂高島屋 中国名陶百選展
ケラ美術展	ケラ美術展 11日-16日	渡辺武蔵、岩倉寿二人展 25日-30日	寧楽美術館 古代中国青銅器
20の個展	20の個展 11日-16日	大丸画廊 4日-9日	6月11日まで
第13回京展	第13回京展 26日-5月9日	春苑会 4日-9日	
京都府ギャラリー	京都府ギャラリー 26日-5月9日	ピーコック新作洋画展 11日-16日	
室内美術博物館	室内美術博物館 7日	福田翠光画展 18日-23日	
青土公展	青土公展 8日-12日	新作額装展 25日-30日	
竜土公展	竜土公展 14日-18日	藤井大丸画廊 8日-13日	
木下章・橋田二郎二人展	木下章・橋田二郎二人展 21日-25日	飛騨高山群しの版画民芸展 15日-20日	
京都書院画廊	京都書院画廊 5日-10日	京都美術倶楽部 9日-10日	
上野忠夫個展	上野忠夫個展 21日-23日	10周年記念五都展 9日-10日	
清水流生花展	清水流生花展 21日-23日	京都国立博物館 4月30日まで	
同志社大学クラマ画会春展	同志社大学クラマ画会春展 28日-30日	中国陶枕特別陳列 4月30日まで	
マロニエ画廊	マロニエ画廊 13日-16日	逸翁美術館 1日-5月28日	
京都美術研究所展	京都美術研究所展 20日-23日	茶道美術展 1日-5月28日	
現代生活四人展	現代生活四人展 24日-26日	藤田美術館 1日-17日	
京大建築科四人展	京大建築科四人展 24日-26日	創立十周年特別展 1日-17日	

京都市 美術館ニュース No.38

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和36年7月5日発行

ピカソの作品もふくめて

11日から フランス陶芸展

京都ペリ交歓陶芸展のための「フランス陶芸展」は七月十一日から開かれる。作品はすでにさる六月二十日当館に到着、公開のための準備が進んでいる。作品は六十点で、セーブル製陶所が主、撰択した同製陶所の参考品十一人と、専門の陶芸家、画家、詩人、工芸家ら十三人の四十九点からなっている。画家ピカソ、工芸家のジャン・リュルサ、詩人のジャン・コクトオらの名前もみえる。フランスの陶芸も決してそう日若いのではないので、器はだにはヨーロッパの伝統がしみこんでいるが、ジャン・コクトオは、精神性にとんだ陶器の開拓者などと呼ばれ、これらに非専門家によって濃厚な現代色彩が加えられている。

専門的陶芸家についてはわれわれはかえって知るところが少くない。しかし文献によると、一九五八年の国際博覧会で金メダルを得たフェルナン・ラカフ。同金

(7頁より)
ほり出して、鉛筆の下描きから水彩の仕上がりまで、感心して見ていたものである。わるい人たちが、気が張って描けへんが、と加藤さんは言っていた。作品一つづつものを云う人で、作品の批評など、その辛さ、内心の悔しさをなした人もあつたらしい。怖れをなした人もあつたらしい。私なども随分あつた。駄目を出さず、展覧会出品など、あつた。きまへんな、と、それが背に当っている。教えられたことも少くはない。そればかりでなく、物心両面からこの先達の庇護を受けたこと一再でない。口はわるいが、情誼の篤い人だつたと思う。

友の会だより

規約の変更

事務取扱の煩雑をさけ、会の内容を益々充実させるために、今までの会費分納制度をやめることにしました。従つて四月から翌年三月までの分として六百円を一度にお払い下さい。もし途中の月で入会されても六百円払つていただくことになり、その会員の資格はその年度中といたすこととなりますので、なるべく早く入会或は継続手続きをさせて下さい。

総会開催

4月29日(祝)午後2時開会
京展の鑑賞会を兼ねて総会を

五月の行事予定

観光バスによる美術鑑賞会を21日頃に実施したいと思ひます。

メダルのビニール・フーケ。かつてのセーブル製陶所美術部長であつたジャン・メイモン・ド・サント・ピエール。壺、皿、宴会用大皿、杯、鍋、水盤、さらに魚の彫像もふくまれているが、ヨーロッパの伝統をひくもの、その上に立つて現代性を強調したもの、中国、日本の古陶の影響が見出せるもの、に大別できる。

一方、パリへ行った京都陶芸展は五月

現代京都陶芸展はアンドレ・マルロ文化相の代理ジャック・ジョーシールの臨席もえて、開会式をおこなひ、まことにうれしく存じました。早速お手紙すべきところおくれでまことに申訳ありません。

鑑賞者は今も展覧会を鑑賞しており、それが好みや性格に応じて、伝統的な作品や、数人の芸術家の大興味ひいた京都の陶芸

第13回京展 作品募集要項

主催 京都市
会場 京都市美術館(左京区岡崎公園)
会期 昭和36年4月26日から5月9日まで

募集作品

- 1部 日本画 特により制限なし。
- 2部 洋画 10号以上のものに限り。
- 3部 彫塑 特により制限なし。
- 4部 工芸 同右
- 5部 書 縦二・四米、横一・五米以内とし、枠張りしたものに限り。

軸物、帳、巻物の類は受付けない。

(各部共一人 三点以内)
出品料 一点 五百円、三点まで 千円
搬入 各部共左記期間に美術館へ。
4月18日(火) 19日(水) 午前10時から午後4時まで。
二点以上の場合には必ず同時に搬入のこと。
授賞 市長賞、新聞社賞等
入選発表 4月24日午後3時当館玄関に掲示すると共に文書でも通知します。
搬出 入・落選共5月10日・11日の2日間。場所は当館会場。その際必ず出品保証を提出して下さい。

十七日から六月八日まで、セーブル製陶所付属博物館で開かれ、すでに好評裡に終了した。

会期中、日本の陶芸について、展覧会開催と文化事業視察のため渡欧中の重館長の講演も行なわれたが、製陶所長ボードリー氏から高山市長に、展覧会の模様をつたえて、次ぎのような手紙がといてある。

も、重氏の御学殖に感じ入るとともに御好意をありがたく思つております。御講演には限られた聴衆しかなく大変残念でしたが、それというのも当日の五月十五日におこつたバリの交通機関の全面ストが前もつてわからなかつたからでした。この会のため会場を貸してくれていた陶器産業連合会では講演につづく映写会が終つて、とてもすばらしいレセプションを催してくれましたが、レセプションにはパリ居住の日本人の方にはほとんど来ないが、このほか惜しく存じました。(中略)

私共の方の陶芸品目録をつくつていただくための資料はすべて揃えておられること存じますが、この目録をフランスで日本語でつくるのがあいにくできません。失礼致しました。

トピック

美術館は七月から八月にかけて、壁面の改装を行う。壁面に張られた麻布は昭和二十七年、美術館が米軍の接収解除になったとき新調されたが、それからすでに十年を経ている。汚損がはなはだしく、陳列効果を削減す。美術館の壁面一部改装 調となつたが、さしあたり二

るので、十

階南側半館を着工する。

最近建設された美術館の壁面は材料、色彩とも新趣好がこらされているが、当館は貸館の関係もあり、展示品も種々にわたるので、適用度の高い、無難なものということに落着き、従来通りのものを踏襲することになった。

チエコスロバキア大使館の提供による「チエコスロバキア版画展」は五月末から六月にかけて当館で開かれた。この展覧会の興味はいわゆる「共産圏」の絵画が相当まとまつた形で日本で公開されたことである。「共産圏」についてはすでに、ユーゴスラビアの絵画は日本国際美術展などを通じてしばしば紹介され、なじみが深い。同じ東欧諸国といつてもユーゴとその他の国では政治事情も異なっている。チエコスロバキアの版画展がめずらしいが注目であつたゆえである。

作品には社会主義國の美術らしい題材、様式がみられた。しかし「社会主義リアリズム」という言葉で想像されがちな幅の、

チエコ版画とリアリズム

現代美術史的にいえば少くともチエコ版画だけは完全に通過している美術であつた。新聞などの批評も、このような表現の多様性を認めて好評を示していた。大使館の話によると、これは版画表現の特性にもよるもので、一般絵画においては描写的リアリズムが支配的であるという。

研究所時代の自画像 安井曾太郎筆



加藤さんの知己を得たのは、研究所へ入つて、大分経つてからであるが、安井曾太郎君とのそれは、入所そもくであつた。安井君の生家は、加藤さんと同じ六角通の少し西、富小路東へ入つた北側で、家は大きな木綿問屋、彼はその五男であつた。父元七氏は何でも福井県か、その辺からの出身と聞いているが、若い時から刻苦精勵、一代にして産を成した。朴実寛容、

く、素つ氣なやうでいて、親切で、義理堅く、情誼に厚く、人に悪意をもつやうなこともなければ、疑つたこともないのが、生涯敵を作らなかつた大きな理由となつてゐるに違いない。

わが師わが友

-7-

研究所時代の安井曾太郎

洋画家 黒田重太郎

要するに真面目であつたが、都会育ちだけに、しやれの充分わかる人で、時として茶目氣を出すこともあつた。彼との初対面に、最初から隔てがとれたのも、偶々この茶目氣のさせた業で、いまでも思ひ出すが、西川君と私がこの研究所を訪れた時のことである。明治三十八年十月はじめと記憶するが、これより先き安井君は、洋画に志を立て、彼の学んだ京都商業の図画教師、平清水亮太郎氏に就いていたが、西大谷の蓮池で写生中、伊藤塾出身の中林徳氏と知り、その紹介で研究所に入つたのは、この前年の夏である。当時研究所では、午前、午後、夜間の三部に分つて、石膏模型、人体の写生が行はれてゐたが、彼は朝から

このほど文部省は第一回県展選抜展の開催要項を発表した。今日多くの府県で「県展」が開かれてゐるが、この選抜展は「県展（およびこれに準ずる展覧会）」において選抜された優秀美術作品の披露展を行い、地方美術の振興に寄与する」というもので、来年二月一日から十日まで東京都美術館が予定されてゐる。

文部省が県展選抜展

種目は日本画、洋画、彫刻、工芸、作品（無鑑査、招待出品などは除く）の中から各県展において推薦するもの、となつてゐる。

京都には県展がないので「京展」をそれに準ずる展覧会として指定した旨連絡があつたが、選抜展の性格、運営について一部疑点があるので、今後の検討にまたねばなるまい。

美術館は来る七月十一日から三十日まで、「フランス陶芸展」を開くが、以下順を追つて本年度に予定される市主催の主な展覧会を拾つてみよう。フランス陶芸展後、しばらく準備期間を置いて、九月から中断していた常設展を再開する予定。常設展は文字通り常時開催するのがたてまえであるが、他の展覧会との関係上断続するのもやむを得ない現状である。内容については目下案がねられてゐる。

次いで十月には特別展の予定である。例年国立近代美術館と共催して、横山大観、小林古徑遺作展などを開いてきたが、今年は近代美術館に特別計画がないので、

秋から冬まで後半期の催し

こんどは当館独自の計画になる。京都に、いづれにしてもその前に開かれる常設展などとの関連も考慮して、プランが練られることにならう。十一月にはピカソ展が構想されてゐる。朝日新聞社の計画になるもので、ピカソの画業にさらに深い評価を与える機会を提供することになる。十二月中旬から一月にかけては恒例の日展。一月の終りから三月にかけて、これも朝日新聞社との共催による「ル・ブル美術展」が予定されてゐる。これは先年開催された「フランス美術展」と姉妹展をなすもので、ローマン派から写実主義、印象派を経て、今日に及ぶ美術思潮が明らかにされよう。

夜まで、この三部ともに出て、殆んど一日の休みもなく、進境見るべきものがあり、私たちの入所当時は幹事に抜擢されてゐた。それで幹事の安井君に入所の手続きを頼むために、研究所の潜り戸をあけた途端、私たちは先づ度々も抜かれた。かねて仕掛けてあつたと見え、ガラ／＼と音がして、あたまたの上へすばりと大きな紙屑籠がかぶさつた。紙屑、乾いた大きなかけら、木炭の粉などが、あたまた背中へ、さらさら、気味のわるい云つたらない。わあ、かゝりよつた、と、手を叩いて喜んだのが、尋ねて行つた当の相手の安井君である。安井さんですね、と云うと、まあこれを履いて、とすゝめてくれたのが、上り口に揃えてあつた上草履で、それをかかるとして、ぼつたりと板間の上へ四ん這になつた。釘づけになつてゐたので、彼は飛び上つて喜んだ。

その頃、画学生の間に持て囃されてゐた、岩村透氏の「巴里の美術学生」と云う書物の影響もあつたのであらう。研究所でもすうい分たつたが流行つた。紙屑籠もその一つで、人より早く来たものがこれを仕かけたのであるが、たまに忘れることもあつたらしい。ある時、そんなところへ潜り戸のあく音がしたので、しまった、かけておくのだつたと云つた安井君の鼻さきへ、ぬつと顔を出したのが鹿子木先生である。皆が笑いをこらえてゐる中で、彼は恐縮してあたまをかがいてゐた。



絵葉書、年賀状（西川純あて）安井曾太郎筆

京都市 美術館ニュース No.39

発行所 京都市美術館 京都市左区岡崎公園 昭和36年11月10日発行

秋の視覚

抽象絵画とはなにか 団体展の第一室から

京都の美術界は10月以降秋のシーズンに入る。もつともこれまでにいろいろな展覧会がないわけではなく、すでに各地の美術館やデパート、画廊では現代美術や古美術のいろいろな催しが行われている。しかし、われわれの古くからの習慣もあつて美術シーズンという言葉が、実感をもつて感じられるのは、美術団体展が幕をひらくときからであり、京都では十月の行動展がその第一陣となる。美術の秋、という実感が今年はどうな作品が現われるかという興味と、出来たての真新しい作品が放つ絵具の香の中で醸成されるのは自然なことだと思う。

行動展を皮切りに団体展は新制作、自由美術、二紀、青竜、独立、パンリアル、日展と続く。また工芸では走泥社展もひらかれ、個展やグループ展をふくめれば枚挙にいとまがない。

さて、これらの団体展は、今年も美術愛好者を大いに楽しませてくれようが、その先鋒の行動展からうかがえる印象では、絵画にはかなり一般的な傾向が顕著に現われているということである。

各団体展は第1室をニュールックで固めるのが常套で、そのニュールックはほとんど非具象絵画系統のものである。

第1室は店舗でいえば店頭であり、そこがまず第一の見せどころとして重視されるわけである。

しかし行動展のファーストルームに整然と並んだ作品は30点を下らないだろうが、それは1本のはなやかな帯をみ

るように見える。美しい色合い、さまざまな形が、一点一点の絵画としての性格を明らかにするよりも、互いに流入し合い、融合し合つて、一つの全体の中にとけこんでいる。そしてこの壁面を覆う一本の帯を、額縁と名札を頼りに切断したところにA、B、C、D、E、F……という作家の作品が現われてくる。個々の作品は全体のための部分のように見える。

このような印象を呈するのは一つは具象絵画のように実際の題材の相異——たとえば人物画と静物画というような——判断とした識別の標識がないことにもよるが、そればかりではない。

非具象派の作家たちが作品をつくる場合「スマートで、仕立てがよく、美しく、目ざわりでないような色彩と形」というような範囲に自からの絵画思考と感覚を無意識のうちに限定していることによるらしい。たとえば「スマートで、仕立てがよく、美しく、目ざわりでないような色彩と形」の制服をみんなが着たら、特色がでようはずはない。

最近では制作の意図を作家たちが文学をもつて語ることが多くなった。そして非具象作家の場合とくに今日の社会や現代造形の問題との対決が語られることが少なくない。しかし、このような意味深い課題に対して「スマートで、仕立てがよく、美しく、目ざわりでないような色彩と形」だけをもつて答えることができるだろうか？1961年の絵画の諸問題にこのような色と形で対処しようとするのであるならば画家の心はあまりにも優雅にすぎるといわなければならない。

もちろん行動展の作品の中には「例外」も数として存在するようだし、京都の美術の秋ははじまつたばかりである。行動展の第1室だけをとりあげて秋の全体を連断することは冒険であるが、続く諸展の作品をこのような観点から眺めてみることによつて美術の秋の興感は一層高まるのではないだろうか。(F)

展覧会案内

7月

美術館	平安書道展 6月30日—2日	大紅会 4日—9日	祇園中古道具市 11日—16日	竹杖会展 18日—23日	錦装会展 25日—30日	丸物画廊 1日—6日	新花器即売展 8日—13日	岩田ガラス展示即売会 15日—20日	洋画即売展 22日—27日	触陶芸展 29日—8月3日	複製名画展 9月3日まで	京都国立博物館 29日—8月3日	新開古墳出土品特別陳列 9月3日まで	大阪市立美術館 29日—8月3日	夏期常設古美術展(阿部コレクション) ヨンほか
マロニエ画廊	成安女子短大美術展 3日—6日	シヤル展 8日—9日	パタンデザイン展 10日—11日	大丸画廊	成安女子短大美術展 3日—6日	シヤル展 8日—9日	パタンデザイン展 10日—11日	大丸画廊	成安女子短大美術展 3日—6日	シヤル展 8日—9日	パタンデザイン展 10日—11日	大丸画廊	成安女子短大美術展 3日—6日	シヤル展 8日—9日	パタンデザイン展 10日—11日

友の会だより

奈良見学会の報告
去る十八日にかねて計画の奈良見学会を終えましたが、当日は心配していたつゆ空の雲も切れ、会員百名を乗せた二台の大型バスが大和文華館に着く頃は雲一つない上天気になりました。
美しい新築の文華館では中国陶磁展の最終日で、先史時代から清時代までの優品名器六十六点を鑑賞することができました。
次いで奈良国立博物館に向い、昼食後仏教美術に関する展示を見学、今日まで脈々と流れるわが国伝統の美を心ゆくまで鑑賞しましたが、両館とも会員のため特別に解説の勞をとつて下さいましたことに感謝いたします。
その後、鹿の赤ん坊の誕生に出席、一幕もあり若草山では生駒金剛大和三山と、その眺望を満喫し、京都へは五時過ぎに全員無事帰着しました。次回見学会にも多数の御参加を待ちつつ以上報告いたします。

夏期講座

恒例の美術館夏期講座をことしも次の要項で開きます。今回は「世界各國の美術事情」をテーマにしました。映画やスライドも併用する予定です。
7月24日から27日まで(4日間)
毎日午後6時半開講 9時終了
24日(月) 中南米の美術 彫刻家 野崎一良
25日(火) 知られたフランスと見てきたフランス 彫刻家 山本格二
26日(水) インドの風土と美術
主 京都大学教授 上野照夫
27日(木) 今日のヨーロッパ美術
募集人員 申込先着順一二〇人
受講料 全期間を通じ一人二〇〇円(友の会会員は一〇〇円)
申込は 7月10日から美術館事務所、その時受講料を納入のこと。
主 催 京都市、京都市美術館友の会

重 美術館長帰任

京都パリ交歓のための京都陶芸展の開催と文化事情視察のため渡欧していた重美術館長は七月四日帰任した。
重館長は五月八日京都を出発、セーブルで京都陶芸展の開催に立会った後、フランス、イギリス、スペイン、オランダ、チェコスロバキアなどの欧州主要都市に立寄り、美術および一般文化事情を視察した。

第十五回市民美術展作品募集

日常職場や家庭で仕事にいらしみながら、余暇をさいて制作を楽しんでいる美術愛好家のための展覧会です。ことしも次ぎの要領で開催しますので、ふるつてご参加下さい。
主催 京都市
会期 昭和36年8月22日—27日
会場 京都市美術館
募集作品 日本画(掛軸は受付けません) 洋画(水彩、パステル、版画をふくむ)
彫 塑 三科とも寸法制限はありませんが、陳列に不適当なものは受付けません。日本画、洋画には額をつけること。一人二点以内。
搬入日 8月20日
出品資格 京都市民あるいは京都市内に勤務または通学する人。ただし専門家および中学生以下を除く。出品料 不要

Figure 1. A schematic diagram of the experimental setup. The subject is seated in a chair, viewing a video screen. The screen displays a target (a small circle) and a starting point (a larger circle). The subject's hand is positioned at the starting point. The distance between the starting point and the target is 10 cm. The subject is instructed to move their hand from the starting point to the target. The video screen is positioned 40 cm from the subject's hand. The subject's hand is positioned at the starting point. The distance between the starting point and the target is 10 cm. The subject is instructed to move their hand from the starting point to the target. The video screen is positioned 40 cm from the subject's hand.

しては三十六年度最後のものとなるだらう。

日本画は京都派の作品が中心となるが、洋画は今回は東京側の作家が紹介される。また工芸と彫刻は京都関係作家の

年一月から三月まではフランス美術展の開催もあつて、常設展と

(洋画) 辻永「志賀高原の秋」岡田
郎助「満州記念」南薫造「雲の影走る」
小糸源太郎「花」鍋井克之「港」寺内
治郎「楽器を持てる女」近藤光紀「少

300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534
 535
 536
 537
 538
 539
 540
 541
 542
 543
 544
 545
 546
 547
 548
 549
 550
 551
 552
 553
 554
 555
 556
 557
 558
 559
 560
 561
 562
 563
 564
 565
 566
 567
 568
 569
 570
 571
 572
 573
 574
 575
 576
 577
 578
 579
 580
 581
 582
 583
 584
 585
 586
 587
 588
 589
 590
 591
 592
 593
 594
 595
 596
 597
 598
 599
 600
 601
 602
 603
 604
 605
 606
 607
 608
 609
 610
 611
 612
 613
 614
 615
 616
 617
 618
 619
 620
 621
 622
 623
 624
 625
 626
 627
 628
 629
 630
 631
 632
 633
 634
 635
 636
 637
 638
 639
 640
 641
 642
 643
 644
 645
 646
 647
 648
 649
 650
 651
 652
 653
 654
 655
 656
 657
 658
 659
 660
 661
 662
 663
 664
 665
 666
 667
 668
 669
 670
 671
 672
 673
 674
 675
 676
 677
 678
 679
 680
 681
 682
 683
 684
 685
 686
 687
 688
 689
 690
 691
 692
 693
 694
 695
 696
 697
 698
 699
 700
 701
 702
 703
 704
 705
 706
 707
 708
 709
 710
 711
 712
 713
 714
 715
 716
 717
 718
 719
 720
 721
 722
 723
 724
 725
 726
 727
 728
 729
 730
 731
 732
 733
 734
 735
 736
 737
 738
 739
 740
 741
 742
 743
 744
 745
 746
 747
 748
 749
 750
 751
 752
 753
 754
 755
 756
 757
 758
 759
 760
 761
 762
 763
 764
 765
 766
 767
 768
 769
 770
 771
 772
 773
 774
 775
 776
 777
 778
 779
 780
 781
 782
 783
 784
 785
 786
 787
 788
 789
 790
 791
 792
 793
 794
 795
 796
 797
 798
 799
 800
 801
 802
 803
 804
 805
 806
 807
 808
 809
 810
 811

こんどの版画展
にはピカソのシュ

大作「ゲルニカ」のためのデッサンはニューヨーク近代美術館に秘蔵されており、未公開である。油絵を中心とするピカソ展は第三回として明年秋に予定されている。

マギージャー、アンリ・カンワイラー氏
いずれもピカソ自身および、ピカソの
ソ展
カ画
よるものという。

ピカソの版

しかし、ピカソの版画は彼が油絵、彫刻などとともに力を注いだ仕事の一つであり、その展覧によつて、作家と観賞者双方の版画に対する関心が深まらう。

またカンワイラー氏は「ヒカンは版の製作にさいしても、ピカンはたとえ石版に描いたデッサンそのままのものとなければ版画を刷らなかつた。今でも何かは手にふれると、その可能性に夢になり、版画の仕事を一斬する。彼につて仕事の巧さは問題ではない。ピカの親友で詩人のポール・エリュアールの美しい題名を借りていえば、彼につて「見るために与える」ための手段追求が問題なのである」とピカソが版のうえにかけたかわらざる追及を強調している。アート・フレンド・アンシエションおよび京都新聞主催。

扱て、どんな風
にでもなれるとい
うのではなくて、
何かになつてしま
つている場合―そ
れは個性として他
の人とは全く違つ
た特徴のある形
を、人間として完
成している場合―
いでしよう。(勿論人間も自然の一部であ
が。)そして人間は、この素質である自然
を、都合のいいような色んな文化という形
に仕立て上げて、人間独特の世界を自然の
中に作り上げて来ました。しかし、文化と
いう形を生み出す為には、自然をどんな風
に見るかという、一つの見方というものを持
たなければ、何の手掛りも得られない事
になります。そこでこの手掛りになるよう
な見方を、仮に概念と呼んでみましょう。

そういう人を、おとなと呼んでみましよう。こういう見方からすれば、四十才でも五十才でもまだおとなになれない人もある

この概念について例を挙げてみますと、点、線、面、といったものを仮定して、自然を捉えるための抛り所にしていきます。又、顔は丸い、りんごは丸い、家は四角、屋根は三角、といった見方も概念的な表現の一つといえるでしょう。だから概念というものは、人間同志の間で、意志の伝達

したり又、創造を試みる上にも欠く事の出来ないものだと思います。しかし、こうした概念も絶対的なものではありません。概念というのは、自然に対する見方に、一つの都合のいい方向を与え、その方向に基いた、その時代の文化としての概念を更に作り上げていきます。だから、私達の文化の歴史をふり返つてみると、常に概念が新しく生れ変つて来ています。こうして概念というものは、生み出すために絶対に必要なのですから、あく迄も人間が造り出したもので完成された形式として、いわば先にいつたおとなのようなものです。そういう意味で既成概念というものは、それぞれ立派な価値をもつていて新しいものを生み出すための基盤にはなりますが、しかし、概念の中で定住することは、一つの危険を持つてゐるものです。だから、最も大切なことは、既成概念を踏み台にして、自然の不思議さの中に新鮮な息吹を求め、いくことだと思ひます。そうすることによつて、又私達は、新しい概念を生み出すことが出来るのだと思ひます。何事でも、簡単にそうだと思ひこんでしまつては發展がありません。りんごというものを、最も簡単な概念で説明すると、丸くて、赤くて短い枝がついてゐる—これだけの事になつてしまひます。しかし、りんごについて私達が知つてゐることは、目で見た事だけではなく、体中の感覚で、それを知つてゐるのです。そのりんごは、大変不思議に満ちてゐるのです。子供がりんごを四角に描く

と、おとなは歎きます。子供がりんごを丸く描いて赤くぬれば、おとなは御満悦です。しかし、丸とか、四角とかいう事自体は、りんごの眞実性とは余り重大なかわりはないのです。だからそれらは、どちらが表現として生き生きとした魅力と眞実性を持つているかということの方が大切なわけです。又、大部分のおとなは、写真のように描ける—すなわち遠近法による表現を最高のものとして信じています。ところが、犬に写真を見せても何の反応も示しません。これは、写真に撮つてゐるものが、ほんものとは全く違うものであるという、何よりの証拠です。しかし、ここに人間だけがもつてゐる、他の動物とは全く違う能力があるわけです。つまり自然現象を象徴化して、お互いの伝達に役立てるということとです。そして、この内容は大変複雑ですが、先の遠近法もその一つと考えていいと思います。又空間表現の方法としては、まだ幾らもあるわけです。遠近法の歴史は、比較的長く、又遠近法は近代に到る迄の文化の発展に、相当支配的な役割を果して来た事は事実でしょう。そんな意味から、遠近法に適うような結果を科学的に求めようとして、自然の中に一つの法則を見出したのがレンズであり、写真機である—という見方も出来るのではないのでしょうか。ところが遠近法を知らない子供達は、自由に正直な表現を、自分の感動にのせて試みます。例えば、機関車の前、側面、後と全部

(次頁下段へ)

京都市

美術館一 No. 41

第4回

日展



中村研一<爪>

フランスが、初日から景である。こんどのつように、フラ彩をあげる年代から196る。展覧会のザヴァル氏が最も同時代にカルボジャン・ヴィされている。最近、わか

京都市美術
館 ニュース 40号

今年も話題集め600点
12月16日〜1月7日 京都市美術館

展覧会案内

11月

展覧会

案内

11月

丘道会展

17日―19日

染色二人展

20日―23日

竜大美術クラブ展

24日―26日

東山高校美術部展

27日―30日

土橋画廊

美術館

新制作展

1日―14日

ピカソ展

2日―17日

常設展および現代日本版画展

7日―30日

二紀展

自由美術展

16日―26日

走泥社展

18日―23日

絵更紗展

25日―26日

パンリアル展

28日―12月3日

独立美術展

28日―12月10日

京都府ギャラリー

日本彫塑家クラブ関西支部展

11日―15日

位双日本画展

17日―21日

染色作品展

24日―28日

京都書院画廊

染色グループダンダラ展

4日―6日

日本画二人展

7日―9日

大和マネキン絵画彫刻展

10日―13日

上原卓個展

1日―5日

上村淳個展

8日―12日

登内徹笑個展

13日―16日

八野正直個展

17日―19日

安藤平荘個展

21日―26日

中町進外グループ展

28日―12月3日

マロニエ画廊

川口多恵子三好香津子二人展

1日―4日

中川栄一雨宮良三二人展

5日―7日

学大洋画七人展

9日―12日

絵画五人展

24日―27日

りゆうび会展

28日―30日

さんけい画廊

第17回さんけい展

7日―13日

日経画廊

禅画展

3日―5日

藤波晃個展

22日―27日

大丸

青龍展

1日―5日

鎌倉時代の美術

京都国立博物館

京都国立博物館では「鎌倉時代の美術」を開いている。秋の特別展で会期は十一月二十三日まで。
この「鎌倉時代の美術」は昭和三十三年の「平安美術展」のあとを受けたもので、今年には「彫刻と工芸」篇とし「絵画と書蹟」篇は来秋に予定されている。鎌倉時代は日本の彫刻史上最大のピークの一つであり、康慶、運慶、湛慶、快慶ら仏師が輩出して、きわめて特色ある時代を形成した。
また工芸においても武家勃興による新時代を背景に漆工、金工、染織、陶磁器などに一時代を画した。
列品は奈良、京都、鎌倉、東京はじめ各地の社寺仏閣、博物館、所蔵家の収蔵品からなっており、彫刻四十点、工芸八十点である。

(前頁から)
一枚の紙の中に悠々描いて、大いに得意です。又、人を描けば、最も人間を印象的に代表している顔を、画面一杯に描いてしまつて後は、実に小さい体がくつついてある等、極めて自然に自分の感動を表現しています。だからおとなは、正しいと思ひこまされては、既成概念の枠を子供に押しつけるのでなく、年令に応じた感じ方、表わし方を通して、この偉大な自然の美しさにも通じる、子供のもっている生き生きとした宝石のように輝く、小さい生命の芽生えを、大切に育てるようにしなければならぬと思います。私の友人がみせてくれた、フランスの小学校の理科の教科書の扉に、こう書いてありました。
「君達は、この本を読んだ時、この本が間違つたことを言つていないかを、よく確かめてみなければいけない。そうすることによつて君達は、批判精神と、均衡のとれた良識を、身につけることができるだろう。」
子供たちは、時代の息吹きを、敏感に感じとつています。だから、子供達は、抽象絵画をも、よく理解します。おとなのように、理屈はいらないのです。
(筆者は新製作洋画部会員、不思議の国アトリエを主宰)

京都市 美術館 No. 41

美術館
新制作展
ピカソ展
常設展および現代日本画
二紀展
自由美術展
走泥社展
絵更紗展
パンリアル展
独立美術展
京都府ギャラリー
日本彫塑家クラブ関西
位双日本画展
染色作品展
京都書院画廊
染色グループダンダラ展
日本画二人展
大和マネキン絵画彫刻展

28日
28日
28日
25
18
16
16
7
0
1
10
7
4
24
17
11

展覧会

丘道会展
染色二人展
龍大美術クラブ展
現代大家彫塑展
24日—26日
20日—23日
17日—19日
豊秋半次個展
西山英雄滯欧作品展
21日—26日
14日—19日
雲畑社水墨展
25日—30日
18日—20日
11日—16日
（前頁から）
一枚の紙の中に緊張つて描いて、
大いに得意です。又、人を描けば、
最も人間を印象的に代表している

彫刻にも明快壮麗な大作が並び、加藤清顕、清水多嘉示、吉田三郎、黒田嘉治らのほか、北村正信の磨きのかかった見事な裸婦像、羽柴小枝子の形破りの表現など人気をよぶだろう。

工芸は陶芸、漆芸、染織、金工に堂々たる大作がそろい、現代調への衣がえが完成しつつある

ので日展の中でも重要な部門となっている。陶芸の楠部弥式、滝一夫、漆芸の山崎寛太郎、香浦省吾、染織の小合友之助、佐野猛夫らをはじめ多数の作品が現代工芸の水準を示すものとして注目されよう。漆芸の辻光典は「装飾画—長気楼」で工芸部門の文部大臣賞を受けた。書は書塾や学校での教科を通じて漸次

親みやすい分野になってきた。審査主任の鈴木翠軒氏は書風が多彩化してきたことをあげ、個性開発の成果が上ってきたことを指適している。

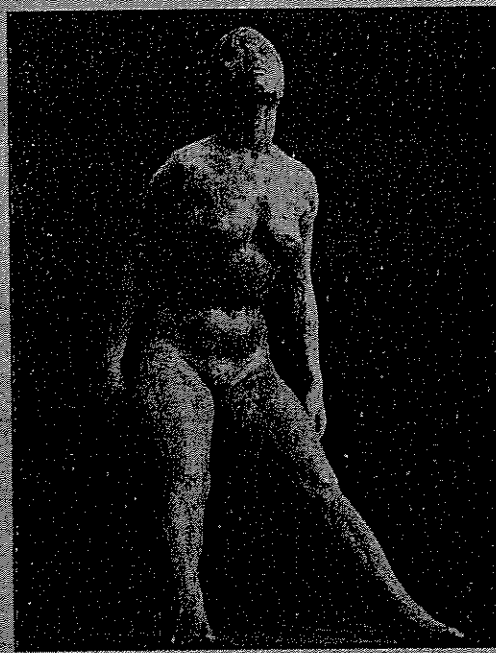
新人作家にとって最高の栄誉である特選については京都から大量7人の受賞者を出した。

地元作家七人が特選

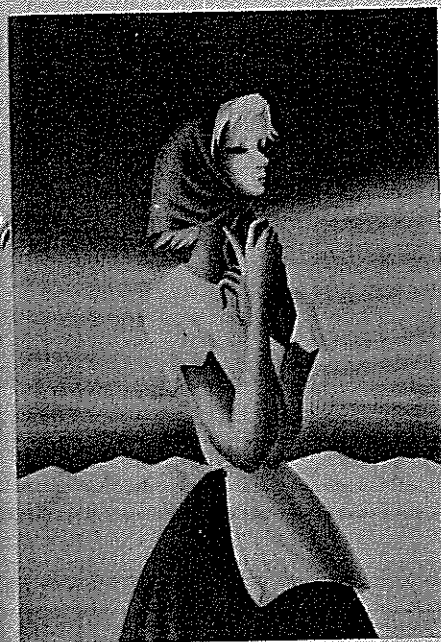
日本画では山岸細樹、岩沢重夫「晨暁」渡辺武蔵「石仏」の3人、工芸では谷口良三「線花器」来野月乙「樹と鳥」の2人。さらに洋画では吉田光慶が「三月堂」で受賞した。洋画の特選は七、八年も前の由里明の受賞以来のこと。久しぶりで気をはいたということになる。さらに書では古谷若韻が「四柏」で受賞したが、これも京都の書としてはめずらしい。

書は書塾や学校での教科を通じて漸次

満口寛<おんな>



楠部弥式<「和」花瓶>



東郷青児<遙かなる山々>



福田平八郎<花の習作>

日展を見ずしてその年の美術を語るな、という手前味噌に聞こえるが、年間の傑作、秀作の少なからぬ部分がこの日展から生み出されるのは事実である。だから日展結構は節走から新春にかけての話題になるだけの魅力をそなえているといえよう。

今年は日本画でも大家の作品が出揃って壮観である。たとえば福田平八郎氏は制作の最中に文化勲章受章という栄誉があつて制作日数が足りず困ったというが、それでも平安神宮の庭に散り敷くさくらと菖蒲をテーマに見事な一作を出品したし、抽象派の堂本印象氏も事情は同様である。このほか中村岳峻「残照」徳岡神

泉「仔鹿」金島桂華「晨」伊東深水「地唄舞」山口達春「秋」小野竹喬「樹」など格調の高い仕事であるし、池田遙輝、東山魁夷、高山辰雄、西山英雄、橋本明治らの人気作家の作品も見落せない。

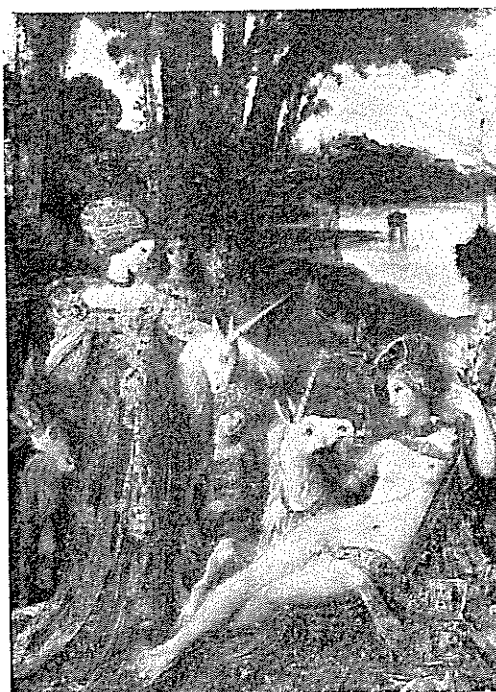
洋画は円熟した写真のうまみと美しさ、が何よりのみどころ。辻水、中村研一、小山敬三、鬼頭鍋三郎、小糸源太郎、木下孝則など有名大家の力作のほかに二科の東郷青児や二紀の鍋井克之らの花形が招待出品として加わり、なかなか見栄えがする。東郷青児はこのところ毎年の出品であるが、今年は中央に例の美少女を配した「遙かなる山々」を出している。

大家も出そろい壮観

フランスが、初日から景である。こんどのつように、フラ彩をあびるよ年代から196る。展覧会の権ヴァル氏が当もつともはな同時にカルボジャン・ヴィされている。最近、わか

京都市 美術館ニュース No.41

発行所 京 都 市 美 術 館 京都市左区岡崎公園 昭和37年2月10日発行



モロー 一角獣

ギュスターブ・モロー〈一角獣〉

イタリア旅行によってボッティチェリからルネサンス期の巨匠から大きな感化を受けたが、その骨組のうえに、神話・聖書を題材にした幻想的、神秘的な独自の様式を織りあげていく。マチス、ルオー、マルケ、カモワンのフォーヴィムスの画家たちの師でもあった。

フランス展ひらく

フランス美術展は二十六日から京都美術館で開かれたが、初日から見事な人出でいかにも待望の展覧会らしい風景である。

こんどのフランス展は「黄金の百年」と銘打たれているように、フランス美術が世界の中心として浮び上がり、光彩をあびるようになった最近の百年間、厳密に言えば1840年代から1960年までの絵画と彫刻、480点が展示されている。

展覧会の構成にはバリ近代美術館次長ベルナル・ドルヴァル氏が当たったが、内容は19世紀から今世紀にかけて、もっともはやかな芸術であった絵画に主体が置かれると同時にカルボ、ロダン、ブールデル、マイヨール、デュシャン・ヴィヨン、ベヴスナーなど、近代彫刻の系譜が示されている。

最近、わが国においても、素描のもつ芸術的価値がよう

やく一般にも認められるようになったが、フランス展でもドガ、マネ、スーラ、マチス、ピカソ、ロダンの少なからぬ素描があわせて陳列されていて、作家の制作を複合的に把握できる点はなほだ興味ぶかい。水彩や版画も同様である。そしてこれらの素描や水彩や版画がタブローとくらべて少しも劣らぬ価値をもっていることを容易に理解させる。

作品所蔵の内訳はルーヴル美術館から76点、ドリヴァル氏のいる国立近代美術館から93点と最も多いが、そのほか国立美術館10館、市立美術館41館、ロダン美術館、さらに個人所蔵家、作家68人からの出品も加えられている。その範囲において全フランス的規模の出品とってよく、その全容は、日本における西洋美術関係の美術館やこれまで催された展覧会に比べて、やはり圧倒的というほかはない。

展覧会

月

丘道会展 17日—19日 豊秋半次個展 14日—19日 雲煙社水墨展
染色二人展 20日—23日 西山英雄滞欧作品展 21日—26日 翌月会展
電大美術クラブ展 24日—26日 現代大家彫塑展 28日—12月3日 竹工芸展

11日—16日
18日—20日
25日—30日

(前頁から)

一枚の紙の中に密着して描いて、大いに得意です。又、人を描けば、最も人間を印象的によき表わして

美術館

新制作展
ピカソ展
常設展および現代日本
二紀展
自由美術展
走泥社展
絵更紗展
パンリアル展
独立美術展
京都府ギャラリー
日本彫塑家クラブ関西
位双日本画展
染色作品展
京都書院画廊
染色グループダンダラ
日本画二人展
大和マネキン絵画彫刻展

展覧会 案内

12月

美術館
パンリアル展
独立美術展
3日まで
10日まで



石仏 渡辺武蔵 (日展出品)

第四回日展		1月	2月	3月
京都府ギャラリー		11日—17日	26日—3月15日	
鈴木清作陶展		4日まで		
面生会能面展		6日—8日		
笹瀬悦子個展		9日—13日		
三木弘竹中三郎自選展		15日—19日		
セリグラフ (版画) 展		22日—26日		
京都書院画廊				
同志社大学スケッチ展		8日—10日		
グループセミナー洋画展		11日—14日		
黄帆会展		15日—17日		
同志社大学広研デザイン展		18日—24日		
西京高校美術クラブ展		25日—29日		
大丸画廊				
現代名匠彫塑展		3日まで		
日本画魁会展		5日—10日		
夕京歳末絵えん金輝堂展		19日—20日		
新春向高級書画床飾		21日—25日		

日料展

一般	団体 (20人以上)
大人 120円	100円
学生 80円	60円
小人 60円	40円

前売券 100円

美術館、各プレイガイドなどにあります。

(日展は年末28日から元旦までは休館)

わが師わが友

— 8 —

若い日の
梅原龍三郎

洋画家
黒田重太郎

昨年四月、「梅原龍三郎展」の開催に先立って、私は京都市美術館で、梅原君と久淵を叙した。かけ違つて、何十年ぶりの邂逅である。

陳列を指図していた君を、遠くから見かけて、声をかけたが突差でわからなかったらしい。しげしげ顔を見て、あゝ君だったか、と云った。あたまで指して、薄くなつたなあ、と云う。その当人も、役者のような眼鼻だけを除いて、白哲紅顔の当年の美少年の俤はない。お互いに七十の坂を越えているのだからと、感慨無量なものがあつた。東京と浅間と、半々位なものかなと、住居のことを尋ねると、あゝ大体そんなものだ、が、面白くなつたら、いつでもミディがイタリアへ飛び出すよ、と

云つていた。その言葉通り、君はいま南フランスの地中海にいます。やりたいことを、すぐ実行に移すことの出来る君は、つくづく恵まれてゐるなと思うが、それは恐らく生れてこの方のことであらう。

はじめて梅原君と逢つたのは、安井君より二、三カ月前、明治三十八年七月頃である。大阪難波新地の、その頃空地となつていた所に、日本海大海戦のパノラマが作られることになつて、研究所の先生の一人であつた鹿子木さんや、都島英彦、伊藤快彦両氏の下に集まつた研究生有志の中に、君も加わつてゐた。西川純君と共に、鹿子木さんの塾から参加した私は、かねて優秀の名を聞いていた梅原は、この人だったかと、更めて見直す思いであつた。

ところで君は、その時一晩か二晩泊つたきりで、京都へ帰つた。暑さあたりとか何とか云つていたが、実は先生たちと我々お手伝との間に、待遇の差別をつけ過ぎる宿屋の仕方に腹を立てたので、帰

りに道頓堀の芝居を見て来たが、その方が余つて程気が利いていて、これはあつた話である。私が研究所へ入つたのは同じ年の秋、一月ばかりして、例年の関西美術会が開かれる何日か前の夜、出品打ち合せの集まりが、浅井邸で開かれた。列席の研究生の一人一人に、君は何を出すかと、浅井先生が聞かれるのであるが、梅原君は何もありませんと云う。何もないと云つて、油絵は、と問はれると、気に入つた出来のものが無いので、と云う。では水彩は、と云はれると、これもろくなものないので、と云う。その返事のし方が、木で鼻をくつつたようなので、先生もむつとして、気に入つたものとか、ろくなものとか、思ひ上るのも程々にしたまえ、一体君たちの作で、正式の鑑査にかけて、パスするのが一点だつてあると思うか、と散々であつた。相手が先生だから、駄つてあたまで下げていたが、あくろ朝研究所で私と顔を合せると、スケッチブックを貸せと云う。出してやると、先生が怒つてゐる顔と、あたまで下げて、腕を握つてゐる自身の恰好を漫画風に描いて、どうやとつきつけた。

このことは、必ずしも理由のない反抗ではなかつた。平生研究

所では、鹿子木さんはじめ先生たち

が、基礎的なデッサンを喧ましく云う癖に、展覧会となると、やれ油絵の水彩のと、出品を促がされる。云はれた通り正直にやろうとしてもやれないのである。そう云う矛盾は、誰しも気づいていて、そこはよろしく融通を利かしてゐたのである。その梅原君だつて、研究所へ顔を出すのは、少くもその頃は、気の向いた時だけで、安井君のように、午前、午後、夜と、詰めて通うのではなかつた。唯だこの矛盾を、不出品と云う形で、レジスタンスしようとした所に、富裕な商家の坊っちゃん育ちであつた君の若さがあり、先生もそれは充分承知していられたが、関西美術会に対する責任感と、より直接的には作家としての梅原に、大きな期待をもつていられたためだと思ふ。序でながら書き添えておくが、そのためであつたかどうかは知らない。研究所の午前、午後、夜間と一日中あつた人体写生のクールが、午前と夜だけになり、午後のそれが廃されたのは、それから間もなくであつたと記憶する。

その頃京都では、洋画材料店と云うものが、現在のように何軒も

なかつた。わづかに寺町通にMと

云うのがあつて、云つてはわるいがモノポリーのせいか、その店で売る絵具やカンヴァスや木炭など、勿論まともなものもあるにはあつたが、時とするとまやかしか思はれないものも随分まじつてゐた。君の買つた油絵具のホワイトが、到底使用に堪えないので、取り替へを交渉すると、一度口を切つたものは頭として応じない。怒つた君がチューブを叩きつけ、下駄で踏みじつて、ぐるぐると往來の方を向き、眼をむいて、御所の五郎殿もどきに見得を切つた藝村を思はせるこの芝居がかりは、ずっとあとまで持ち越され、洋行から帰つた時、京都駅へ出迎えた友人たちに、さもなくかしと云つたような、大げさな身振りをして驚かしたと、その時居合せた人たちの話である。

云いたいことを云い、好きなように振舞つて、しかも悪い印象をあとに残さない君の人格は、豪華放胆なその芸術に、鮮やかに刻みつけられてゐる。君の研究所時代については、書けばまだまだあるが、他にも二三書いてあるので、この位にしておき度い。



アトリエの須田氏

須田国太郎氏死去

洋画壇の重鎮

須田国太郎氏（洋画家、独立美術会員、日本芸術院会員）は昭和三十六年十二月十六日午前九時十六分肝硬変のため京大病院で死去した。逝年七十才。告別式は十九日岡崎別院で盛大に執行された。

須田氏は京都に生れ、若くから画家を志したが、早くからきわめて特徴ある画風の持主として識者の間に評価された。年を追つてその力量は多くの人の眼に明らかにになり、日本の洋画壇における大きな存在となつた。

須田氏の画風は必ずしも一般受けのするものではなかつた。たと

えば同じ京都出身の画家である梅原龍三郎、安井竹太郎両氏のかち得たようなはなやかさはなかつたけれども、極めて含蓄の深い別の世界を開拓する仕事にかけては全く余人の追従を許さないものがあつた。作品に一貫する精神表現の深さと客観把握の鋭さの見事な統合も類をみないものがあつた。さらに作品が優れた画家の通例として単に画面上の「造形」だけに終始しない、もう少し大きい精神の視野をもつてゐたことにも注意しなければならぬ。

須田氏の画風は必ずしも一般受けのするものではなかつた。たと

略歴

明治24年6月6日 京都市中京区堺町六角下ル甲屋町三八五に元麻商彦太郎の次男に生れる。日彰小学校（四年生）および第五高等小学校卒業。
明治42年3月30日 京都府立京都第一中学校卒業。この間横山常五郎に学ぶ。
大正2年6月 第三高等学校（一部丙）卒業。
大正5年6月 京都帝国大学文学部哲学科美術史専攻卒業。
大正6年5月 関西美術院に入り洋画を研究する。
大正8年2月 インドを経て渡欧。主にスペインにとどまつたが、足跡はイギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、ベルギー、オランダ、イタリア、ギリシア、スイス、ポルトガル、エジプトに及んだ。スペインでは、プラド美術館所蔵のヴェネチア派大家や、スペインの大家の名作を模写した。
大正12年7月 帰国
大正14年9月 和歌山高等商業学校講師となり、美術史を講じる。
大正14年12月 滋賀県神崎郡五箇荘松井氏の五女松井絹子と結婚
昭和6年1月 長男寛生れる。
昭和8年9月 和歌山高等商業学

校講師を退く。京都帝国大学文学部講師となり、美術史を講じる。この年独立美術京都研究所開かれ、指導に当る。

昭和9年3月 独立美術会員となる。
昭和11年3月 京都帝大文学部講師を退く。
昭和22年 京都大学工学部講師となり実技を講じる。
昭和22年7月14日 日本芸術院会員となる。
昭和23年4月30日 京都市立美術大学講師となり、実技を講じる。
昭和24年4月1日 京都大学文学部講師となり、一年間美術史を講じる。
昭和24年9月1日 京都市立美術専門学校客員教授となる。
昭和25年3月31日 京都大学工学部講師を退く。京都工芸繊維大学工学部講師となり実技を講じる。
昭和25年4月30日 京都市立美術専門学校客員教授を解任。
昭和25年5月1日 京都市立美術大学教授および京都市立美術専門学校教授となる。
昭和25年5月16日 奈良学芸大学講師となる。
昭和27年3月31日 京都美術専門学校教授を解かれる。
昭和27年4月16日 京都学芸大学

講師となり実技を講じる。
昭和27年8月25日 京都国立博物館評議員会評議員となる。
昭和31年2月28日 京都学芸大学講師を退く。
昭和31年3月31日 京都工芸繊維大学工学部講師を退く。
昭和31年7月6日 京都市立美術大学長代理となる。
昭和31年 ヴェニス・ビエンナーレ第二十八回展に出品。
昭和32年5月6日 京都市立美術大学長代理を解かれる。
昭和33年3月31日 奈良学芸大学講師を退く。
昭和34年1月 関西画壇の向上に長期にわたり貢献した功績により毎日美術特別賞を受ける。
昭和35年8月16日 美術大学教授を退く。
昭和35年8月24日 京都国立博物館評議員会評議員を解かれる。
昭和35年8月17日 美術大学名誉教授の称号を受ける。
昭和36年10月15日 京都市篤志者として表彰される。
昭和36年12月16日 肝硬変のため京大病院で死去。従四位に叙せられる。勲三等に叙せられ、瑞宝章を授けられる。
昭和36年12月22日 正四位勲三等に叙せられる。

京都市 美術館二ユース No.42

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和37年7月20日発行



須田国太郎<集會>

来春に 須田国太郎遺作展

昨年春になくなった洋画界の重鎮須田国太郎氏の遺作展の準備が進められています。東京展は京都展終了後、国立近代美術館で開かれます。このため美術館でも今春以来作品調査を進めてきましたが、出品数は百八十点くらいになるでしょう。遺作展は来春一月開催の予定で、安井曾太郎や横山大観、小林古徑らの遺作展と同様、須田国太郎遺作委員会がつかられ、この委員会と国立近代美術館、京都市の三者共同主催の形式をとることになるでしょう。

須田国太郎氏は明治二十四年京都市生れで、京都大学で美術史を専攻したのち関西美術院で洋画を学び、さらに大正八年から五年間スペインを中心にヨーロッパ各地を遊学しました。帰国後は独立美術協会の会員になり、ヨーロッパ風の写実主義と、重厚で含蓄深い精神内容を統合した独特の画風を發展させました。京都大学や市立美術大学などで美術史や洋画の教授をもち、昭和三十三年二月肝臓癌のため死去しました。昭和二十二年芸術院会員となり、昭和三十四年には関西画壇の向上に長期にわたり貢献した功績により毎日美術特別賞を受けています。

夏期講座の開催

ことしも夏期講座が7月23日から次ぎの要項により開かれます。今回は「現代美術の位置」という全体的なテーマのもとで、現代美術の歴史的な性格について説明していただくつもりです。

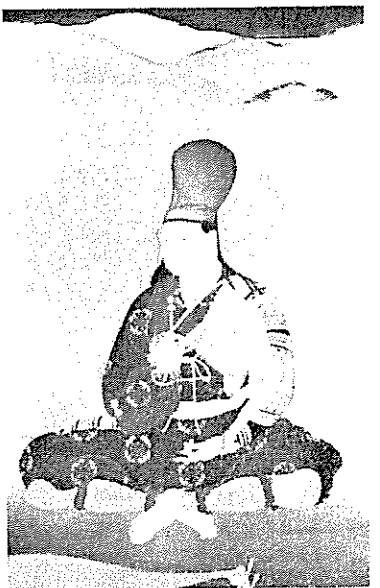
主催 京都市美術館友の会
会場 河原町御池市役所前、藤川学園
日程 23日(月) 現代のなかの美術
24日(火) 京都市美術館
27日(金) 古美術と現代美術
28日(土) 大正期の画壇

京都市美術館友の会
京都工芸繊維大教授
河本 敦夫
京都大学文学部
助教授 吉田 光邦

会期中の二日間講演のあとで映画を上映します。

古田 安 京都市左京区聖護院蓮華蔵町43 TEL③3262
山本 六郎 京都市左京区吉田中太路町34 山崎方
吉川 正治 神戸市灘区船寺通二丁目56
岡本 喜夫 芦屋市清水町17-10 芦屋ガーデン
塩見 正 京都府福知山市宇田和993
森家 要次 京都市左京区田中春菜町18
小笠原 誠次 神戸市長田区5番町8ノ18 TEL⑤1597
武内 博之 州 神戸市兵庫区馬場町90ノ9 TEL④2086
阿部 壮 京都市中京区壬生中川町20
窪田 勝子 京都市伏見区深草直造橋11丁目
脇田 靖子 大阪市北区芝田町8
下津 三保子 奈良市鶴町3 TEL④4864
人見 紀子 京都市中京区聚楽通西町165
服部 守美子 京都市左京区下鴨西半木町
松本 幾代 京都市伏見区深草直造橋4丁目荒田方
河 口 電 夫 神戸市兵庫区松原通3丁目7 TEL⑤9634
湯浅 楠 妮 大阪市住吉区浜口町東3の12
中塚 量 夫 京都市下京区木津屋橋通堀川
山本 洋子 大阪府八尾市高安園31
JAMES BYARS 京都市左京区北白川東久保田町73
肥田 千恵子 京都市中京区西ノ京内畑町30
森本 岩 雄 京都市右京区嵯峨広沢南下馬野町1-11 TEL⑥2681
川原 きよ子 大阪市東住吉区田辺東の町778 TEL④4604
洪田 純二 京都市左京区吉田下阿達町10 森田茂延方
道工 博子 京都市外西向日町住宅地 TEL④向日町6148
橋川 稔昭 京都市南区唐橋西寺町10
橋本 良 京都市上京区上立売大宮東下ル TEL④4689
七島 清弘 京都市左京区浄土寺下南田町52
加藤 由美子 京都市左京区吉田上阿達町1 中京消防署内 TEL③6666
秋田 直躬 京都市上京区榎木町丸西入242 岡崎方 TEL③7242
井田 直章 京都市上京区相国寺山内豊光寺佐分方
岩田 重信 京都市左京区下鴨下川原町47
楠田 清織 京都市左京区北白川琵琶町ケラ美術村
高木 香 京都市左京区北白川琵琶町美術村
橋本 久枝 大阪府三島郡島本町桜井 TEL⑤5498
大久保 三と 大阪府天王寺区東高津北の町38
三浦 淳 豊中市春日岡
橋本 久保 三と 寝屋川市萱島
大 三 中 大阪府西成区玉出本通2-48 TEL⑤1274
田 上 博 茂一己郎 正測
吉 岡 井 克史 延
中 井 島 岡 太
尾 平 岡 太
松 本 富 太

石崎 宏 矩 京都市左京区鹿ヶ谷寺ノ前町72 TEL④1725
細口 俊一 京都市中京区壬生相合町11
藤田 西洋 京都市下京区新町花屋町上ル長町852
築山 長彦 京都府綴喜郡八幡町山紫34
大浦 ますみ 大阪市天王寺区茶臼山町40 TEL大阪④4983
江原 平 京都市東山区山科西野岸ノ下町37
ネギタ・マサトシ 京都市伏見区深草池ノ内町1の20
東山 明 兵庫県西宮市浜甲子園3の75
木下 茂 剛 京都市南区八条源町16の3 福井由次方
林 京都市東山区今熊野北日吉町52平尾方 TEL0870
田花 勝太郎 京都市北区紫竹下竹殿町12
吉竹 弘 京都市東山区大和太路五条下ル2丁目
川上 力三 京都市中京区夷川間之町角 TEL③2024
藤波 ちげん 奈良市宝来町 TEL奈良③8313
宮本 浩二 奈良市北川端町一 TEL③8717
久保 晃 奈良市川上八反田
杉本 勝三郎 大阪府北区東堀川町1 TEL④6781
猿橋 秋雄 豊中市上野1の63
福沢 忠夫 京都市中京区壬生高橋町65
山岡 恒二 京都市下京区西酢屋町4 TEL④631・635
良田 務 京都市左京区一乗寺宮ノ西町20 TEL④5618
石川 優子 大阪市東淀川区東淡路町2の77
松本 徹子 守口市八雲町8番10の2
谷 伊 京都市伏見区白銀町958の4
吉 識 道子 八尾市木ノ本264の4
高島 徳子 大阪府東成区大今里南ノ町3の34
原田 道子 布施市柏田1071
西岡 清子 八尾市清友高校内
足立 真三 河内市角田1445(清友高校)
杉田 多津子 大阪府布施市大連1244
宮崎 実仁 京都市中京区二条通柳馬場東入ル
国又 正 京都市東山区五条橋東6丁目539ノ18
宇野 正 京都市東山区山科御陵西島向町
小 路 昌克 大阪府茨木市総持寺700
三 尾 公三 京都市伏見区桃山町正宗46-12
小 西 昭人 京都市東山区山科日丘
木 美智子 京都市北区紫野蓮台野町23
細 見 元利子 京都市左京区下鴨東岸本町38
福 田 芳子 京都市北区紫野上御所町
泉 統子 京都市右京区上桂三ノ宮町59 TEL③3675
河村 恵子 京都市北区紫野下柳町43
広畑 美代子 京都市北区紫野上門前町
雨 森 良正 京都市北区紫野大宮下みどり町
矢野 本正 京都府相楽郡加茂町中森
杉浦 謙一 京都市右京区電安寺塔ノ下町2
伊庭 新太郎 京都市北区紫野上門前町14
松田 高治 京都市左京区北白川小倉町50
西村 嘉夫 京都市伏見区深草瓦町87
京都市上京区下立売相合園子ノ上ル 三筋目東入ル



聞談 見紀

岡部三郎

次ぎの菊池契月の作品五点が昨年あらたに収蔵された。

「赤童子」大正一五年 帝 展
「経政」昭和二年 菊池塾展
「少女」同 七年 同
「友禅の少女」同 八年 同

「紫蘭」同 一七年 京都市展
これに旧蔵品「敦盛」「南波照間」「散策」「交歓」の四点を加えると契月の後半期の大作の大半を集めたことになる。

契月は四三才のころ外遊した。これらの作品はいずれも外遊後のもので、そのころの契月は和絵と風といわれる和様の作風で画壇に高い地位を占めていた。

京都の画壇には町絵といわれる町家ごのみの、一般庶民にも広く親まれた画風が江戸期から伝え

の町家である。美術もこの中京の町家に支えられていち早い復興を見せた。だから京都画壇の復興過程においては江戸期から広く町家に親まれていた四条派が主流の位置を占める。しかし、この四条派は同時に激しい時勢の変革、いはば近代化の過程においては分化解体と転落の運命を担わねばならなかった。転落の因子を内包していたからである。

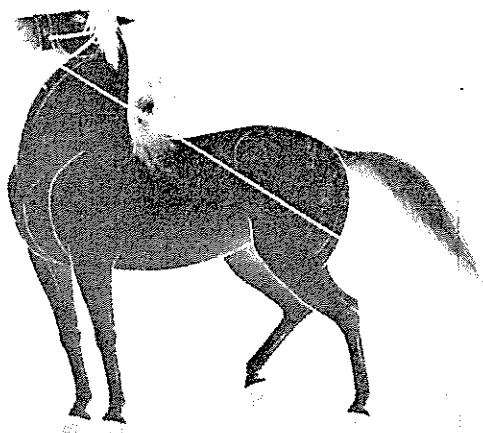
明治の日本画の礎をすえた米人フェノロサや岡倉天心らの新興日本画運動も古典復興という進行的性格を見方によっては強くもっていった。けれども、これらの運動は明治美術の新方向を代表する洋画とすでに国風化した伝統を代表する日本画との対立、あるいは相反(つねに文化発展の推進因子とな

つて働く)の中から生れたものであって、西欧美術が新興日本画の強力な推進契機として作用していたことにも注意しなければならぬ。芳崖や雅邦が線とか色とか光りなどの技法の規範を取り入れたのもそのころである。

ところで、日本画と西欧美術の接触は益々密接となり、日本画だけに於いて見ても、この西歐的な観照や表現形式を近代的な要素とする考え方は一層強くなるばかりである。このような現象を包括し得る近代という理念は今日極く普通に考えられているよりもずっと広く考えねばならなくなつて来る。このような広い意味の近代芸術観の源流はイタリア・ルネッサンスにさかのぼる。後代の史家はイタリア・ルネッサンスをポポロ・グラツコ(肥満せる町民)の勃興と考えたり、また「世界と人間の発見」という有名な言葉で解明したりする。性急な断定かも知れないが今日のリヤリズムとかヒューマニズムとかの近代性を代表する理念はこれらと対応するつまり、ルネッサンスから発展分化したルネッサンス的な理念にはかならない。現代の最も新しい反ルネッサンス、あるいは反ヒューマニズムの主張も、それらが近代芸術論で

あるかぎり、このルネッサンスの理念を通過したものであり、ここに深く根をおろしている。近代芸術論が形成される過程では、中世研究がルネッサンス研究より後に着手され、中世的な理念が美術に反映するのまずと後のことである。近代リヤリズムはルネッサンスの画匠達が中世のギルド(組合)から離れて、あらたな自己の抱りどころを求めてヒューマニスト達へ近づいた時にヴァザリのいうモデルナ・マニエラ(新しい技法)として、陽の目を見た。このころのヒューマニストといえは今日のように科学者と区別されておらず、同時に科学者でもあった。従つて近代リヤリズムは、例えば線遠近法や解剖学の研究のように近代科学と平行して育つて来たものである。

日本画と西欧美術との出会いも古くキリスト教移入のころまでさかのぼるのであって、江戸期の円山四条の写生画も西歐的なリヤリズムの技法をそのまま採り入れている。例えば応挙の線遠近法や人体の研究がそれであつて、いわば現代の早すぎた兆候であつた。しかし、そのころの日本の近代科学はまだ夜明け前の段階であつて、十分な科学感覚を欠いた社会を背景に育つた四条派は現代のリヤリ



下 菊池契月<紫驪> 右 同<赤童子>

ズムへ発展することなく、東洋風な花鳥風月の趣味の中に吸収されてしまった。明治後の近代科学の隆興は、さらにリヤリズムの前進を求めたから、やがて四条派は時代から転落する運命をたどった。しかし、新興日本画も作品の上でも理念的にもそう前進したわけではなかった。明治の洋風画にしても、新興日本画にしても、あるいは四条派にしても、それぞれが別の立場から西欧美術を採り入れようと試みたことは共通しているが、どんな形にしろ近代芸術の位置にまで浸透するのには、さらに時間を必要とした。ただ新しい時代の科学感覚の支えをすでに失っていた四条派だけが時代から取り残される結果になった。

京都画壇の近代化の諸段階は近代の西欧芸術理念の投射する段階からも、いくつかに分けることができる。京都画壇は明治十年代の半ばごろから早くも立ち上りの機運を見せはじめ、二〇年ごろ新興日本画運動を経験した。もうそのころには画壇復興の問題だけでなく、新しい時代の絵画創造の動きを見せるが、それらの諸問題を解決し得たのはさらに後のことで、この画壇の転期を代表するのが栖鳳である。しかし、類型的にはまだ四条派にとどまっていた。

この西歐近代芸術へ原理的に接近しようとする試みが現実作品の上に現れたのは栖鳳の次ぎの世代に属する表僊や萃岳らの国展の前後からで、大正期に入ってからである。少くとも「芸術」という言葉が時代の標語になってからである。契月は年齢からいっても、作風からいっても両者の中間に位置しており、契月も西欧美術へ強い関心を示した。それは契月にとっては四条派からの離脱であつた。はじめ、二〇代の表僊は新傾向をねらつてゲンレー絵(社会風俗画らしい)を描いていた。契月も、それを追うように歴史画で同じ行き方を見せている。やがて表僊はゴーガンのような近代画家に、萃岳はデジャットやレオナルドなどの古いイタリア画家への関心を作品の上に示した。契月は源流からいうとアール・ヌボールの裝飾的な傾向を見せて来る。丁度そのころ契月も表僊も外遊した。この外遊を境に彼らは日本の古典に目を向け、古典の新しい素は時代の新しい波紋を描き出した。

さきに挙げた契月の外遊後のこれらの作品は全日本画壇から見ても一方では西歐芸術の理解の幅を加え、一方では古典的な傾向が強く現れた時代の作品であり、京都画壇の発展史から見ても重要な資料でもある。

わが師わが友

— 9 —

浅井 忠の
弟子 たち

洋画家
黒田重太郎

よに聖護院の研究所へ通っていた。鹿子木さんが発たれた後、西川君は近く開設される運びとなっていた。西川君は近頃開校の準備を担当することになって、そこへ住み込み、そして室町画塾の古い仲間の一人、宮崎与平君は、中村不折氏にあてた先生からの紹介状を貰って、京都美工の卒業を待ち、東上した。いま一人、田中喜作君は、二年後梅原とパリ留学の途に上ったが、その頃は生家であった七条油小路の造醬油家で、洋行準備の語学の勉強をしていたらしい。とにかくそうして画塾の連中にも、追々離散の時が来た。

明治三十九年二月、第二次渡欧の途に就かれた鹿子木さんと、これに伴って、フランス留学を志した伊庭貞吉、斎藤亨里の両君を、神戸埠頭に見送った後、寺町通丸太町へ移った先生の留守宅の整理を一応終って、私は聖護院の浅井先生邸に、内弟子として引き取られた。

これよりさき、この前年八月末か九月はじめ、大阪のパノラマが完成したのと前後して、鹿子木さんのおられた借宅に買手がつき、吉田仲大路に転居を余儀なくされたので、先生の室町画塾も、事実上解消の形となった。この頃先生の家にいたのは西川君と私とで、そこへ埼玉の方から来た斎藤君が入門し、これも私たちと同じように当座先生の家に寄宿して、一し

つたに違いない。そして先生の私生活に接触したことは、人間としての先生の一面から、大きな教訓を得たことにもなり、それがその後の私の生涯の上に、決定的な影響をもっていることだけは、書き洩らしてはならないと思う。

ついでながら、私が浅井邸へ移る前、先生はもう書生をおかない積りでいられたらしい。それを任せておいて貰えるようになったのは、鹿子木さんの口添えのおかげで、これに因しては、私はまだに恩誼に感じている。もう書生は御免だ、と、その頃浅井先生が云っておられたのも、理由のないことではないので、当時研究所の世話兼ねて、浅井邸に寄宿していたのは、井上柳蔵と云う人で、もと牧野克次さんの門から出ているが、すぐれた才能の持主であったことは、遙か後になってからも、井上はどうしたとらると梅原が時に洩していたのでもわかる。私はこの人と、再三度逢っただけで深いつきあひもなく、実際のところは知らないものであるが、話によると時に人の反感をそよるような言動があったようで友人受けはあまりよくなかった。それがある日研究所で、梅原一広君、新井謹也君を向うにまわして、口論の結果、どちらが先に手出しをしたのか、実

力行動となり、取っ組み合って、浅井邸の前を流れているどぶ川の中へ落っこちた。この時ナイフ（いまはやらないが、その頃研究所では、木炭の先を尖がらせるために用いていた）を持って渡り合ったのが、浅井先生の逆鱗に触れた。血の気の多い連中のことだから、たまにあるなぐり合いや何かは、ありがちのこととして、不問に付しておられたのであるが、云はば兇器に類したものを用いたと云うので、三人は即座に破門された。

梅原、新井の両君は、鹿子木さんが三重県津の中学の教師をしておられた頃の、生徒であった関係から、浅井先生への取なしを何度か頼みに来たのを、当時鹿子木の玄關子をつとめていた私はよく覚えていた。その中に他の先生たちからの取なしもあって、両君は研究所に復帰したが、井上君は遂に戻らなかった。木蛇と云う号で、大阪で俳画などを描いていたことがあるのを、ことのついでに知っているが、洋画界からは消息を絶つたらしい。惜しい人だと思っている。

とうに時効にかかっていると思うので、書かせて貰ったが、でもここに名を出した諸君には、お詫びしなければならぬ。余計なことであるが、ここでこの話を書いたのは、次ぎのような後編がついているからで、このことがあって少し後、研究所では嵯峨で写生会が催された。先生は研究生たちの間をあちこちして、描いたものに批評をしたり、筆を加えたりされた。新井君の家は、その頃花園の高登（いまの工芸繊維大）の官舎にあったが、友人からこの催しのことを聞くと、じつとしていらなくなつて嵯峨へ行き、謹慎中のびくびくもので、そつと研究生の中にもぐり込んで描いていた。ところが先生は、破門のことなどまるで忘れたように、他の人たちと同様に、親切に批評したり加筆されたりした。これには全く心からの慚愧と恐縮の外なかつた、と、これは當時を回想して、新井君自身が語った所である。

美術甘酸

加藤 一雄

二昔程以前に半ば読んだような半ば見たような本についての定かならぬ記憶である。それはフランス近世史を書いた本だったが、挿絵に汎山十八世紀の女たちの肖像がのっていた。王の寵姫や公爵夫人、銀行家の妻や女僕たちであ

た女優と呼んでも差支えないような風姿であった——女性史上における稀有の完全な自由の開花であったのだ。すぐ次の章は「大革命」であり、その次の章は「ナポレオン」である。彼女らの姿は容赦もなくマルセイユと砲煙の中に消えて行く運命にある。それだけにそのバラ色の頬、はだけた胸、小気味のいい足は余計眼にし

したものの、すぐ次の世代はこれを大にくれて了った——爾来今日に至るまで大小舎の餌皿の中に捨てたまになつてゐる。彼ら画家たちは真理の嚴肅と美の崇高については余りよくも知らなかったが、唯一つのことをよく知っていた。「女の力によらずしては出世は覚束ない」と云う一種の知恵である。これはスタンダールの叔父さんにも銘記させたアフォリスムであり、謂は当時のやや高級な社会通念であった。だから彼らの描いた肖像画は何れ劣らず女性たちの御機嫌をとっている。御機嫌をとられて、これら絵のモデルたちは仇つぽく賢く笑っている——御苦勞様にも羊飼の風をしたり、ギリシヤ女神の風に粧ったりして

ある。舞台上におけるが如くちやんと筋書はのみ込んでいって云う嘲笑に似たにこやかさである。彼女らを描いた画家たちは真実以外のものは何でも知り何でも出来る連中であつた。そして一方、描かれた彼女たちは自分自身余りに真実だから、真実以外のもの

手許におくのに手頃な美術辞典類を新旧刊書の中から紹介しましう。

西洋美術辞典（今泉篤男、山田智三郎編東京堂版昭和九年初版）は西洋美術に関する大体の事項を平均して集載しており、事項はもつとも豊富です。日本美術辞典（野間清六、谷信一編東京堂版、昭和七年初版）はその姉妹編をなすものです。近代絵画事典（滝口修造編紀伊國屋書店刊、昭和三年初版）はフランスのアザン社編集の事典を訳したもので印象主義から今日に至る近代絵画の流派と作家をアルファベット順に配列しています。また近代美術事典（内田淑、嘉門安雄他編白楊社刊昭和六年初版）は十九世紀以後を扱っており、美術を社会思潮的な角度から取上げて



＜歌 姫＞ クリシェ・ヌールダン

力も失つて了つたが、これら失つたものを唯繊細と敏感において取返そうとした連中である。事実取返しは

余りに真実だから、真実以外のもの

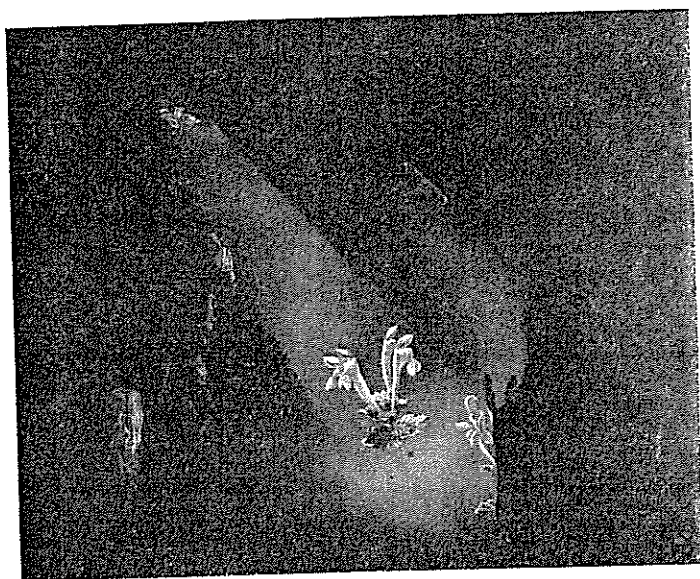
余りに真実だから、真実以外のもの

余りに真実だから、真実以外のもの

京都市 美術館ニュース No.43

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園

昭和37年10月8日発行



北 脇 昇 <眠られぬ夜のために>

京都におけるシュール・リアリズム 常設展にちなんで 今井憲一

昭和の初め頃、京都には二科展に出品するグループが二つあった。一つは白雲会を中心とする関西美術院の人たちで、もう一つは津田青楓洋画塾の塾生たちであった。津田塾は昭和三年秋、鹿ヶ谷に画室が出来てから、西村五郎氏を幹事として発足したのであったが、二、三年後に、塾を二分して東京にも進出したのである。東京塾は、荻窪の故田寛治氏の二つの画室を買取ったもので、最初の半年間は私が幹事となって、そこに起居していた。

津田塾には、それ以前、昭和五年に青楓師が河上肇先生の立候補に応援演説をした頃から、P・Pからの働きかけが始まっていた。従って、矢部友衛氏や岡本唐貴氏らを迎えての会合もしばしば持たれたもので、東京進出の頃には、塾内での左右対立が可成りはげしくなっている状態だった。

青楓師が問題の大作『ブルジョア議事と民衆の生活』を二科展に出品されたのが昭和六年であったが、昭和八年の夏になつて、ついに先生が河上氏シンパ事件で検挙される事態となつたのである。二十日間余りの拘留は、余程身心に堪えられず、青楓師は出所と同時に転向を声明され、以後洋画は描かないと誓われたのであった。これには塾生一同も大いに驚いたのであるが、先生を失って宙に浮いて了った津田塾は、結局解散するより外はなかったのである。

塾を失った私たちは、同時に二科展からも遠ざかる事となり、新しく研究所を持つ計画を練った末、同年秋、独立美術京都研究所の誕生となったのである。この研究所の設立と経営は、すべて北脇昇君、池田治夫君らの奔走によるもので、その努力は実に大なるものであった。以来、研究所は二十六年の歴史を持ち、その間移転する事、実に十数回、昭和三十四年四月研究室の全焼と共に終止符を打つまで、つづいたのである。

(次頁へ)

展覧会案内

美術館

20日—26日

京都版画家集団展

28日—8月6日

上京児童美術研究所展

8月10日—12日

第十六回市民美術展
書道祭展

21日—26日
25日—26日

京都府ギャラリー

第六回京都日本画家新人展

7月1日—4日

宇田萩邸素描展

7日—11日

京都二紀クラブ展

13日—17日

仏像彫刻展

18日—22日

京都市図案展示会

23日—24日

日本室内装飾織物展

25日—26日

グループボウ展

28日—8月1日

第三回くれ美術展

8月3日—7日

第二回銅版画展

9日—12日

青楓会日本画展

14日—17日

ゼロ美術展

18日—22日

大丸画廊

東西巨匠展 7月3日—8日

陶芸展 17日—22日

竹杖会展 24日—29日

大丸洋画展 31日—8月6日

大紅会 8月7日—12日

光会 13日—19日

高島屋画廊

第四回青丘展 7月10日—15日

丸物画廊

大和古社寺拓本展 7月1日—5日

女流陶芸五人展 7日—12日

山岡恒二個展 13日—19日

消防写真展 8月3日—9日

京都写真サロン展 10日—16日

複製名画即売展 18日—31日

土橋画廊

山本正平個展 7月1日—3日

祇園会館 10日—15日

日本画小品展 20日—22日

二十代美術展 24日—29日

樹々会展 8月1日—5日

戸田英二個展 8日—12日

三交会展 14日—19日

新作日本画大森運夫個展 21日—26日

京都書院画廊

品角ジョウジ個展 7月13日—16日

図研オリジナルデザイン展 8月3日—6日

マロ二工画廊

立命大美術部展 7月1日—3日

京大美術部展 5日—7日

三菱銀行美術部展 13日—15日

第四回日写美術展 19日—21日

京都スケッチ会展 8月17日—18日

撰美堂画廊

池田進郎個展 7月22日—24日

さんけい画廊

第24回さんけい展 7月24日—31日

逸翁美術館

茶わんの歴史展 9月16日まで

京都国立博物館

常設陳列 7月31日まで

祇園会山鉾見返織物陳列 19日—31日

大和文華館

壇輪、彩陶、書画、古伊万里展観 7月29日まで

友の会だより

盛況の奈良見学会

友の会では見学会をさる六月十日に行われました。心配された雨もあがって百五十の参加者がありました。このためはじめ二台を予定していたバスを一台増すほどの盛況でした。美術館から出発してまず当麻寺へ。そこで美術大学教授佐和隆研先生の解説を聞いたのち、庭園や金堂、講堂などの仏像を見学しました。次いで法隆寺でも五重塔や金堂、宝蔵殿などを拝観しましたが、この日は天候の加減かいつもなら非常にこみ合う寺域も人が少く観賞には好都合でした。

三十七年度の役員

友の会の三十七年度の役員が次

委員長	大野 毅
副委員長	左京区岡崎円勝寺町
(監査担当)	田畑 隆平
伏見区深草僧坊町三三ノ三	
委員	中村 茂一
東山区新門前	
通町手東入	
大西 春江	
上京区御所御	
苑内白雲神社内	
吹田百合子	
中京区富小路	
二条下ル	
松平 千秋	
左京区北白川	
西瀬ノ内町五	
伊藤幸治郎	
中京区三軒町	
二条上ル	
重 達夫	
京都市美術館	
菅原 稔	

市民美術展の作品募集

早いものでことしも市民美術展が近づいてきました。春の京展は主に専門家が参加する鑑賞のかなり厳しい展覧会ですが、それに比べて市民美術展はアマチュアだけの極く気軽な展覧会です。夏の暑さのどきに絵をかくのも一興かと思えます。その成果をふるって出品されるよう期待します。

募集作品
日本画 (必ず枠をつけて下さい。掛軸は受け付けません)
洋画 (水彩、パステル、版画を含む)
彫塑 三科とも寸法の制限はありませんが、陳列に不適当なものは受け付けません。一人2点以内。
出品資格 京都市民或は京都市内に勤務又は通学する人。但し専門家及び中、小学生を除く。
出品料 不要

研究所開設当時の独立展は、フォーブ
一色と言つていい様な状態で、独り福沢
一郎氏のシュールの傾向が異色を示し
ていた。京都の研究生は割合写実的な傾
向のものが多く、フォーブには太刀打ち
出来ない様な暗さがただよっていた。

それ迄に京都に現れた新感覚の作家
と云えば、僅かに、津田塾時代に、私と
同期生だった下郷半雄君があるだけで、
彼は早くから抽象的な構成を以て、塾風
に対してレジスタンスを示していたが、
彼が日本のシュール・リアリストとして
海外に紹介されたのは大分後の事であ
る。

さて、独立の研究所で、最初にシュ
ール・リアリズムに陥つたのは、北脇昇
君であった。写実的な作家が、『無意識
の生』につながる『不合理の世界』へ移
る事は、自ら川を飛び越して彼岸に渡る
事に他ならない。彼が鹿子木塾から津田
塾を通して習得した技法は、思い切つて
投げ捨て、裏がえす必要があった。そこ
でこの転向についての理論的裏づけを得
るために、盛んな画論が繰返され、それ
が他の研究生に大きな影響を与えてい
たのである。

北脇君が最初にとつた方法は、従来の
油絵筆を捨てる事、つまり新しい技法に
は新しい道具を使え、と言う事であつ
た。即ちローラーでの地塗り、霧吹きで
のぼかし、フロッタージュ等がそれであ
つた。そして次第に幻想的な作品が生れ
始めて、後には、理論の発展と共に絵画

の図式化にまで移行したのであつた。

これと対照的なのが小牧源太郎君で、
彼は研究所へ入所した当初より、独自の
技法で作品を作り始めていた。伝統的な
技法には頭から染つていなかったもので、
転向の苦労はなかった筈である。自分の
世界が、独特な自分の技法を生み出す、
生え抜きのシュール・リアリストだと言
えよう。彼の場合、彼が絵画を始める以
前に仏教哲学を研究していたと言う事
も、見逃す訳にはいかない事であろう。

その頃研究所では、独立展入選者の中
心として新日本洋画協会を結成し、毎
年、作品展を開催していた。シュールの
作家も次第に多くなつて、北脇、小牧
両君の外に、高木四郎、松崎八笑亭、島
津冬樹、原田潤、吉加江清、小石原勉、
川元進らの諸君が活躍していた。変つた
所では、『忘れられた子等』で有名にな
つた田村一二君や、現共産党市議の神野
七五三男君もシュールをやつていた
のである。が、外に、井沢元一、三水公
平、安田謙君ら、シュールには余り深入
りしなかつた作家も多数あつた事は勿論
である。

北脇、小牧両君が独立展で頭角を現わ
して間もなく、昭和十四年に美術文化協
会が生れた。簡略に言う、これは独立
展の中堅作家から約四十名が、福沢一郎氏
を擁して、独立美術から分離したのであ
つて、はつきりとシュール・リアリズム
を旗印にして立ち上つた団体であつた。
シュール・リアリズムの全盛時代が来た
のである。この旗挙げは京都の研究所に
とっても大きく大きな問題であつた。何故

なら、これに参加する事は、一応研究所
を去る事になるからである。

各自熟考の結果、美術文化協会の結成
や展覧会に参加した京都関係の人は、北
脇、小牧、下郷、三水、吉加江、小石
原、川元の諸君であつた。前衛分子が去
つた後の研究所は、必然的にやや保守的
な立場に立つ事になったのである。

併し乍ら、美術文化の天下は余り永く
つづかなかつた。日中事変が深まつて大
平洋戦争に突入する頃から、前衛芸術
特にシュール・リアリズムに対する当局
の弾圧が始まり、一切の『自由』が許さ
れない状態となつて来たからである。昭
和十六年、東京では福沢一郎氏等が検挙
され、審問が始まるという事態になつて
来た。これは『シュール・リアリズムの
思想的バックはコミュニズムである』
と言つたとかの問題であつた様だが、こ
の事件が京都のシュール・リアリストに
与えた影響も大きかつた事は言う迄もな
い。

戦時下のあの状態に於ては、一度にら
まれば最後である。ひそかに研究を続
ける事は出来ても、作品を発表する事は
無論出来ない。ではどうするかと言う問
題で度々話合つた結果、私が知り得た事
は、美術文化系の作家には『たとえ発表
出来なく共、研究はつづける』という意
見が多く、独立の研究所に残つた作家は
『大体、独立展の動向に従う方針だ』と
の考え方が多いと言う事だつた。因に、
その頃の独立展は、事務局、日本趣味
的な作品も現われ、やがて従軍作家の報道
絵画が主流となる様な気配を見つていた
のである。

所で、京都での前衛作家に対する当局
の動きはどうだつたであらうか。美術文
化系のシュール・リアリストが最前衛で
あつたにも関わらず、特高にマークされ
たのは意外にも独立の研究所であつた。
研究所にも幾分はシュールのな色彩が残
つていたとは言え、之はお門違いであ
る。

京都では、さきに『美・批評』の人た
ちが検挙され、つゞいて『京大俳句』の
メンバーが反戦思想の疑いで挙げられて
いた。私は以前から京大俳句の表紙を描
いていた関係上、永い間拘留されていた
同誌のN氏が、釈放されると直ちに私を
訪ねて呉れた。同氏がもたらして呉れた
情報に依ると、次の検挙はシュールの独
立研究所だと言う事で、私の名が筆頭に
書かれていたと言うのであつた。事実そ
の頃研究生の大半は、特高の刑事の訪問
や内偵になやまされて居り、ずい分苦情
を聞かされていたものであつた。こうな
ると私たちもこの誤解を正すために、種々
対策を講じなければならぬ。誠に面倒
な事であつた。

戦争が苛烈になるに従つて、若い作家
は殆んどすべて応召した。グループ活動
は停止し、画壇は美術報国会に統合され
てしまつた。シュール・リアリズムが全
く姿を消してしまつた事も止むを得ぬ事
であつた。

終戦後に復活した美術文化協会は、度
重なるメンバーの入れ替りで、すっかり
昔の面影を失つてゐる。そして今ではシ
ュール・リアリズムの復活よりも、抽象
画の発展の方が、大きな勢となつて押寄
せて来ているのである。(洋画家)

聞 談 見 紀

岡 部 三 郎



菊池 芳文 <小雨ふる吉野> 左半雙

菊池芳文の作品

芳文の作品は不思議なほど残っていな
い。小幡ならとにかく、それらしいもの
に、まだ出遇つたことがない。同年輩の栖
鳳や春華の場合とは非常なちがひである。
画家の浮沈はけしき、有能の画家でも忘
れられた人も少なくないが、芳文の場合が
ちがう。その第一の理由は、おそらく、芳文
の死が早過ぎたことであろう。院展が文展
から離脱した後、文・帝展の最も大きな支
柱となつた、いわゆる、最盛期の栖鳳の名
によつて代表される京都派の隆興期には、
芳文は、もう亡くなつていたからという方
がわかり易いかも知れない。

芳文の作品で一番よく知られてゐるのは
『小雨ふる吉野』である。いま館に陳列さ
れてゐるが、それだ。噂には聞いていた
が、見るのははじめてである。画面の通り
の六曲一雙の屏風。大正三年の文展出品作
だから、芳文は五二才ということになる。
芳文が亡くなつたのは、この四年後であ
る。大家に身近な題材、わかり易く入念
な描写と彩色、全体印象の適確な把握、当
時は、このように条件のそろつた花鳥画は
なかつたから、大変な評判になつたことが
記録にも残つてゐる。館でも、幾度か、収
蔵品候補に挙げたが、実現はしなかつ
た。惜しいことに、館がやつと接収解除に
なり、再び活動をはじめた矢先に国立近代
美術館が買上げてしまつた因縁もある。

もう一つ、やかましくいわれる芳文の遺
障がある。和蘭ハグの平和宮のために描
かれた綴織壁掛下図である。一八九九年ロ
シア皇帝ニコライ二世の招請で開かれた世
界平和会議の議場となつたヒュイス・テン

・ボッシュに、この壁掛を政府が寄贈する
ために草案を芳文に依頼したもので、この
下図が、いまでも京都のある織物会社に残
つてゐる。大正二年に着手、三年を要した
六面で、室内の三面は芳文、他は門弟の耕
雲・霞峰・春峰の三人を助手として仕上げ
られてゐる。『小雨ふる吉野』と同時期
で、これらの仕事は芳文の死因となつたほ
どの精魂の入れ方だつた。しかし、もとも
と製作目的のちがう草案だから『小雨ふる
吉野』が現在確認できる只一つの主要作品
なのである。記録が正しければ宮内省や政
府の買上げたものがあるはずなのに、まだ
確認されてゐない。しかし、地元の美術館
としては是非一点は欲しいところである。
でない、館の収蔵体系に、大きな穴があ
くことになる。わざわざ、ここに、とりあ
げたのも、そんな動機からである。

さきにも、いつたように、京都派が大正
から昭和にかけて文・帝展に大きな地盤を
占め、日本画壇の両雄として、東の大観・
西の栖鳳などと騒がれたころの京都では、
新旧かきかすの画壇が股賑を極めていた。
菊池は、もう、そのころには、契月が芳
文のあとをついでいて、栖鳳塾・春華塾と
共に最も重い位置にあつた。芳文は、その
創設者であり、この京都派の隆興の礎を据
えた先達の一人でもあつた。

芳文が生地大阪から上京して幸野模範の
門に入つたのは明治四一年一九才のときで
あつた。二つの若い栖鳳も二年ほど後に
入塾した。一番若い春華が、同じ四条円山
系の森寛齋の門に入つたのも、さらに二年
ほど後であつた。このころは、京都の維新
の戦禍から、やつと立ち直つたばかり、画
壇でも、渾沌の中に、ほのかに曙光を見出
し、新しい明治絵画への第一歩を歩みしな

がら踏み出したばかりの時期であつた。こ
の前進の真先に立つて、誰よりも大きな
叫を挙げたのが芳文らの師匠模範であつ
た。芳文らは、このような時期に修業時代
を過した。燃熱の頂点にありながら、すで
に衰頹を見出す時期もあれば、衰頹の谷間
と見られながら、次ぎの時代を準備する時
期もある。芳文の修業時代は、この後者と
いえるだろう。作品の上では谷間と見られ
る、この時期にも新しい動向が見られるの
である。そこで注目されるのは四条円山系
と文人画系(南画系)の動きである。さら
に後に前二者に代つて興つてくる大和絵系
は前者の中に埋没してしまつて、まだ目立
つた存在ではなかつた。これらの中で、時
期からいふと、先づ早いのは文人画の動き
であつたろう。明治改元直後の過渡的世相
の一つである旧物破壊という日本画の大受
難期に文人画だけは別格であつた。画家は
文人画を描かなければ生活ができなかつ
た。理由はとにかく、何らの成果も遺さ
ず、一〇年代に入ると、目に見えて衰えて
しまふからである。京都でも同じであつ
た。しかし、私のいうのは、区別はしがた
いが、伝統と創造とが、もつと根の深い位
層でつながつてゐる動きである。一口でい
うと、京都は可なり事情がちがう。例えば
宇治黄檗山万福寺は、ずっと後まで南画家
の聖地となつた。他の多くの画人も、ここ
を訪つてゐる。富岡鉄斎も、このような背
景の中から浮び上つて来る。富田溪仙だつ
て全く関係がないとはいえない。芳文・栖
鳳の作品にも南画系の要素は多分に見られ
る。しかし、芳文らは、はつきりと、自分
らの画統である四条円山を旗しるしにし
た。(当館嘱託)

京都市 美術館ニュース

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和38年1月31日発行

No.44

特集 須田国太郎遺作展



須田国太郎 「河原」 昭和14年

展覧会 案内

10月

大丸画廊

第24回青竜展 10月2日—7日
現代大家彫塑展 9日—14日
現代巨匠展 16日—21日
平川敏夫個展 23日—28日

高島屋

第9回日本伝統工芸展
10月30日—11月8日

丸物画廊

雲煙社展 10月6日—11日
ニエスニ芸術展 13日—18日
平安桜楓会展 20日—25日

土橋画廊

酒見恒平個展 10月3日—7日
福井勇個展 10日—14日
丹美工芸展 18日—21日
為本自治雄洋画展 23日—28日
花房英樹油絵展 29日—31日

京都書院画廊

青年美術作家集団展 1日—5日午前
三田村宗次個展 1日—5日午前
木村重森個展 5日午後—8日午前
京都外語大学美術展 15日午後—17日
第4回三余会展 19日—22日
同志社大学スケッチクラブ展 23日—26日

同志社大学鞍馬画会秋季展 26日—29日

第5回ダンダラ作品展 29日—11月2日

マロニエ画廊

日本画2人展(木村勝美、竹内浩一)

9月29日—10月2日
平安女子短大水墨画研究部展 10月3日—5日

殿内泰祐個展 6日—9日

岡島頼子油絵個展 11日—14日

中立カルチュラルクラブ美術 16日—18日

洋画教室展 16日—18日

日本画2人展(三好多恵子、川口香都子)

デザイン2人展(有坂裕子、竹下美和子) 28日—30日

大阪市立美術館

明治美術名作展 10月18日—11月18日

市立神戸美術館

南蛮美術展 9月15日—10月25日

逸翁美術館

館蔵品総合鑑賞特別展 10月1日—12月16日

美術シーズンの話題

今年も美術シーズンである。美術雑誌などの言葉づかいをみると、「また美術シーズンがきた」という風にまるで厄介者がきたような口ぶりであるが、それはいささか失礼というものだ。東京ですでにシーズンたけなわで、すでに青龍、二科、行動、院展などは展覧会を終了している。しかし雑誌の十月号あたりでは、こういう国産美術展関係の方はごく簡単な紹介程度で、サロン・ド・メイが主賓である。サロン・ド・メイは昭和二十六年以来十一年ぶりのことで「悪人に会うような」という表現も見当る。事実、戦後の日本の絵画に与えた影響は甚大なもので、洋画が今日にみるような様相を示すに至った集団的な最初の刺激となった。刺激の第二段はアンフォルメルを招来した「世界・今日の美術展」だろう。

さてこの十一年ぶりの展覧会は、見ていないからしかとしたことは言えぬが、サロン・ド・メイ自体も変れば、日本の絵画にも当時とくらべて大きな変化があったので、第一回展の時はどの感銘がないというのが一般の評価である。「ただフランスの雰囲気はある」という。これまた見方によっては無愛想なごあいさつである。

しかし、秋に陸続として開かれる日本の団体展は「ただ日本の雰囲気はある」ということになるのかどうか。たしかに日本の雰囲気はあるに違いないが、フランスの「雰囲気」にくらべて絵画としてはどちらが上なのか。おそらくサロン・ド・メイは関西にも来訪するだろうから、それは彼我相照してみたいうえで考えればよい。ただこういう風に彼我相照してみたいという操作をしなければ秋の美術が食欲をそそらないとすれば、国産美術の方にも相当問題があるというものだ。

(F)



唐招提寺礼堂 昭和7年頃

昭38	昭36	昭35	昭34	昭32	昭31	昭30	昭27	昭25	昭23	昭22	昭20	昭17	昭16	昭15	昭14
1963	1961	1960	1959	1957	1956	1955	1952	1950	1948	1947	1945	1942	1941	1940	1939
	70	69	68	66	65	64	61	59	57	56	54	51	50	49	48

6月、左京区南禅寺草川町に転居する。
4月、東京銀座の資生堂において個展を開く。
5月、「須田国太郎作品選集」(弘文堂)を刊行。
4月、大阪美術新論社画廊で個展を開催、7月、渡邊大同雲崗などにもおむく。
10月、大札記念京都美術評論員となる。
7月、日本芸術院会員に任命される。
4月、京都市立美術専門学校講師となる(昭和24年9月同校客員教授、昭和25年5月京都市立美術大学教授、昭和31年7月昭和32年5月同大学学長代理、昭和35年8月名誉教授)。
3月、京都工芸繊維大学工芸学部(昭和27年5月まで)、5月奈良学芸大学の(昭和33年3月まで)それぞれ講師となり、実技を担当。
4月、京都学芸大学講師(昭和31年2月まで、西洋画実技)となり、8月京都国立博物館評議員となる。
画集「須田国太郎」(日本現代画家選、美術出版社)刊行される。
3月、第28回ヴェニス・ビエンナーレ展に出品する。
2月、神奈川県立近代美術館で北川民次との二人展催される。2月より吐血があり療養につとめたが7月京大病院に入院、肝硬変と診断され、11月一時退院のち、12月再び京大病院に入院し、以後4年間入院生活。
1月、昭和33年度の毎日美術賞特別賞をうける。6月東京および大阪の高島屋で自選展催される。
8月、京都国立博物館評議員を退く。
10月、京都市篤志者として表彰される。12月16日肝性昏睡のため京大病院で死去。従四位勲三等瑞宝章を贈られる。戒名 芳雲院釈宣美。
「須田国太郎追作展」京都と東京で開かれる。

グレコ 復活(模写) 大正8-12年



走鳥 昭和28年



昭9	昭8	昭7	昭3	大15	大14	大12	大8	大7	大6	大5	大2	明43	明37	明34	明24
1934	1933	1932	1928	1926	1925	1923	1919	1918	1917	1916	1913	1910	1904	1901	1891
43	42	41	37	35	34	32	28	27	26	25	22	19	13	10	

6月6日京都市中京区堺町六角下ル甲屋町に須田彦太郎、フジの次男として生れる。
日彰尋常小学校卒業後、第五高等小学校に入学。
京都府立第一中学校に入学、図画教諭横山常五郎の教えをうける。
第三高等学校第一部兩類に入学、油絵をかき始めるとともに、謡曲をも習う。
京都帝国大学文科大学に入学。父死去する。
京都帝国大学文科大学の哲学科(美学美術史専攻)を卒業、続いて大学院に進む。母死去。
関西美術院に入学。
京都帝国大学大学院を退学。
2月外遊の途につき、インドで数カ月を過ごしたのち、パリを経てスペインのマドリッドに入る。以後4年間ここに居をかまえてブラダ美術院に通い、ティントレット、グレコ、ゴヤなどの作品を模写する。また、欧州各国を歴訪。
夏帰国する。
3月、和歌山高等商業学校講師となる。12月、滋賀県出身の松居絹子と結婚し、京都市北区出雲路松ノ下町に新居を構える。
この頃川端康成の「アトリエ」に通い、人体デッサンを行う。
関西美術院に「丘上の村」と題して滞欧中の風景を出品。この前後関西美術院に毎年出品する。
3月、この年度より翌年度まで京都帝国大学文学部講師となり、ギリシャ彫刻史概説を講義。9月、東京銀座の資生堂において最初の個展を開く。
11月独立美術京都研究所の創立に際し、学芸員となって同研究所の指導に当る。
3月、独立美術協会の会員となる。11月、大札記念京都美術館、東京銀座の日動画廊においてそれぞれ個展を開く。

須田国太郎略年譜

歴

須田国太郎画伯を憶う

不世出の画家

井 島 勉

私が須田先生を知ったのは昭和のはじめ京都大学文学部に入学してからのことである。そのころ京大美術会というのが時々開かれていて、研究発表を中心に卒業生や在学生が出席していた。卒業生である須田さんもその常連で、熱心な学究の一人であった。

私はまもなくこの会の幹事をひきうけたので須田さんとは一層親しくおつき合い願えるようになった。

須田さんはどちらかというと無口な方である。しかし話はずむと大いにその仲間入りをされるし、とくに西洋の文化、風土、美術の話ともなれば果敢雄弁になられた。私たちはきき役に回って興味深く拝聴したものである。そうかと思うと時々いねむりをなさった。ところが目をさまされると、いろいろとされる質問がねむっていた間の話題とびつたりで、まことに的を射ている。実に特異な才能であるといつも感心させられた。



須田国太郎氏

私が卒業する年の予餞会
は下鴨の蕨庵
で開かれた。
植田教授をは
じめ、初代の
深田教授、そ
れに太田喜二

文は、当時唯物的な考え方に走り勝ちだった若い研究者たちに、絵画の持つ意味の深さを教え、視野を広げる事に大きく役立った点で、今でも記憶に残っている。

当初、先生の指導は講義が多く、研究所が室町へ移転した頃には、連続して美術史等の講義を受けたのであった。ギリシャ彫刻史、ルネッサンス美術史、遠近法、その他社寺建築の構造に到るまで、先生のお話は尽きず、実に有益であった。これらの講義をプロモートし、あらかじめプリントを作ったりして呉れたのは北脇昇君であったが、私たちは先生の博識を、興味深い雑談の片々にまで感じて、只々傾倒するばかりであった。

実技に於ける先生の指導は、これ又懇切を極めたもので、デッサンの実地指導から作品の批評まで、三時間以上休まずに行われるのが常であった。研究所存続二十六年間を通じて続けられたその努力は、実にはかり知れないものである。

先生の作品批評は誠にきびしいものであった。併し乍ら、如何なる種類の作品に対しても、最初からその描方を否定される事は絶対になかった。『なかなか面白いですな』と初めに口を切られて、それから次第に難点を指摘して行かれるのであるが、画面の隅々、サインの仕方にも到るまで批評が及ぶのを聞いていると、結局、鋭くきめつけられている事を悟らざるを得ないのである。

先生が研究生に対して特にやかましく言われた点は、動物を描く時にはその骨格を、建築物に於てはその構造を、植物ではその性格の特徴を、正しく描めと言う事であった。だから先生の指導を受けてからは、家を描くにしても一本の柱をおろそかに出来ない。研究生たちの写生に際しての態度が非常に慎重になった事は事実である。

それからまた反面には、先生は怪奇美にも相当興味を持っていられた。だからその種の傾向の作家を繰返し、

郎画伯らの顔もみえたが、席上私は須田さんに謡曲をうたつて下さるよう所望した。しかし須田さんはこれだけ飲んだらだめですとなかなかきかして下さらない。私があまり強引にたのむので、とうとう一曲きかして下さった。謡は三高時代から年譜を入れられていたもので、その「鉢の木」は見事なものであった。ところが謡い終わられた先生は床の間を枕にしばらく横になってしまわれた。酒の上の謡はよほどお体にさわられたのだろう。

戦後、京都市立美術専門学校をいまの美大につくりかえなければならぬ時代がきた。私も大学設立の設置委員をおおせつかった。そして京都に発足する美術大学としてどんな課目をおおなければならぬか、どんな先生をお迎えすればよいかを協議したわけである。

そのとき私は美術の大学に須田さんをぬきにとしては話にならないと考え、委員のみなさんの賛同を得て、御出講を頼みにいった。須田先生はじめは御免こうむる。時間がとられるばかりでいやです、とおっしゃったが、何度か足を運んで遂に承諾していただいた。私としては須田さんの学識、画家としての立派さ、人格からしてどうしても美術大学に欠くことのできぬ人だと確信していたので、その承諾はうれしかった。

いまだ数年前美術大学は学長選出問題で京都市と対立した。私はそのとき外国旅行に出ていたが、たまたまパリで彫刻家の菊池一雄君に会ったときその話をきいた。

須田さんは学長代理ということでトラブル解決に尽力しておられるということだったがさぞお困りだろうと思ふた。

話題にされ、それが常識的な作風になって行くのを、よく残念がられたものである。先生は写真面で非常に厳格であつたけれども、決してデフォルムを否定されていたのではない。場合に依つては、面白さの少ない常識的なフォルムに対して『世の常のものになってしまったですな』と評される事がしばしばあつたのである。

批評に際してのこのきびしさは、先生の作品に於て終始はつきりと現れている。対象の適確な把握は他の追随を許さぬものがあるが、それは決して単なる写真に終つてはいない。大胆な筆触と省略が、絵画の本来の生命たる抽象の効果を發揮して、そこに伝統の精神が生きて、しかも近代的な新しさがあふれているのである。

『暗さが中になお暗い暗さ』と言う言葉を私たちは先生の口から何回とも知れず聞いたものである。先生の芸術は、この深く鋭く追究された『暗さ』の中から、必然的に発掘されて行った真実の『輝き』であると言う事が出来るであろう。(独立美術会員)

須田先生のこと

上 田 秀 雄

昭和三十年頃まで須田先生の絵はあまり売れずに、常に愛好家からソッポをむかれるという傾向でした。業界でも二、三人は大いに宣伝に尽しましたが、一般の観賞界に受け入れられないのはどうした訳だろうかと思いをいためていました。このような立派な先生の作品がどうしてこんなに安いのか、絵の価値と価格とは一致しないものであるということがハッキリ証明されるようです。

しかし先生は、自分の絵が売れるとか売れぬとか言う事は問題でないらしく、世間の批評がどうあろうと「芸

間もなく私は帰国して早速須田さんにお目にかかったが、その話の中にも、下手をすると美術大学はつぶれるかも知れない。何んとかしなければならぬという責任を強く感じておられたようであった。

私はそれ以来、半年ばかりこの問題解決のお手伝いをした。そしてトラブルがおさまったある日、須田さんはアラスカに私や京大の鳥養利三郎さんを招いて、お世話になったという意味の夕食会を催して下さった。いつか手に入れた上等の白ぶどう酒を家からわざわざもって来て下さったが、その時須田さんの顔色が悪いように思えた。そしてしばらくしてテーブルにつこうとした直前、席を離れて吐血されたのだ。いつからお悪かったというようなことは知る由もないが、学長代理時代の心労が病勢を進ませたであろうことは確実である。そしてそれはこの不世出の画家の不幸な病床生活のはじまりとなった。(1月12日京都公会館での須田国太郎遺作展、ピカソ・ゲルニカ展記念講演会の講演から)(京大教授)

研究所と須田先生

今 井 憲 一

京都の独立美術研究所が創設された昭和八年には、須田先生はまだ独立美術協会の会員ではなかった。併し研究所は先生を講師として迎え、毎木曜日の夜に、親しく指導を受けていたのである。

研究所の機関紙『トワール』の第一号には、先生から『絵の絵画』と題する原稿を頂いて掲載した。この一

術といふものはこんなものである」という信念の下に、堂々とわが道を貫かれました。

たまたま自選展前後より、東西の観賞界が先生の絵を再認識するようになり、先生の作品を希望する人も増し、自然依頼者も多く、値段もどんどん上ってきました。しかし先生はそんなことに頓着なく、相も変わらずコツコツと自分の信ずる道に進んでゆかれました。思うに真の芸術家というものは、大衆より十年、二十年先を歩んでいられるのじゃないかと云うことです。一時暗いといわれた絵や、突飛と思われた絵が、やがて一般の常識となるまでには或る年月が必要じゃないでしょうか、観賞家の眼が開かれるにつれて、一つの絵から今迄わからなかったよいところや、気付かなかった作家の意図などがわかり、その絵は益々光ってくるようです。実に宝石のようなものではないでしょうか。

ある日先生の御宅へお伺いしますと、さあどうぞどうぞと、二階の書箱に埋もれた汚い画室の中でこんな話をされました。「絵の真偽を見分けることは大変むづかしいことです。骨董屋で三十年も年譜を入れた人のカンは一見してすぐにその真偽を見分けるけれど、その絵の高い低いということはなかなかわからぬものらしい。学者の間ではその絵の高い低いはわかるが真偽を見分ける人は少ない。双方兼ね揃えた人は稀ですね」といわれたことを思い出します。先生は学識といふ経験といふ申し分ない方ですが、更に一步一歩向上して双方兼ね揃えた人になるよう努力していられた態度は、真に頭の下る思いでした。

三十二年に入院されて以来数年、病床にあつても常に洋書や美術書を枕下に於て読書していられた様子を見て、偉いなアと思いました。今後須田先生の絵が益々光を放つて、少しでも多くの人達に愛好されんことを希って居ります。(竹栄堂主人)

京都アンデパンダン展作品募集

新たに版画部門を新設

1963年京都アンデパンダン展を3月に開催します。

1957年に創設された本展は、ことし第7回を迎えますが、作家、美術愛好家にとつてもなじみの深い、関西における主要な美術展の一つとなりました。本年からは絵画、彫塑部門のほかに版画部門を新設し、会場も2階全室に拡充しました。

現代美術の新生面をひらく場として、貴殿のさかんな御出品を期待します。

主 催 京 都 市

会 場 京都市美術館

会 期 昭和38年3月6日—12日

賛 助 者 井 島 勉 今 泉 篤 男
針 生 一 郎 矢 内 原 伊 作
会期中の3月10日(日曜)午後1時から当館で賛助者を囲む現代美術についての討論会を開く。

募集作品 絵画、版画、彫塑(作品の寸法形態については別に制限しませんが、設備、陳列作業に限界があり

ますからその点を考慮して下さい)

出 品 料	1入1点	300円
	2点	400円
	3点	500円
	4点	600円

(ただし出品は4点まで、出品料は作品搬入とともに納入のこと)

搬 入 昭和38年3月3日
午前10時—午後4時
京都市美術館

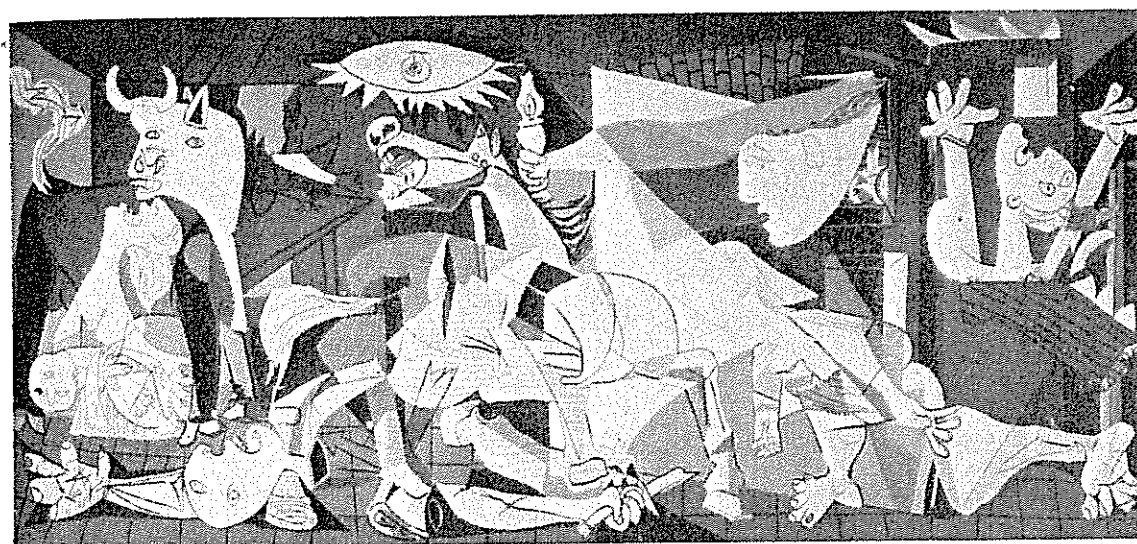
搬 出 昭和38年3月13日
午前10時—午後4時

作品保管 上記搬入日から搬出日まで主催者は善意をもつて作品を保管しますが不慮の災害による損失は補償しません。

昭和38年1月

京 都 市 美 術 館

京都市左京区岡崎公園内
電話吉田⑦4107・4108



『ピカソ・ゲルニカ展』

スペイン北部、フランス国境に近く、ビスケー湾に面したバスク地方にゲルニカという小さい町がある。人口約三千六百というから村といった方がよいかも知れない。ナチス飛行機の空襲を受けることさえなければ、こんな小さな町が世界中で有名になることはなかったろう。空襲を受けたのは一九三七年(昭和十二年)四月二十八日のことであった。当時スペインは共和国政府軍と反動フランコ軍との戦いの場となり、それにナチス軍の内乱介入も加わって、スペイン国内は悲惨な様相を呈していた。ゲルニカに加えられた空襲も実にひどいもので、無防備のこの小さな町に反復攻撃をしかけ住民の大半を殺してしまつた。

当時母国をはなれてパリで画家生活が続けていたピカソは、同胞に加えられたこの理不尽な仕打を世界にうったえ、他国から見放され、孤立して悲惨な状態に落ちていく母国に対する悲しみの気持を表わさずにいらなかった。

ピカソはゲルニカ被爆二日後の五月一日に仕事にとりかかった。その日は鉛筆でコンポジションを三枚、馬のデッサン二枚、二日目は鉛筆デッサン四枚と油絵で馬を一枚、という具合に習作をつみかさねていった。「ゲルニカ」の大作が出来上つたのは六月中頃であつたといわれ、これはその年七月にパリの万国博覧会のスペイン館に壁画として展示されて

人々に大変な感動を与えた。

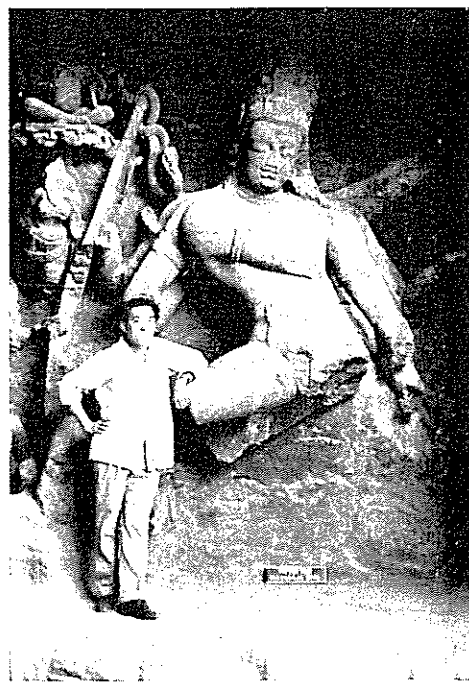
この大作はその後アメリカに運ばれ、今はニューヨーク近代美術館に納められている。縦三・五二、横七・八二、カンバスに油絵でかかれた大作である。基調となっている色は黒と白で、死んだ児を抱いて泣き悲しむ母親、腹をうち抜かれた瀕死の馬など悲惨な場面が、大画面いっぱいピカソ独特のデフォーメーションで強烈にえがかれている。このピカソの代表傑作は今日なおピカソ自身の所有に属し、将来スペインに民主的な共和政体が樹立され、真の平和が到来した時にはスペイン国民のものになるということである。

今回の展覧会に出品されているのは、原作をほぼ同寸大にうつしとったタピスリーと、習作六二点である。原作は壁面にはめこまれていて取はずせないため代りに出品されたものである。材料が違うため感じはいくらか異っていると思われるが、ほぼ原作の姿は想像出来る。ただピカソの代表傑作ゲルニカとしては、大壁画のみならず、それをめぐっての一連の習作をも併せて考えるべきもので、ピカソは大壁面が出来上つてからも同じ泣く顔のモチーフを繰返し扱って、その年の十月十七日まで続けられている。今度の展覧会ではそれらをまとめて鑑賞出来る稀有の機会である。なお、ピカソがゲルニカに取かかる以前の作であるエッチング「フランコの夢」にも含まれている。

京都市 美術館ニュース

発行所 京 都 市 美 術 館 京都市左区岡崎公園 昭和38年6月25日発行

No.45



インドでの下村氏

世界気象旅行

1
下村良之介

約一年間、何処へ行くという目的も、なにを見なければならぬという義務もない気楽な旅行は約八カ月のヨーロッパ見物の末、当初のアメリカ廻りの予定を変更して、より強烈な地方色を求めて中近東から印度廻りにする。ローマから空路二十日間、アテネ・イスタンブール・ベイルート・テヘラン・カラチと各国の首都めぐりのような旅行の後、印度最初の土地ボムベいの空港についたのは十二月十九日の昼すぎ、エアーコンデションの機内から空港におりたつたとたんにむっと身体を包む熱風、暑いノそしてまぶしいノ。十二月というのに照りつける太陽はまるで日本の夏以上の強さだ、とてもサングラスなしでは眼もあいていられない。正に南国といった感じ。

空港でパスポートや予防注射の検査につづいて荷物の検査、カラチから持ち込んだウィスキーがひっかかり一さわぎ、そのうち係員がワイロの要求を始める。いよいよ印度らしきところになる。結局スタメンダの末ボムベイでは飲まないということにして係員の目の前でウィスキー瓶をトランクの下着の中にかくして空港からのバスに乗る。

空港ではまず女性のサリー姿に眼を奪われる。色とりどりの強烈な原色のサリーの女達は今までも老若きも黒一色の布をかむって顔も現わさない回教国の女達を見て来た眼にはまるで夜があけたように鮮やかに、まぶしいまでにまめめかしく映ずる。

市中に走るバスでは窓外の風景に驚く。人間が多いノ。ごみごみした家並みはこつたがえす人々で一杯、そのほとんどが焼けつくようなアスファルト道を裸足で歩いている。歩道の片隅にボンヤリ座っている男、街路樹の陰に寝転がっている奴、えたいの知れない食べ物を買っている広場の横では尻をめぐった子供が三人並んで大便をしている。道路がそのままベットであり便所でもあるのだ。今まで何処の国でも見られなかったすさまじい風景、この雑踏を見ていると彼等は人間というよりなんだか蠅の様な気がしてくる。二、三度大きなロータリーを通過したバスは一転して今度は近代建築の建並ぶすばらしく美しい街並みに入る。果然道を行く人々の服装も一変、このまま、ヨーロッパへ持っていったも堂々たる大都市といった美事な大都会だ。一つの都市におけるこの両極端ともいべき余り

展覧会案内

美術館			
2月	須田国太郎遺作展	2月12日まで	自由美術京都サークル展
	ピカソ・ゲルニカ展	2月17日まで	第9回尚院会展
3月	1963年京都アンデパンダン展	6日-12日	墨光社書画作品展
	美術館児童美術教室展	6日-10日	27日-3月3日
	美大作品展	19日-23日	15日-19日
	日本南画院展	25日-31日	21日-25日
	書窓展	30日-31日	
京都府ギャラリー			
1月	こぶし会展	28日-2月1日	マロニエ画廊
	グループ第一回展(美大四人展)	9日-11日	京都女子大総画部卒業展
	立命館大学美術研究部卒業展	11日-15日	1月
	第9回あすなろ会展	23日-27日	平安女子短大写真展
	第6回白申社展	30日-2月3日	24日-26日
2月	桐家利治油絵個展	15日-20日	第4回安寧美術教室展
	橘女子学院美術部展	22日-25日	27日-29日
	グループ玄展	25日-1月1日	伏見高校美術展
			30日-2月2日
京都書院画廊			
1月	平安女子短大染織クラブ展	25日-28日	2月
	グループ白展	21日-24日	京都白美会展
	平安女子短大意匠研究部グラフィックデザイン展	8日-11日	3日-6日
	寛谷幼稚園園画教室展	12日-13日	京都女子短大意匠研究部グラフィックデザイン展
			8日-11日
大丸画廊			
2月	藤井大丸画廊	2日-7日	2月
	毎日選抜美術展	2日-7日	チヤールル会展
	京都工芸美術展	9日-14日	5日-10日
	三井ギャラリー	1日-28日	牧人社展
	第29回さんけい画廊展	26日-3月5日	12日-17日
			19日-24日
			双樹会展
			26日-3月3日
高島屋画廊			
1月	京都美術懇話会員遺作展	29日-2月3日	

ピカソ・ゲルニカ展

会期 38年2月17日まで

料金	一般	団体
大人	150	120
学生	100	70
小	60	40

須田国太郎遺作展

会期 38年2月12日まで

料金	一般	団体
大人	120	90
学生	80	60
小	60	30

世界気楽旅行

にもはつきりした違いは、そのまゝ印度独特の社会を象徴している様だ。ボムベイ滞在中はこの両面のいろいろな人達とつきあってみる。印度人でありながらすべて英語だけで生活をしている上層の人々、その反面印度だけで二百数十語もあるという地方語の一つだけよりしか話せない下層の人々、つきあってみると期待した印度らしさはやはりこの蠅のような下層の人々の生活の中にありそう。いよいよ印度見物はこちらから蠅になることにした。幸いなことに知人の紹介で街外れの貧民街の真中にある日本寺の居候におさまることが出来た。これは蠅の生活にとび込むには正に好適の場所だ。壁にはヤモリがごそごそはついている室での生活、ドブ臭い水道で水を浴びるだけの入浴、本物の蠅が真黒にたかった料理をそのまま、木の葉の皿で手で食べる食事など、街のホテルを転々とした今までの旅行から一転蠅の様な印度人の生活に入るにはさすがにいろいろまじつくことも多かった。それでもつきあってみると蠅達のあたたかき、更に彼等の底抜けの純朴さにはすっかり感激

してしまふ。旅行の始めにボムベイから日帰りで行けるカルリー・バジャーやエレファント島の見物、これにおよそ旅行者などは乗れたものではないという三等車に乗ってみる。人と人とかかきあなる様な超満員の車内だがこどもも一等や二等では想像も出来ないような蠅達のあたたかい人情にふれることが出来旅行が一層たのしいものになった。

カルリー・バジャーなど印度の美術にふれてますますその労働力の大きいのに驚く。すべて自然の巨大な岩山の肌をこつこつと刻み込んでいて大きな室や仏像をあたたかも建築物のように残していったもののだが全く蠅でなければ出来ない大変な仕事だ。大きな岩肌一面に克明に刻みつけられた数々の彫刻も、一人の作家が独創的に作りあげるといった現代の芸術のようなものとはおおよそ違ったもので、そのいづれもが強大な権力者が出て職人達を一括教育して一大協同作業をさせたようないわば蠅達の生産物だ。それでいて充分迫力もありこの上なく美しい作品になっている。次々とこれらの古美術にふれているとだんだんに作品とは時代が作るものだという感じ



粉ひき女イティの小像

エジプト美術五千年展

エジプト美術五千年展が、さる五月二十六日から美術館で開かれています。この展覧会は、新興のアラブ連合共和国の好意で提供されたもので、カイロのコプト美術館および、エジプト博物館、アレキサンドリアのグレコ・ローマン美術館、カイロのイスラム美術館の所蔵品二百五十八点のほか、東京国立博物館所蔵のミイラも特別

出品されています。エジプト美術展に当って、アラブ連合共和国の文化、国民指導相アブデル・カデル・ハテム氏は「偉大な芸術的精神と、芸術作品の持主である日本国民こそエジプト永遠の作品の価値を正しくけとり、それらが文明の歴史にどんな貢献をしたか、またそれらを生んだ民族の子孫たちの素質と能力

とを、正当に評価するにふさわしい国民だと考えます」とのべていますが、約三分の一の会期を終った六月十五日現在、十七万人の入場者を数え、海外の美術界に対する興味と関心の深さを物語っています。

出品物は時代のうえでは、紀元前三千年以前の先史時代から、紀元前の各王朝時代をへてさらにグレコ・ローマン時代、コプト時代、イスラム時代と十五世紀に至るまでの長い期間にわたっています。

エジプトの美術という名で私たちが思い浮べるのは、古代王朝時代の厳肅感のある彫像であったり、スフィンクス、オベリスク、ピラミッドであったり、また墳墓を飾る壁画であったりですが、それ以降もエジプトの美術は長い歴史のすそをひいています。

紀元前四世紀アレキサンダー大王のエジプト征服以降、エジプトが急速にギリシア化された時代およびついでローマ帝国の属領となり、美術のうえでも、そのような

富本、稲垣両氏惜しまれて逝く

陶芸家富本憲吉氏と染色家稲垣総次郎氏が相ついでなくなりましたが、両氏ともそれぞれの分野において重要無形文化財保持者に指定されるほどの造才であつたので、その死は美術界はもちろん各方面からいたまれている。



富本憲吉氏（東山区山科御陵壇ノ後）六月八日午後九時三十分、肺ガンのため大阪府立成人病センターで死去した。七十七歳。

富本氏は陶芸界の長老として著名であつた。明治十九年奈良に生れた。東京美術学校（現東京芸術大学）図案科に学び、次いでイギリスに留学したが、彼地の博物館で東洋の古陶磁をみたことが、この道に進む端緒になったという。はじめ素焼からはじめたが、そのごく初期の作品をみても洗練された形態と模様の感覚にはすでに才質を暗示するものがある。次いで白磁と染付を焼いたが、秀抜な自然観察から生れた染付模様の詩情は、一人の注目をひいた。さらに上絵の研究に没頭し、けん然とした色絵の時代を生んだが、その集大成というべき金銀彩色絵の技術、芸術的な深味によって重要無形文化財保持者に選定された。

術と印度の美術との大きい意味での共通性の機なるものをあらためて感じ、同時に個人意識の強い芸術と、民族的・集团的意識の強い蠅の芸術について考えさせられることになった。（画家）

（下村良之介氏は丸善美術賞受賞者として約一年間、インド、中近東、ヨーロッパの各国を旅行、春度へ来て早々、西洋の中世の美



稲垣総次郎氏（右京区川島北裏町）六月十日午前五時半、京都府立医大病院で、転移性肺ガン、ガン性肋膜炎のため死去。六十一歳。

稲垣氏は明治三十五年京都に生れ、京都市立美術工芸学校図案科を卒業した。松坂屋図案部につとめたのち退社して染色研究に専念、染色美術家としての素地をみがいた。戦前は国画会工芸部同人として、戦後は富本憲吉氏の主宰した新匠会会員として活躍した。昭和二十七年から京都市立美術大学で教鞭をとり、三十七年「型絵染め」の技術によって重要無形文化財保持者に選ばれた。型染めは刀で型紙をはって染める染色技法であるが、稲垣氏の場合は何枚もの型紙を使わず、一枚型の中に自由に文様をいかしきった。型絵染めの技法自体は昔からあった伝統的なものであるが、稲垣氏は鎌倉以降の文様の研究のうえに独自性のある創作文様を創造した。

政治的事情を反映したいわゆる「グレコ・ローマン時代」さらに、紀元後五世紀ごろからキリスト教に帰依したエジプト人（いわゆるコプト人）の間で教会堂や修道院が盛んに造築され、美術上の新しい要素をおりなした「コプト時代」次いで七世紀アラブ人がエ

ジプトを征服し、マホメットが創始したイスラム教が流入し、文化がイスラム化されていった「イスラム時代」というふうにエジプトの土地に咲いたいろいろの質の異なる時代の美術を一堂にあつめています。（エジプト展は七月二十一日まで）

開館した国立近代美術館 立近代美術館 館京都分館

国立近代美術館の京都分館が、市勧業館の別館を改装して四月から開館されました。これで当館と京都国立博物館を合わせて京都には規模の多き三つの展観施設ができたことになりました。

開館した近代美術館は、東京の近代美術館の工芸分野での活動が絵画や彫刻にくらべると手薄であつたので、これをおぎなうことに力点を置くということです。京都には工芸の古い伝統

があり、いまでも盛んな生産地の一つですが、近代美術館はその活動を通じて、伝統技術と近代造形とを結び合わせ、さらに一品製作の工芸の技術や内容が大量生産に結びついていく場合のモデルをさし示すことも考えられているようです。もちろん東京の近代美術館で開かれた絵画展や彫刻展も折を見て展観されるでしょう。

開館記念展は「現代日本陶芸の展覧」[現代絵画の動向]でしたが、さらに「ビュッフェ展」に次いで7月6日から8月29日まで「工芸における伝統と現代」[現代絵画の動向2]が開かれます。

展覧会案内

美術館

6月
ニジブト美術五十年展
5月26日—7月21日
平安寺道展
28日—7月4日

7月
西陣・ニシキ・光明児童美術
教室児童作品展
6日—7日
鳳雛書道会展
6日—7日
太陽会展
10日—15日
生展
10日—15日
京都職場美術展
11日—15日

京都府ギャラリー

6月
朴土社展
26日—30日
7月
新制作日本画新人展
1日—5日
第10回木工芸展
10日—14日
京都日本画新人展
16日—20日
京都二紀クラブ展
26日—30日

土橋画廊

6月
白崎明個展
26日—30日
7月
寄々会展
2日—7日
二十代展
27日—31日

京都書院画廊

6月
陶芸四人展
28日—7月1日
マロニエ画廊
27日—7月1日

同志社女子大こぶし会展

7月
陶影展(中西洋祐・川崎洋秋・
亀井造酒)
3日—7日

大丸画廊

6月
武者小路実篤先生新作扇面展
18日—23日
海外古美術展
25日—30日

高島屋画廊

7月
日本画新生会展
2日—7日
錦銀装会展
16日—22日

初代加藤淡山作品展

7月
第5回背丘会展
2日—7日
岩田藤七新作画展
9日—14日
藤井大丸ホール
13日—18日

阪神百貨店丸善画廊

6月
近代絵画巨匠小品展
27日—7月9日
7月
深谷徹個展
11日—16日

山口牧生・泰森康二二人展
18日—24日

大阪市立美術館

中国絵画阿部コレクション名作展
7月10日まで

大和文華館

夏の展覧
9月15日まで

友の会

●総会
友の会では新年度を迎えさる五月四日午後一時から美術館で三十八年度の総会を開いた。総会は例年出席者が少ないが、今回は三十五人の出席者があつて盛會であつた。田中豊友の会長、重美術館長からそれぞれあいさつがあり、前年度の事業報告、会計報告を承認した。昨昭和三十一年度の事業については、美術講座、講演会、見学会、展覧会観覧などかなり活発に行われたが、これは前々年度からの繰越金が二一六、二〇三円あり、それを出来るだけ早い機会に会員に還元するため事業を充実した結果であつた。

二四、三〇〇円、松方コレクション収入一、九八〇円、利息五、六三四円で合計二〇三、五一四円。支出は二七一、七八五円で、差引六八、二七一円が繰越金から充当されたことになる。

本年度の運営については、出席の会員からいろいろ意見、希望が出されたが、友の会のお世話をする美術館側の条件も考慮して大項が次のように決つた。

①本年も事業を充実していく。

②例年の夏季講座とは別に個々の美術講演会などを充実する。

③本年の夏季講座はニジブト展などの都合により秋期開催を目標とする。

④近日中に京都近郊の史蹟見学会を行う。

⑤泊旅行の希望もあつたが、委員会を開いて検討する。

⑥委員会を年四回程度開き会員の意見を反映するとともに、事業の円滑をはかる。

なお役員改選も行われ次のよう

に決つた。(○印は新)

会長 田中 豊友 委員 田畑撫平(監査担当) 大野毅(会計担当) 中村茂一、○伊藤幸治郎、○藤村資、○吉田妃呂、吹田百合子、○関静江、松平千秋、重達夫、菅原徹

●見学会
友の会の見学旅行会は六月十六日に行われ百三人の参加者がありました。心配された天候も曇りがちながら上々で、岩倉嵯峨の円通寺、西加茂の正伝寺、嵯峨の鹿王院のコースをバスでめぐりました。これらの史蹟はいずれもどちらかといえば京都近郊の小寺院で、一般にはあまり知られていませんが、美術史家森嶋先生の解説で、知識を深めることができました。

●児童美術教室
友の会の児童美術教室がはじまりました。毎年入室希望者が多く、ことしも、ひきつづき入室を希望する人のほかに新規五十人の申込みがありました。本来ならば、テストなどを行わず、希望者全員に入室してもらうのが一番よいのですが、教室の広さもあり、本年もやむを得ずテストを行いました。昨年度までの教室の定数は七十七人でしたが、本年は八十五人まで増やした結果、新しい入室者三十四人を迎え、ここ数年つづいた入室難をある程度緩和することができました。

講師はひきつづき西田秀雄氏ほか二名です。新学期からイーゼル十台、丸イス五十台、画板九十枚を新しくとのえました。

京都市美術館ニュース No.46

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和38年10月1日発行



黒田重太郎「枯草運ぶ女」

美術館と平常陳列

阿部弘

事が起るかという期待を抱かせたに違いありません。その期待は実際の内容と比べるといささか過分であつたかも知れません。しかし見終つてさ程そんなわれることもなかつたに違ひないと私は自負しているのです。それというのも実際は作家、所蔵家から多大の援助があつたからこそなのですが、私達館のものにとつても小規模ながら最も印象深い展覧会の一つであつたと記憶しています。

ところで美術館とはどういう活動をするところでありましょうか。一口では到底説明し切れませんが、申すまでもなく美術展覧会を開くことがその最も重要なものの一つです。美術品を展示して人に見せる仕事です。この点に関しては、どこの美術館でも年毎に活発になつて来ています。単に回数が多くなつたばかりではなく、一昔前は考え及ばなかつた充実した内容と大きな規模をもつた企画がなされています。将来はレオナルド・ダ・ヴィンチのモノリザでも日本で公開されることになるかも知れません。展覧会事業の拡大は当然さうあるべき傾向です。当館もこの例にもれるものでなく、いささか美術の普及に力を致し、その結果、広い層にわたつて当館の名前をひろめて来ました。美術館は美術展覧会をするところです。

当館では三年前、戦前あつた常設展を復活しました。常設展というのは特別展とは違つて所蔵品を主たる陳列品として常時公開するもので、昭和十年から二十一年にかけて断続的ではありましたが引続いて開かれていたものです。それが接取前後の悪条件のためやむを得ず中断していたのです。当館はこの常設展の再開を印象づけるためにかなり力を入れたものです。ガラスケースを新しく取付け、陳列効果に注意し、陳列品には所蔵品を活用することは勿論、それだけではどうしても不十分な内容の重みを、作家、所蔵家から出品の協力を得て補つたものです。その上宣伝にかなり力を入れたこともあつて、その時の常設展は意外な程の反響を呼びました。戦前派は殆ど忘れかけ、戦後派には普段あまり聞きなれない展覧会が飛出したので、何

次にもう一つ大事な仕事があります。美術品を入手して所蔵庫に財産として蓄積していく仕事です。質のよい公共のコレクションに仕上げて後世に遺すことです。

ところがこれには莫大な財力が必要です。美術品はすぐれていればいる程驚くべき位に高価です。弱少の予算をもつてしては一点を手に入れることすら出来ません。美術館を最も悩ませ

美術館と平常陳列

ているのは実はこのところだ。しかも要する経費は、同程度のものをかりに購入するところだ。美術館とは元来一つの何らかのコレクションの存在を前提として成り立つもので、日本にもそのような美術館がいくつもあるのだが、コレクションを持たずに出発した公立の美術館は

ません。しかも要する経費は、同程度のものをかりに購入するところだ。美術館とは元来一つの何らかのコレクションの存在を前提として成り立つもので、日本にもそのような美術館がいくつもあるのだが、コレクションを持たずに出発した公立の美術館は

何れもこの点で行詰りに近い状態にあるといつて差支えないでしよう。そこでいきおい、運営方針に一考を加えざるを得なくなり、それ程までに無理をして高価な美術品を購入しなくても、館外から一時的に借用しさえすれば、結構展覧会を開くことは出来る、美術館はそういう企画に重点をおけばよいのだ、ということになります。陳列作品を館外のコレクションに依頼して、作品の強度、重量、容積等の点で移動可能な限りにおいて借りて来るのです。現在目まぐるしく開かれていく美術館にはこのような企画によるものが極めて多いのです。お蔭で美術の普及にどれ位役立つのか知れ

ていた。これは今日もなお受継がれている根本方針です。美術館と名乗り、その将来のことを考えると、短期間のうちに経過する美術展以上に基本的な事業に属するといえましょう。やがてコレクションが充実した時には、も早や常設展という名前だけに注意を引かれることもなくなり、特別展に対応して、一年を通じて至極平常の状態として所蔵品が展示されているという、博物館学の教科書が説くところの状態が訪れることでしよう。

さて、当館では先頃から所蔵品の陳列を始めました。三年前再開した常設展のシリーズに入るものです。少数の寄託品を除けばあとは創立間もなく始つて今日まで寄付を受けたり買入れたたりしたものうち、日本画と洋画の極く一部です。所蔵品の現在数は三百三十点になっています。三十年近くを費したにしては決して多いとはいえない数ですし、内容からいって大家の輩出した京都の美術館としてはいささか貧しいコレクションといわざるを得ません。しかし成長の速度は遅くても、ともかく事業の一つとして現代美術を収集して常設陳列をすることは、当館が大札記念京都美術館と称して発足した時に、既に決議された方針

それは随分先のことでしようが、今回の所蔵品陳列もその芽生えに違いないので「平常陳列」と呼び変えた訳です。将来の美術館の普及の姿はこれと相近いものだという前提に立つて御覧いただきたいものです。（当館学芸員）

なお今回の平常陳列は九月十七日から十月二十日まで。平常陳列に限って月曜は休館。

日本画、洋画合せ約六十点を陳列。



ベニス風景

世界気楽旅行

(2)

ヴェネチアの思い出

下村良之介

イタリアをふり出しに、フランス、スイスと二カ月の自動車旅行をおえ、再び出発点のトリノに引返したのは七月も半ばすぎ。一カ月をすごしたバリー生活のあとでは、トリノの感じは最初の印象とちがって、ひどく田舎くさい。車の整備に十日もかかるというので、

思案の最中、折よく、恋人に会いにアルプスの近くまでゆくと、いうマリオ青年の話にのって、便乗してもらうことにした。行先は、オーストリアとの国境に近いボツルアノのこと、トリノから東北へ約三五〇キロの距離で、ここはブドー酒の名産地だそう。

ボツルアノから一〇〇キロほど東方にあるコルティナまで足をのばす。前回のオリンピックのスキーの会場として、世界的に名を売ったところだ。とつとつとそびえる勇壮な岩山のふもとに、広大な緑の斜面に、玩具の

ような家が点在する可愛らしい町。国境を越えればすぐティロルで、セガンティニの明るい絵が思い出される。コルティナからの帰りは、ヴェネチア廻りにする。南へ一三〇キロ位で、途中、ティチアーノの生れたビニヴェ・ディ・カドレを通

った。コルティナに近い山間の小村だが、もしも彼が十七才ころにヴェネチアに出ないで、ここで一生をすごしたとしたら、おそらく寒村の野人で終ったかも知れぬと思うと、バスの窓から眺めた一旅人の胸にも、感慨深いものがあつた。ヴェネチアに入つたのは七月二十三日の昼ごろだった。

ヴェネチアはさすがに観光都市。駅前からの乗合バス（といっても汽船）も、広場も、群がる人のほとんどが観光客らしい。レストランのメニューも、英、仏、伊、独と各国語が並べてある。ボーイも大体四方国語くらいは通じる様子である。

全市が島になつていて、石だたみでおおわれて、土というものが見えない。そのせいで家々の窓辺には、バリーなどと同じように、鉢植が並べてあるが、ここではそれが水都の風景に情緒をそえて特別に印象的であつた。

情緒といえば、誰もがいうように、水に浮ぶゴンドラの群である。市の中心にあるリアルト橋のあたりは、数十のゴンドラで大賑ひ、色とりどりの電飾をつけた楽団の船では、唄い手が次々と立って、得意の民謡を唱っている。声量豊かな美声が、よこれた

美術館は十月二十日までの平常陳列にひきつづき十一月に「国画創作協会回顧展」を開催する。今日「国画創作協会」といっても、むしろなじみが薄いが、その協会の会員であつた村上華岳や土田麦僊、入江波光といえども知られており、昨今その盛名はいよいよ高いものがある。

「国展」の回顧

協会展は大正七年から昭和三年まで七

回の本展を開いたが、日本画部門だけとしてみると（洋画は第五回展から、工芸は第六回展から参加）総計約二百五〇点の出品をみている。参加した画家は八十人を数える。

今回の回顧展にはこの中から五十点見当が選択陳列される予定である。陳列品の中心はもちろん前記の幹部作家のものである。実際、一回展から七回展までの比較的短い期間に国展の画家たちは数多い、美術史上を飾る名作を生んだ。これは今日の眼からして驚くべきことであるが、それらの多くが出品されない。しかし国画創作協会に集った画家はそれだけに限らないし、ひとくちに個性の発揚と主観の深化といつても、作品は画家によつていろいろの傾向を体现している。従つて一方の極では、このような展覧会全体を、限られた数の作品の中においてではあるけれども復元することも意図されている。

水面をはるか遠くまで流れてゆく。

街の控え目な照明も気がきいて、ゴンドラでの夜遊びに、うす暗い狭い水路の曲り角の向うに、やわらかい照明が浮び上る。

静かなゴンドラのカーの音と、うすもやの水面にだけける壁の模様が見え、日本の町とちがって、ケバケバしいネオンもなく、著名な建物にだけやわらかい照明がさされているのも興味深い。

自動車がない街だが、交通調査はいた。曲り角の橋の上に、バスを立って、左右の水路をゆき交う舟の整理をやっている。何となくほほえましい風景だ。

街の中は、迷路のように狭い路が交錯している。路の狭さは美人と肩をふれ合うチャンスを与えてくれるが、その都度におうワキガのにおいには、いささか閉口、それにもおとらず、水路をゆくときのドブ臭い水のおいは幻滅だ。

しかし水ぎわの家の並びには、さすがに風情がある。サンマルコ寺院の塔の鐘の音がきこえてくる。鐘は等身大以上もあるブロンズの人形が、長い柄のハンマーで打つもので、ゆっくりと動きながらたたき出す鐘の音は、いつまでも忘れられない。広場に

面して並ぶカフェーでは、一軒ずつにおかえの楽団がいて、客のリクエストに応じて、なまの音楽をきかせてくれる。ヴェネチアでは、ラジオやレコードはほとんどきこえない。

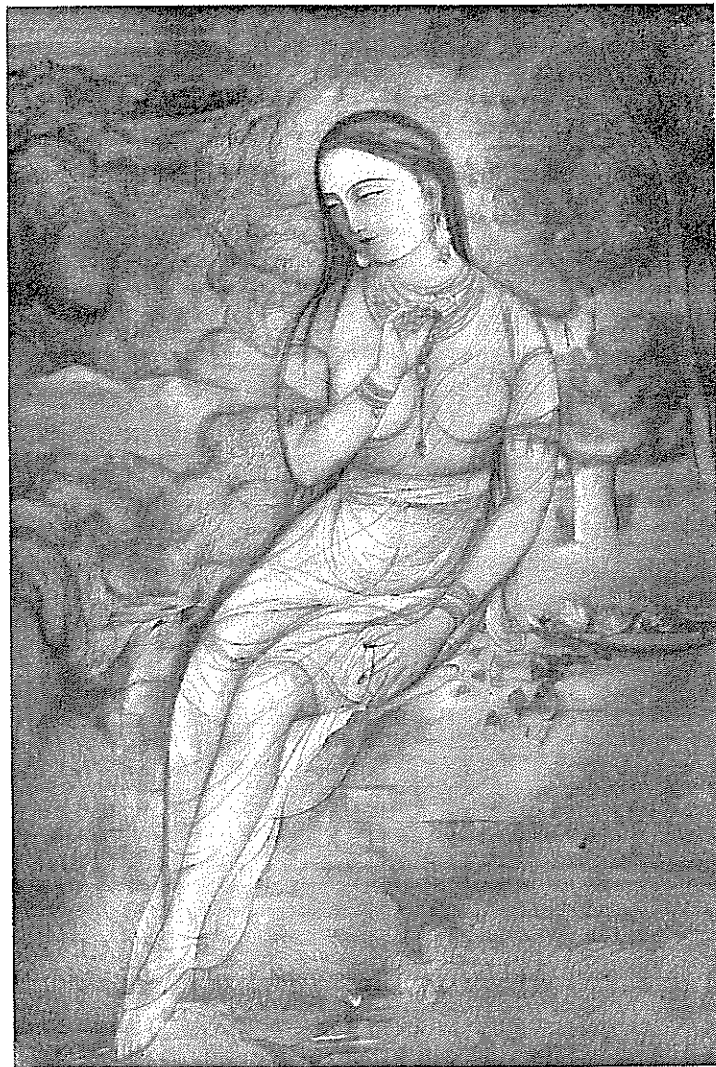
ヴェネチアの見物は実に盛り沢山だ。呼びもののビエンナーレを始め、サンマルコ寺院の絢爛たるルネッサンスのヴェネチア派の大画面。十四世紀から十八世紀にわたる膨大な作品を収蔵するアカデミー美術館。ヴェネチア・ピエンナーレの各回授賞作品を陳列したカ・ベアサロ美術館。エルンストのコーチで、ダダとシュメールの作品を収蔵したグッゲンハイムコレクション等々……。

約一週間の滞在中、実にこまめに走り廻り、ずいぶん食欲に見物したヴェネチアの街だったが、結局、美術館や教会におさまった、数々の往時の名作より、街を流れる鐘の音や、ドブくさい水やワキガのニオイの方がむしろ印象に残った。

美術そのものはもちろんであるが、それが生みだされた風土、環境をたしかめようという心がけた僕の気持が、そういう結果をもたらしたのかもしれない。

京都市 美術館ニュース No.47

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和38年11月20日発行



村上重雄 裸婦図

国画創作協会回顧展・特集

展覧会案内

モダンアート京都作家展
総研展
12月15日
18日・21日
23日・25日
27日・30日
新匠会版画展

土橋画廊

10月
瀬尾克己・増田武雄2人展
3日・6日
一水会酒見恒平個展
12月16日
芝垣祐一 個展
18日・20日
鶴原信仁 個展
22日・27日
佐藤勝彦 個展
30日・11月3日

秋の特別展

森俊三ダイグラフ展 7日・13日
三島茂司、三島喜美代2人展
14日・20日
梅本昭 個展
21日・27日
高瀬善明 個展
25日・11月3日

友の会

大阪市立美術館作でのマイヨール展(9月24日・10月20日)がある。
さる九月六日午後二時から美術館で友の会の委員会が開かれ、た。友の会は折角委員を選びながら委員会をもつ機会がなかったの、これが第一回の委員会となったわけだ。田中豊会長はじめ十人中八委員が出席、本年度前半の事業、会計の概略の説明を聞いたの、今後の催しについて各委員から意見希望が出されました。

マロニエ画廊

10月
学大特美グループ6人展
9月28日・10月1日
学大特美グループ6人展
3日・6日
竜 美 展
7日・10日
8 人 展
11日・16日
新制作山本六郎個展
18日・21日
吉田デザインルームグループ展
24日・27日
島津制作所美術部展
28日・30日
京大美術部四回生油絵展
31日・11月3日

丸物画廊

10月
名刀展 9月28日・10月3日
第8回雲畑社展
5日・10日
平安校風会展
12日・17日
第3回洛洋会展
19日・24日
民芸家具木工展
26日・31日

大丸画廊

10月
青龍社小品展
1日・6日
古民芸ゲテモノ展
8日・13日
金 棚 会
15日・20日
陶芸巨匠彩光展
22日・27日
加賀現代工芸美術展
29日・11月3日

ギャラリー16

10月
開設一周年彫刻選抜展
9月30日・10月6日

京都府ギャラリー

10月
女流陶芸グループ展
9月29日・10月2日
青 美 展
4日・7日

ケラ美術展
24日・26日
墨 人 展
26日・30日
京都府自治記念園児、児童、生徒作品展
11日・15日
行動美術展
13日・24日
走泥社展
17日・22日
勤労者文化祭展
17日・22日
京都版画家集団展
24日・31日
成安女子短大意匠科展
24日・26日

京都書院画廊

10月
立命高校美術部展
1日・4日
同志社大学スケッチクラブ展
4日・7日
3 人 展
7日・11日
フォトキョウト写真展

草月会生花展
11日・16日
集団グループ作品展
18日・21日
東山高校美術部展
21日・25日
25日・28日

国立近代美術館京都分館は、園展の作家村上重雄をとりあげて9月21日から10月20日まで「村上重雄の芸術」を開いている。重雄の神髓が一段と明らかになったとされる晩年の仏画、水墨画を中心に百三十点が展覧される。重雄展はこれまでも珍らしくないが、晩年に焦点をしばって多数の作品が出品されるところにこの重雄展の特徴があるだろう。

この結果、10月10日には京都市工芸指導所の見学、また11月17日にはバスによる神戸方面の美術館の見学会を計画しています。11月17日については追って具体的なプランが手許にいくはずだ。
このほか、11月に美術館で開かれる「国画創作協会回顧展」来年2月の「インド展」の時期にはそれぞれ解説講演会を開く予定です。

国画創作協会の思い出

— 回顧展に際して —

語る人 小野 竹 喬

明治以降の日本画の道筋をみていくうえで、一つのエポックをなしている国画創作協会—この運動を、それに所属した個々の画家の成果としてよりも、運動全体としてとりあげることが美術館の懸案であったわけですが、それが曲りなりにも実現できたことは大きな喜びです。

大正七年から昭和三年までに七回の国画創作協会展が開かれ、合計二百五十余点の作品が出品されました。今回の回顧展はそのうちの五十点余が選択陳列されています。

そこできょうは国展のことについて、その思い出などをお伺いしたいと思うのですが、まず創立のいきさつから。

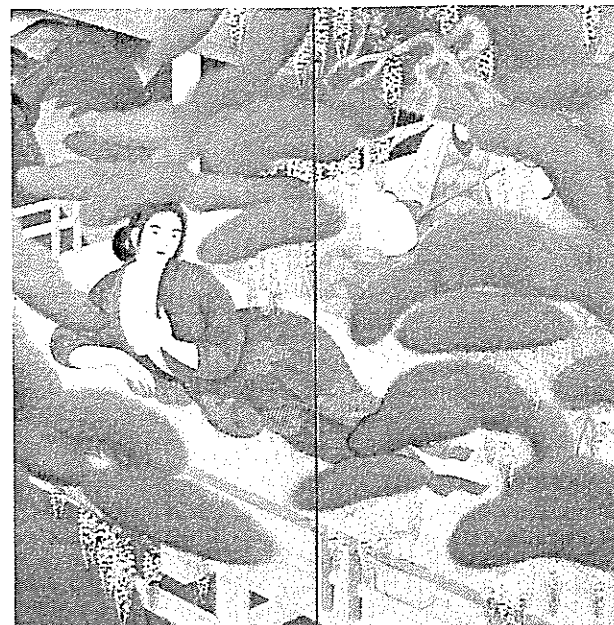
小野 国画創作協会を興したわれわれの大部分は、はじめ文展に出していたのですが、文展の審査員の絵の見方が、どうもわれわれの進む道と違うように感じられた。絵の中に生きた人間がない。なかにお芝居をみているようなものです。ところが、絵画専門学校では中井宗太郎さんが美術史を講じておられて、いろいろな知識を吸収できるし、また雑誌「白樺」には印象派や後期印象派のことが紹介されて、われわれは刺激されました。白樺ではとくにセザンヌやロダンが盛んにとりあげられましたが、セザンヌの作品のもっているリアリティには驚かされました。「帽子をかむ男」な

ど本場に帽子をかむっているという人があったが、私たちもそこに日本画の世界には全くないものを感じました。

—そうすると国画創作協会は近代の洋画の影響のもとに発したということになるのですか。

小野 少くとも土田麦僊君や私に関する限りその通りだと思います。しかし橋原紫峰君や村上華岳君がどう感じていたかは別です。華岳君は西洋の絵画といってもジョー・トリーやブレイクの影響を受けたようだし、紫峰君は中国絵画から多くのことを学んでいました。

それから私は院展の人達の絵が好きでした。とくに菱田春草さんや今村紫紅さんはそうでした。春草さんの「賢首菩薩」(明治四十年第一回文展)がそうだし、「落葉」(第三回文展)「黒猫」(第四回文展)などとても感激しました。紫紅さんの「熱国の巻」(大正三年第一回再興院展)もそうです。



土田 麦僊

湯 女

す。新鮮な自然観賞がすばらしかったし、それを支える思想も斬新でした。

文展では竹内栖鳳先生が審査員をしてもらえ、大変理解があったが、旧派の審査員が多くて新派の人のいうことはなかなか通らなかったのです。春草の「落葉」にしても危うく落選しかけたところを大観さんが頭張って入選し、結局二等賞第一席でした。麦僊君もずっと文展に出し成績はよかったです。後期印象派の影響が現れだしてからは不遇になりました。麦僊君の遺作展が開かれたとき、官展の審査員をしてお



小野 竹 喬

られた荒木十畝さんが会場に來られたが、麦僊の「罰」(明治四十一年)をきて、これまではよかったが、その後は墮落していったといっておられた。これをみて私も私たちが全く考えが別だったわけです。

—国展ができる前に京都に「シャ・ノール」とか「ル・マスク」とかいうグループができていますね。

小野 「シャ・ノール」はパリにも留学した田中喜作さんが中心になって明治の終りにつくった文化サークルで、洋画では津田青楓、田中善之助、黒田重太郎、新井謙也ら、それからわれわれの仲間では麦僊と私がメンバーでした。芸術を論ずる会で、私たちはそこではじめて田中さんからモネ、マネ、ルノアールをみせてもらい、卒直に自然が描かれていると感心したものです。ところがシャ・ノールの人も田中さんと津田さんの意見が合わず間もなく解散してしまいました。その再発足の形でできたのがル・マス

クです。黒田、田中善之助、新井、土田と私が会員で、これは展覧会を主体にして四、五年続いたでしょう。私は点描風の絵をかいていました。印象に残るのはその頃の黒田重太郎さんと、大阪に住んでおられて、道頓堀あたりのきたない川水や老妓の顔をかいて、生活感のじみでた絵でした。

—国展の作家が師事しておられた竹内栖鳳は旗上げについてどんな態度だったのですか。

小野 栖鳳先生は頭のよい人で、われわれがこういう運動を起すだろうということを知っておられた。大正六年の暮れでしたが、いよいよ創立するということになり栖鳳先生をおうかがいしたが、先生は、単に反官展という狭いことでなく、新しい芸術運動をやるなら堂々と先輩の人たちにもあいさつすべきだとおっしゃった。そこで大観、玉堂、広業という方々のところへ行ったが、玉堂さんのところでは榊原紫峰君が日本画論をめぐって玉堂さんと激論をたたかわすことになり、みんなひやひやしました。栖鳳先生は文展に出品している私たちが、だんだん不遇になっていくのを心配しておられた。それで国展には自分も出品してもよいといわれたほどだが、これは私たちの方からお断りしました。

国展の会員は、私が紫峰君と親しかったので誘いかけ、紫峰君が村上君をひっぱってききました。村上君は孤高な人であるので、むづかしかったが、創立されたときは非常によくこんでいました。野長瀬晩花君は、その前に開いた個展が面白かったので、私と麦僊君とで誘ったのです。

創立の大正七年といえは大変好景気でしたが、新たな冒険をはじめるのですから生活は極度に困ると覚悟していました。それで後援者をお願いすることになり、会員が手分けして私と麦僊君とで吉田忠三郎さん、紫峰君が尼崎三之助さん、村上華岳君が神戸の土屋さんという風に当りました。京都の内貴清兵衛さんもお世話になりました。

国画創作協会回顧展

— 大正、昭和の日本画の名作 —

麦僊、竹喬、華岳、波光、紫峰ら

11月27日まで 京都市美術館



3

不遇の作家マンズーニ

下村良之介

一カ年振りに日本の土を踏んだ直後、イタリアの新進作家、ビエロ・マンズーニの死を聞いたときは大変なおどろきだった。いかにもイタリア人らしい、明朗で底ぬけお人好しのマンズーニとミラノのバーを愉快に飲み歩き、朝の太陽もまぶしいホテルの玄関で、日本の再会を約して堅い握手で「チャオ」と別れを告げた。その時の明るい彼の笑顔がまだ昨日のことのように、鮮かに脳にやきついていて僕にとっては、この金く突然のニュースはとても信じられなかった。

彼との愉快な出会いが、去年の十一月、何度目かのミラノ入りの最後の機会になったスペインからの帰り路の二日目、以前にバリーで仲良くなったニンリコ・カステラニニをおとつて、細君や居合せたオランダの娘さん達とにぎやかなテーブルを囲んで、しこたまブドウ酒を傾けた後、ミラノのドッマゴ（バリーの有名なカフェ）だという「ジャマイカ」にくり出して、いよいよイタリアのハシゴ酒を開始した直後のことだった。

「ジャマイカ」はミラノの中心よりやや北方の美術学校のすぐそばにあって、若い芸術家達の夜のたまり場といった気安いバーで、街のあかりが夜霧をそめる頃となると、三々五々セーターやジャンパーの青年作家達がつめかけてくる。どれも皆毎夜の常連で顔見知りばかり「チャオ」「チャオ」と肩をたたきあつては、ブドウ酒の盃をあげてだれかまわす雑談から、芸術論へと話をはずませる。その晩は新顔の僕が珍らしいのか、入ってくる者が必ず声をかけてくる。その度にカステラニニが一人々々丁寧に「ビートル、シモムラ」と紹介してくれる。

ふとだれかの会話にマンズーニの名が出たのをきかけに一度会って見たいともらすと、イタリア人の気易さ、それなら今すぐに彼のアトリエに行こうと、カステラニニが早速案内を買って出る。ミラノの公園のすぐ近くフィオリ・シャリーイ通りにあるマンズーニの住居までタクシーをひらう。

厚いコンクリートの壁に囲まれた四角いビルディングの入口を入った右側の小さなドアをくぐるとすぐ広い仕事場になっている。ベルの音に出て来たマンズーニはイタ

リア人には珍らしく小柄で良く肥えていて、ちよつと日本のヤンチャ坊主のような感じ、クリクリした眼が澄んだいかにもキビキビした男だ。カステラニニの紹介で初対面の握手を交わすが手が痛い程強く握る。早速飲み出しようという彼に、折角来たのだから仕事を見せてくれというところよく中に招き入れる。まだ独身だというだけあって、カステラニニのアトリエに比べてはるかに荒けずりの殺風景な室だが、それだけに、雑然と壁にたてかけられたキャンパスのかきなりにカッカとするような活気が感じられる。

すぐこれが今やっている仕事だと室の一角からどんと並べた。白い台に脱脂綿を丸くして並べたもので赤い布のバックの前にとりつけ、ちゃんと深い額をつけたガラスが入れられている。次々と並べていくうちに一つの作品がどうにも気に入らんらしく、折角嚴重な額装をしたものを裏側からやぶってこわしにかゝる。何故こわすのかと聞くと「これで来たからだ」と大げさなジェスチャーで答える。見かけによらん神経質な男らしい。作品には一つ一つ強いライトをあてて影を検討しながら並べてゆく。ずいぶん照明設備のととのったアトリエだ。

厚いプラスチックの板の表面に凸凹をこしらえた作品を持って来て、眼の前に置き「これはどうか？」と意見を聞く、あまり好きでもないかと思える、さもあらなという顔つきで一きわ強いライトを作品にあてて後、僕の肩を持って室の中央につれて

ゆき、こゝから眺めてくれと作品に待たせ、急に室のライトを消してしまふ。一瞬真暗になった眼前に青白く美しい四角が輝びあがる。作品は螢光のプラスチック板なのだ。窓辺にはキャンパスに布をしまわしてはりつけた作品が色を塗つたばかりで乾かされている。奥の棚には長い紙に線が引いた作品が縦の筒におさめられて沢山並んでいる。大きな仕事机の下には一きわ大きな太い鉛が置いてある。わざわざその前までつれていって鉛の表の一〇〇〇mという標示を指して得意顔をする。そして最後にこれはどうだと小さい一つの鉛を見せる。

鉛の表には美しい印刷の紙にアーティスティック・シットとある。英・仏・独・伊四か国語でかいてあるのだが字引を持たないのでシットがなにかわからない。えのかう紙かインクか？と聞くのだが、彼等二人は顔を見合せてくすくす笑うだけで互に説明役をおしつけあつて「食えるか？」と質問したのは遂に大笑い。眼を丸くしてクサイクサイと鼻をつまんで笑いこける。それもその筈、シットは糞で、彼自身の大便を糞詰にしたものだとのこと、作品は作家の大便のようなものであるという比喩だとわかり再び大笑い。

一しきり仕事場の見物をすませると、さあ行こうとマンズーニが肩をだいて再びハシゴのやりなおし、今度はマンズーニが自分の車を運転してくれる。作品に対して神経質なのは逆に運転はすく荒っぽく、

(六頁(続))



紅口草神本圖

はうけいられないようなものでしょうね。杉牛賞の候補にも上りましたが、結局ほかの温厚な作品に落ちました。粥川伸二君は軽い作品でしたが、異国情緒のあるおもしろいものでしたし、第一回展ではないが、岡村宇太郎君の「漁夫」などしっかりした写実力をみせています。小松均さんもよい仕事をしています。

— 審査の様子はどんな具合でしたか。

小野 はじめは円滑にいったが、入江波光君が入会してから談話風発でした。入江君は創立のとききそいかけたのですが、非常に謙虚な人で、ほかの人のようにいままて文展などにおける実績がないので、第一回展に出して作品がよければ会員にしていくということでした。第一回展の「降魔」は立派な作品だったのですぐ会員になりました。ところが麦健君あたりとは大分線点が違ふので、とくに写実主義の作品をめぐって、両方ともあいえばこういいうで、どうにもならない。そんなとき顧問の中井宗太郎先生が弱って仲へ入られたものでした。

— あとになると国展に洋画や工芸がはいってきますね。

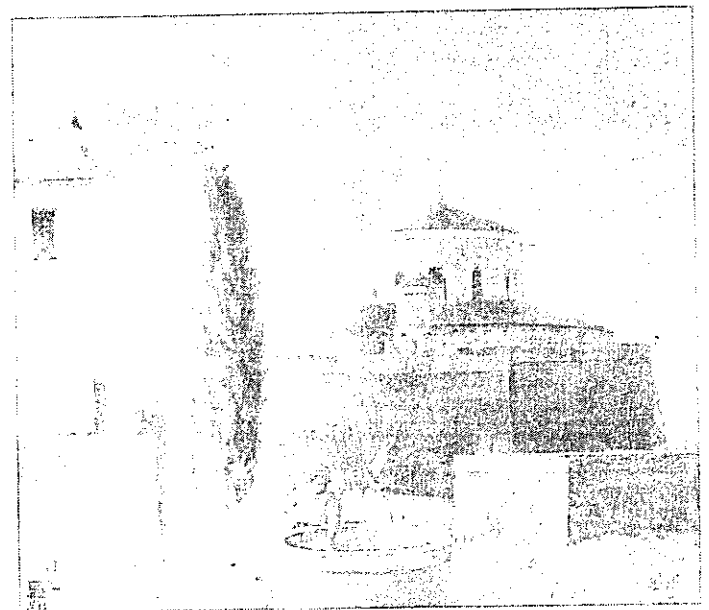
芸術運動としての内的な関連はどうだったんでしょう。

小野 洋画部ができたのは

大正十四年でした。このころになると麦健君あたりは日本画だけではさびしくなっているように思ひ、そのことを気にしていたようです。出品者の側にもすぐれた人がほとんど国展に出してくるというほどでもなかった。洋画部の会員は梅原龍三郎さんと川島理一郎さん、それに顧問に川路柳虹、田中喜作氏らが加わりました。梅原さんはル・マスク時代に賛助出品していたし、私たちも田中喜作とは仲がよい。そういうことで洋画部設置にふみ切ったわけですが、こういうことのほかに私たちは洋画部を設けることによって経済的に少し楽になるのではないかとということも考えていたのです。ところが洋画ができてから、いよいよ赤字がものすごい。それがみんな日本画部にしわよせになるという状態でした。入場料など問題にならぬ少額でした。第五回展を京都の美術倶楽部で開きました。作品にはよいものが揃っていると思うのです。

が、実に夢窓の入場者です。夕方になるとみんな赤字の算段をしました。それに後の方になると華岳君は出品しなくなりしました。その中で麦健君が経済的にも孤軍奮闘しましたが、麦健君もこれではどうにもならないと思つたのでしょう。昭和三年、会員が相談して解散をきめました。

私たちとしては若々しい意気込みで出発した運動でしたが、苦しいことも多かったわけです。しかし運動の意義と作品を、こういう展覧会の形で評価していただいたことは非常にうれしいことです。



光波江入 寺ツアノスタンコス

京都市 美術館ニュース

No. 48

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和39年6月1日発行



昔語り図下絵

黒田清輝

美術館特別展—近代日本の絵画

展覧会案内

美術館		11月	自由美術協会展	16日—25日	新制作8人展	25日—12月1日
		11月	二紀会展	17日—26日	立命二回生グループ4人展	5日—8日
		11月	シヤガール展	20日—12月10日	立命卒業生グループ展	9日—11日
		11月	独立美術展	27日—12月10日	同志社女子大RE—UNION	12日—16日
		11月	パンリアル展	27日—12月4日	こぶしが会展	17日—19日
		11月	京都府ギャラリー	6日—14日	宮中清・赤岡衛2人展	20日—26日
		11月	染色作品4人展	20日—23日	ギャラリ—16	
		11月	第2回旺土会展	25日—28日	志村光広個展	18日—24日
		11月	松下兄弟3人展	30日—12月3日	林秀行個展	25日—12月1日
		12月	人形展	5日—8日	12月	
		12月	東儀一個展	10日—12日	壇野功個展	2日—8日
		12月	面生会展	14日—17日	秋田直躬個展	9日—15日
		12月	竝染織陶芸展	19日—22日	川内伊久・林剛個展	16日—22日
		12月	彩紅会展	23日—26日	丸物画廊	
		12月	土橋画廊		服部喜三個展	22日—29日
		12月	池田洛中個展	21日—24日	大丸画廊	
		12月	成安女子短大服飾デザイン研究部展	3日—4日	11月	
		12月	武重元吾水彩画展	28日—12月1日	現代大家彫塑展	19日—24日
		12月	5人展(日本画)	11月26日—12月1日	5人展(日本画)	
		12月	高級書画展	3日—8日	丸物画廊	

(五頁より続く)

街はいつの間にか濃い霧に包まれている。十米先も見えない程の深い霧、十二月の末にもなればミラノではこんなこともよくあるとのこと。ようやく片側の歩道の端の白線だけをたよりに運転しているだけ、とても地形のわからない者には出来ない相談だ。まず先程のジャマイカで乾盆の後ずつとはなれたレストラン、オカ・ドオロで夕食、マンズーニーの恋人がかけつけるやら、カステラーニーの細君が若い作家を三人もひきつれて乗り込んでくるやら、又々大変な騒ぎ。忽ちブドー酒の空瓶がゴロゴロ転りだす。酔う程にコミヤックに転向すると等彼は一斉にグラッパを注文する。無色の強烈な酒だ。ためしにとライターを近づけるとガソリンだからやめろとあわててとめる。マンズーニーのすすめて一口やってみる。のどがやける様な強い酒だが案外美味い。早速こちらもグラッパに酔いがえしてどんどんやる。時ならぬ日伊作家飲み比べ会だ。あまりのいきおいに遂に婦人連はこの店で退散。これより五・六人で霧の街を転々とグラッパのハシゴ酒、一人減り、二人落ち、四、五軒目でさしものカステラーニーもエンコして、あとはマンズーニーとの二人きり、肩を組んでの千鳥足でおまわりからんだり、一本の葉巻を二人で吸ったりの酔体、いつの間にか大通りは明るくなっている。強い酒に痺麻した耳に市電の騒音が世の中の動きだしたのを感じさせる。

マンズーニーのあやしげな運転でそれでも無事ホテルまで送られたのが午前九時。彼は手帖に住所をかいたのも忘れて大きな名刺を出して、明日は二日酔でアトリエに出ているかどうかかわからんが必ず電話をかけるか遊びに来てくれと何度も念をおす。

彼とは、わずかこの一日のつきあいだけだった(翌日アトリエにいった時は案の定彼は二日酔で倒れたままだった)が、一年間の旅行を通じて海外での最も忘れがたい作家の一人として、今尚強烈な印象が残っている。僕と別れてわずか二カ月余。彼の死因が肝臓病だということを聞いた僕にとっては、あの楽しい一夜の暴飲ぶりが今更のように思い浮んでくる。

美術館特別展 ■近代日本の 絵画



月夜の湾 木村 夕明

ミロのビーナス像の製作年代は紀元前一五〇年から五〇年であるから、ギリシア美術の盛期、クラシック時代が過ぎて末期にあたるヘレニズム時代にあたる。それにもかかわらずこの女神像はギリシア美術のうちで最も人気のある作品であり、また同時代のラオコーン像やベルガモン祭壇の彫刻とは異った感銘をあたえ、一見してはクラシック時代の作のように思えるほどギリシア彫刻の性格をしめしている。

一体、ヘレニズム時代美術の主潮、または基調としては前四世紀のクラシックが指示した方向、写実的で感情的な方向への進展であるけれども、一様な漸進的な様式発展をしいてはいない。それだからヘレニズム時代の作品の年代決定は様式からだけでは議論があるわけであり、いくたの諸

べにすの月 竹内 栖鳳

だのに対し、洋画ではそのような区別はあまり考えられず、画家は東京を中心各地に散在したということになる。洋画についていては京都と東京という関係からいうと、京都は東京に比べて大きな感化を及ぼした作家の数が少なかったということになる。今度の展覧ではこのような地域的な面も考慮されて陳列されている。東京系日本画家の作品では菱田春草の『黒き猫』、横山大観の『瀟湘八景』、下村観山の『春雨図』、小川芋銭の『秋雨図』等々、日本美術院系作家の他に、川合玉堂の『彩雨』や平福百穂の『荒磯』、鍋本清方の『朝涼』などが陳列されている。京都関係では、日本画で竹内栖鳳の『飼われたる猿と兎』、『べにすの月』、『雨』、西山翠嶂の『梅花』、上村松園の『晴日』、菊池契月の『少女』など、それに柳原紫峰、小野竹喬、堂本印象、福田平八郎、宇田荻町などの諸作品、一方の洋画で、太田喜二郎の『樹蔭』、黒田重太郎の『湖雨欲晴』、須田国太郎の『鶴』などがある。洋画ではこのほかもちろん安井曾太郎や梅原龍三郎それに坂本繁二郎などの作品も陳列されているが、日本の洋画を初めて開花させた浅井忠や黒田清輝の代表作が各数点ずつ出品されていることは、この展覧会でのハイライトであろう。なお近代絵画史において特異な地位をしめる富岡鉄斎の作品も陳列されている。

ところで願ひればこのような近代日本の絵画を展覧しようとする展覧会、それは名

美術館特別展
近代日本の絵画
5月20日—6月25日

作展とも歩み展ともさまざまに呼ばれて各地で各様に繰返されてきた。最近の当館についても昭和二十七年と二十八年に催された京都名作展と日本名作展、それに昭和三年の近代日本絵画の歩み展などがあげられる。今度の展覧会は、規模の上からするとそれらにくらべて小さい感じがしないでもないが、内容的には各所の展覧会におとることではないであろう。いう迄もなく美術は知識として覚えるものではなく、見ることを通じて心の糧としてゆくものであるから、この機会をもえて楽しく鑑賞していただければ、美術館員としてこれに過ぎる喜びはない。(原田平作・当美術館員)

ミロのビーナスをみる

美術史家 村田 数之 亮



ミロのビーナス (朝日新聞社提供)

ミロのビーナス像の製作年代は紀元前一五〇年から五〇年であるから、ギリシア美術の盛期、クラシック時代が過ぎて末期にあたるヘレニズム時代にあたる。それにもかかわらずこの女神像はギリシア美術のうちで最も人気のある作品であり、また同時代のラオコーン像やベルガモン祭壇の彫刻とは異った感銘をあたえ、一見してはクラシック時代の作のように思えるほどギリシア彫刻の性格をしめしている。

一体、ヘレニズム時代美術の主潮、または基調としては前四世紀のクラシックが指示した方向、写実的で感情的な方向への進展であるけれども、一様な漸進的な様式発展をしいてはいない。それだからヘレニズム時代の作品の年代決定は様式からだけでは議論があるわけであり、いくたの諸

までギリシア作家たちが追求してきた男性性美とは別種のものとして一をはじめてつくり、その極限に全裸のクニドスのアフロディテ(ビーナス)を刻んだことは、有名である。そしてなお彼がつくる

様式、流派が並存していたと考へるのが正しい。その一つに古典主義的、すなわちクラシック復活をめざす潮流があった。ミロのビーナスはこの流れの一つである。それでヘレニズム美術の感情的なリアリズムよりもまづはじめに前四世紀クラシックの「優美なる様式」と共鳴するものをこの像から感じるのである。

優美なる様式といえはプラクシテレスを思わねばならない。オリンピア発見のヘルメス像には原作であるか模作であるかの議論はあっても、それがこの作家の特質を十分に示していることは疑いなくもない。そのなかやかなバランスのとれたS字型のポーズ、身体構成(筋肉や関節)よりもそれをとおうなやかな肉體美をくみだし、かような肉體をもつ女性の美—これ

男性も女性も優美さの上に何か恍惚とした—それをギリシア美術史ではロマンティックとよぶ—ものを加えた。または同時代のスコパスはもっと端的に情感をしめして激情にかられて上を向き口を開いた顔をあらわした。

ミロのビーナスはこれら前四世紀の作風の子である。あのなめらかな豊かさ、肌の美をもつ肉體、多感で敏感な顔付きや自由な髪、夢みるような眼差しと開いた口、またふれればすぐに動くようなポーズ、これらの魅力は前四世紀にさかのぼり、さらに進んでいる。なおゆたかに流れるデリケートな着物の褶にはアクロポリスにある前四世紀末頃のニケの神殿の胸壁の浮彫、ことにサンダルを解くニケの姿と通じていることが、指摘できる。プラクシテレスは全裸のアフロディテのほかに半裸のこの女神像をきざみ、それは「アルルのアフロディテ」(ルーブルの模作)のようだった。ミロのビーナスの腕などの復原には諸説があるが、そのうちでフルトウエングラーの説が妥当であろう。そうすると「カプアのアフロディテ」(模作)をあいだにおくとプラクシテレスからミロの女神は直ちにつらなるが、この半裸、露わなる上半身と衣をまとった下半身との姿は、全裸の女神像よりもその対比によつてより裸形の美しさが強められる。この対比の美しさを原作によつて限りなく発揮しているのが、ミロのビーナスだと思われる。豊麗な肉體、その胸から腹の生の充実したしかも鮮麗な女体が、ふ

京都市 美術館ニュース

No. 49

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和39年10月20日発行



女立 <月契地菊>

京都の伝統展 京都日本画の200年

展覧会 案内

6月

美術館

美術館特別展—近代日本の絵画

5月20日—25日

ミロのビーナス特別公開

5月21日—25日

学大展 5月31日—4日

第15回水明書道公开展(青少年部)

7日—8日

第9回青塔社展

10日—14日

第28回行余書院展

13日—14日

三大学合同展(大阪市大・神戸大・京工大)

13日—18日

鳳雛書道会展

20日—21日

青年美術集団太陽会展

20日—25日

第24回龍門社展

27日—28日

土橋画廊

2日—7日

亜士会展

9日—14日

佐藤勝彦個展

16日—21日

箭々会展

23日—28日

同志社大学スケッチクラブ学外展	5日—8日
洛陽・塔南合同美術クラブ展	12日—15日
京都府立大学美術部展	15日—17日
こぶし画会展	19日—22日
立命大学美術部研究アトリニ展	22日—26日
京都府ギャラリー	
日本画小野路青・野々口保太郎2人展	4日—7日
新制作日本画4人展	9日—11日
レ・コロン展	12日—15日
第6回衣笠会日本画展	17日—20日
安達嶺南書展	22日—24日
第6回朴土社展	26日—29日
マロニエ画廊	
グループ民展	5日—8日
とこむ展(陶器)	17日—21日
立命大学美術部アトリニ展	22日—25日
京大美術部展	26日—29日
ギャラリー16	
川合敏久個展	1日—7日
田島征彦展	8日—14日
林康夫展	15日—21日
西井正樹展	22日—28日
新富英典展	29日—7月5日
大丸画廊	
鶴翁作品展	2日—7日
新輸入イタリア・ミラノガラス工芸展	9日—14日
日本画小品展	16日—21日
中国美術工芸展	23日—28日
農島社展	23日—28日
藤井大丸画廊	
国際写真サロン展	5日—9日
京都書人会作品展	12日—16日
国連ポスター展	26日—7月1日
丸物画廊	
浜田雪作陶展	5月29日—4日
三輪高英日本画展	6日—11日
パンククラブ展	13日—18日
雲桐社南画展	20日—25日
国立近代美術館京都分館	
児島善三郎遺作展	5月23日—14日
現代イギリス彫刻展	17日—7月8日
京都府立総合資料館	
常設展	6日—9月30日
京都国立博物館	
日本の木器展	5月12日—14日

友の会

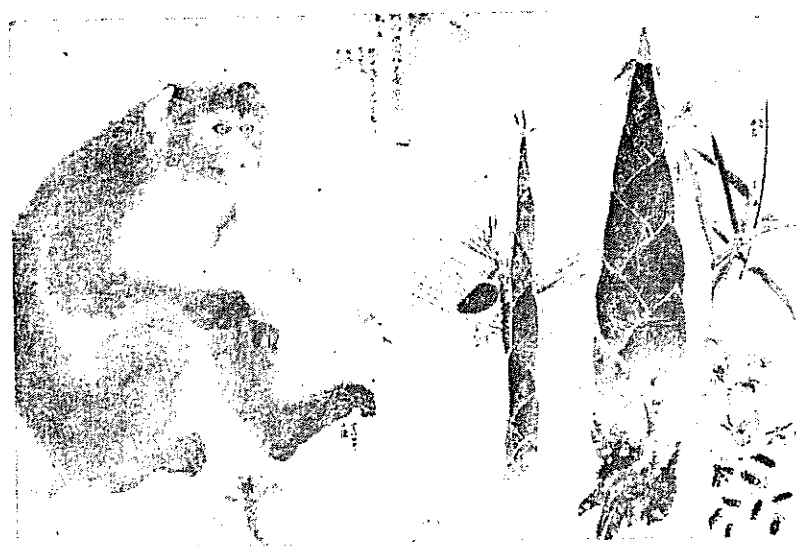
○友の会の春の見学旅行会は5月31日に行われ、大阪の藤田美術館、大阪市立博物館、大阪城天守閣に参りました。約百人の参加者があり、京都大学教授赤松俊秀先生にそれぞれ解説を願いましたが、田美術館の庭園や

大阪天守閣からの眺望も見事で、の楽しい一日でした。
○先日、の総会で要望のありました友の会会員名簿発刊の準備を進めています。表紙は会長田中豊氏のカットで飾り、便利で美しいものにしたいと思ひます。七月はじめにはお手許におとけける予定です。

くよかさと変化とを交響する褶のある衣と相対した相応しているのである。この点はミロのビーナスの魅力の一面であらう。
しかしここにはただブラクシュテレスやスコパスまた前四世紀のクラシックが復活しているのではない。ギリシアの神々がその崇高・尊厳さよりもっと個人個人の人間への接近感をもつように、また時代の思潮ともつらなつて、神々の像にもより人間らしきがある。壮重よりも敏感、自足よりも憧憬、静安よりも変化が、神々の姿にも心情にもあらわれてきている。それがより人間らしい、またより近より易いというものだ。ミロのビーナスのポーズが流動的ともいえることについてはのべたが、その顔も、たとえば口を開いた姿は必ずしも神にふさわしいとはいえないのである。それでもこれが神像である限りにおいては、何か「聖なるもの」をもたねばならない。ミロのビーナスはまさにこの聖なるものを失わんとする前夜にある神の姿ではないか。それ故に、肉体の聖をギリシア人ほどに感じない近代人により人気があるのであるまいか。
また人はこの女神像が両腕をもつていればそれほど魅力的ではないという。もとより両腕のないままの像の鑑賞はギリシア人の意図からはずれていよう。しかしこの何となく憧憬的なロマンティックな彫像において欠損は一種のロマンティズムをうむものだが、それよりも端的にはこの彫像の最も美しい部分である——そしてギリシア作家たちが常に表現に刻苦した部分だが、いさ少し腰をまげることによって素晴らしい生命感をこめた——腹部、胸部から腹部への部分を腕にわづらわされずにあらわにしていることに一つの原因がないであらうか。

京都日本画の二〇〇年 出品作品から

10月4日—27日
京都市美術館



明和七年 円山応挙 写生図巻

江戸時代の後期には、南画、浮世絵、洋風画などの諸派が興ったが、京都に興った円山四糸派も新興画派の一つであった。円山応挙はその祖として写生主義をもち、後の画壇にも大きな影響を与えた。応挙の写生主義は「豪放磊落、氣韻生动」といったものは物の形を写すことに習熟すれば自然に会得されるものだ」という言葉が示しているように平明な自然観察と追真的な描写のうちに表現の基礎を求めようとする新しい主張であった。応挙のこのような画風は「わかりやすさ」の故に京都の商人階級を中心に広い支持層を得たが、旧派からは「絵を求むるならばわが（重白）ところへ、図を求むるならば主人（応挙）にゆけ」というような非難もうけた。

本写生図巻は本草学（博物学）の図譜として制作されたとも考えられているが、動植物の描写の科学的な正確さと克明さにはきびしいばかりのものがあられ、古臭をはらい去った近代的な美しさが表われている。応挙の写生主義の理念を端的に物語るものである。重要文化財。



「あれ夕立に」は、第3回文展の出品作である。竹内栖鳳は、はじめ土田英林に学び、続いて幸野楳嶺に師事して、明治20年代には早くも京都の新しい世代の花形として頭角を現わしていた。明治40年に開設された文展は、新興の画派に生新感と自由競争の舞台を与え、近代の日本画を一躍に導いていくことになった。栖鳳は当初から審査員として活躍し、第1回展には四糸派系の筆技を生かした「雨窓」によって好評を得た。しかし「あれ夕立に」は画壇における栖鳳の位置を決定的にした名作であり、初期文展を代表する作品となった。

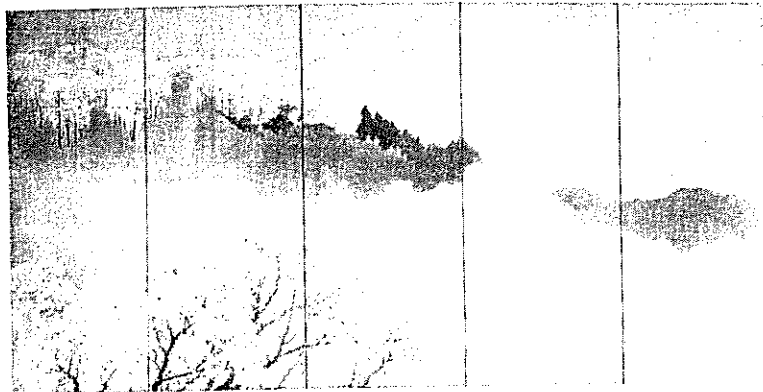
竹内栖鳳 あれ夕立に

明治四十二年 第三回文展

菊池芳文 小雨ふる吉野

大正八年 第三回文展

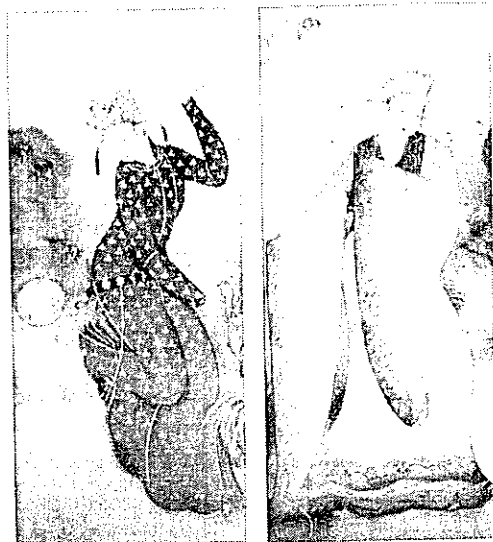
「小雨ふる吉野」は菊池芳文の数少ない遺作中の逸品である。第八回文展の出品で、芳文は五十二才、その四年後に世を去っている。六曲一双の屏風に小雨にぬれる満開の吉野桜の風情とけむる山並みがゆつたりとおさめられている。温雅で平明な描写と色彩、おそろかな構図とそれでいて微妙にいきづいていくリズム、完璧の花鳥画として出品当初から名作の誉の高かったものである。芳文は明治十四年、出生地の大坂を出て、京都で幸野楳嶺の門に入った。



京都で幸野楳嶺の門に入った。竹内栖鳳に先んずること二年であった。明治初期の画壇をリードした横嶺、岸竹堂、森寛斎らの巨頭について明治中期からは栖鳳、芳文、山元春挙らの活躍期に入り、京都の日本画の開花がはじまる。京都派隆興の礎石をきずいた先達の一人である。

堂本印象 調鞠図

大正十年 第三回帝展



きらびやかに着飾ったどこか異国の若い宮廷男女が、みやびやかなケマリの遊びに興ずるさまを描いたものである。異国といっても空想上の国が、強いていうならばインドかペルシャか、ともかくミニチュアを連想させるように、どこかの回教国の風俗であろう。丈も右幅の男子の衣裳には竜の紋様があつたりして中国的であるが、左幅の女子はいかにペルシャ風である。総じて甘美な異国情緒を感じさせる。

印象は大正十年絵画専門学校卒業、西山翠嶺に従事、既に在学中より帝展に入選、卒業の年にはこの調鞠図によつて特選を得、画壇における名声をゆるぎないものとした。今日の印象を知る人は画風の違いを異に感ずるかも知れない。しかしかつての印象には、東西の古画の研究に基礎をおいた広範な作域があり、これはその最初の成功作なのであつた。

徳岡神泉 枯葉

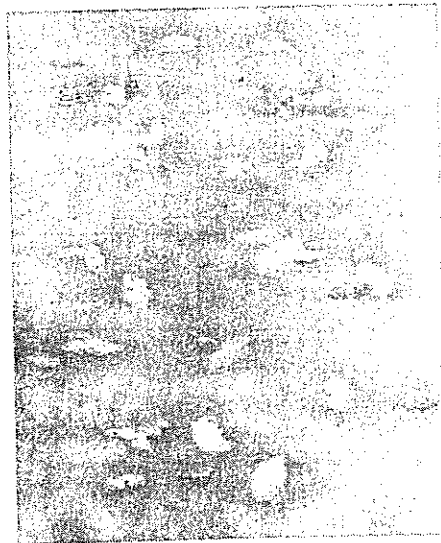
昭和三十三年 第一回日展

徳岡神泉は現代日本画壇の中でも独特の位置にある。現代社会において、沈静深奥の画境が具体的にどのような表現をとつて表われるかを典型的に示している点で、そういうことができる。

竹内栖鳳に師事し、大正六年絵画専門学校を卒業したが、画壇に安定した地位を得るまでに、曲折を経たきびしい模索の時期を通過した。伝統的画風と個性の切点を深く忠実に追求めた画家の一人といえよう。

戦前は装飾性を加味した端正な作品によつて知られたが、戦後は急速に画域を深め、神秘主義と称される静謐幽玄な作風を確立し、「鯉」「池」「流れ」「刈田」など連続して日展に力作を送った。

「枯葉」は大地に落ちて朽ちようとする枯葉を寂光のなかで情感をこめて描出している。諸作のうちでも最も内視性の純密な作品であり、その頂点を示すものである。そして「枯葉」以後「刈田」などにみられるような開かれた感性の移行がみられる。



展覧会案内

美術館

10月	パンリアル展 23日—30日	墨人展 25日—30日	不思議の国子供アトリエ展 30日—11月1日
11月	新制作協会展 1日—14日	上京児童美術研究所展 3日—5日	ダリ展 3日—29日
	立命館大学美術研究部アトリエ展 7日—11日	京大美術展 13日—17日	創立35周年記念園児作品展 13日—15日
	自由美術展 16日—25日	走泥社展 17日—23日	二紀会美術展 17日—27日
	京都版画家集団展 20日—26日	意匠科展・女子高校生絵画コンクール 25日—27日	二科展 26日—27日
	第2回京楽総合展 28日—12月2日	新匠会展 29日—12月5日	独立美術展 29日—12月11日

京都府ギャラリー

10月	作陶展 18日—20日	青珠会展 22日—25日	日吉地区青年会展 27日—29日	新匠会版画展 31日—11月2日
-----	----------------	-----------------	---------------------	---------------------

11月	藤波晃個展 3日—5日	第2回Gの会 7日—10日	グループのんのん 12日—15日	洋画三人展 16日—19日
	朱玄会展 21日—25日	第2回日本画三人展 27日—29日		

土橋画廊

10月	八野正直個展 29日—11月1日
-----	---------------------

11月	麻田啓司・猪原大華・石本正展 2日—4日	水原房次郎個展 10日—15日	伏木南園彫刻展 17日—22日	中堀監作個展 27日—29日
-----	-------------------------	--------------------	--------------------	-------------------

京都書院画廊

10月	猿人展 19日—23日	油絵三人展 23日—26日	青樹会油絵展 26日—30日	同志社大学スケッチクラブ展 31日—11月2日
-----	----------------	------------------	-------------------	----------------------------

11月

集团アトス絵画及び写真展 2日—5日

染色三光展

米原克典絵画展 10日—15日	立命館高校美術部展 17日—18日	東山高校美術部展 21日—22日	立命館大学グループ展 24日—26日	グループ群展 28日—29日
--------------------	----------------------	---------------------	-----------------------	-------------------

マロニエ画廊

同志社こぶし画会展 16日—20日	鈴木朗仙個展 23日—26日	三人展 30日—11月2日
----------------------	-------------------	------------------

11月

くらま画会展 10日—12日	グループ創造画展 13日—16日	くらま画会展 17日—19日	京都女子大絵画部展 20日—23日	グループ陽展 24日—26日	電谷大学写真部展 27日—30日
-------------------	---------------------	-------------------	----------------------	-------------------	---------------------

丸太町画廊

美術工芸品展 10日—20日	山田孝三郎洋画個展 24日—26日
-------------------	----------------------

紅画廊

木下茂森個展 19日—25日	吉田ミノル個展 26日—11月1日
-------------------	----------------------

大丸画廊

染「京都風景」皆川泰蔵絵展 20日—25日

鉄斎展

27日—11月1日	雲烟社展 24日—29日
-----------	-----------------

11月

堂本印象抽象画展 3日—8日	関西独立美術会員展 21日—26日	武具甲冑名宝展 17日—22日	陶芸巨匠彩虹会展 17日—22日	第1回京都書作家協会展 17日—22日
-------------------	----------------------	--------------------	---------------------	------------------------

七宝碗の会

20日—11月1日	現代日本の工芸 9月25日—11月1日
-----------	------------------------

11月

京都青年美術作家集団展 20日—24日	京都国立博物館 5日—29日
------------------------	-------------------

丸物画廊

20日—24日	特別展「能面と能装束」 4日—11月8日
---------	-------------------------

10月

板橋会展 17日—22日

サルバドール・ダリ展

超現実主義の美術家ダリの個展が毎日新聞社・京都市共同主催で開催。奇抜な画家としてダリは有名だが、今回は少年時代から最近までの一三三点が出品される。

11月3日—29日 京都市美術館

入場料 一般三〇〇円、大学高校生二〇〇円、小中学生一〇〇円、ほかに二〇人以上団体割引

友の会会員には割引券があります。一五〇円（一般三〇〇円）で友の会事務所まで11月3日からお渡しします。

京都市美術館ニュース

No. 50

発行所 京都市美術館 京都市左京区岡崎公園 昭和40年2月1日発行

旧暦から引きついた日展の京都開催も終って美術界は本格的に新しい年にはいっています。

私事にわたって恐縮ですが、過去四年間、私は京都市文化局長として美術館長を兼務してまいりましたが、二月から美術館長専任となりました。

一人二役の関係で、美術館については手の回りがなることも多かったのですが、これからは美術館の仕事を専念できることをうれしく思っています。

文化局長としては何等なところなく恥しく思っておりますが、おかげで音楽や演劇など文化一般の分野で多少なりとも経験を積み、勉強できたことを有りがたく思っています。

美術館行政のうえでもそれらの経験なり、勉強がプラスになれば幸いです。

最近の美術館は大規模な展覧会が

相ついでありますが、昨年などは正に当り年で、恒例の京展、日展、アンデパンダン展などのほかに、秋にはオリンピック記念京都の伝統展、「京都日本画の二百年」を催しましたし、さらにこの間、五、六月には「ミロのビーナス展」七、八月の「ロシヤ秘宝展」十一月の「ダリ展」といきつくひまもない盛況でした。

この中で「ミロのビーナス展」の如きは京都で九十万人の人を集めて、美術愛好者の底辺を大幅に拡大しました。またこのほかにこいう海外美術展の開催を通じて当館にたいする認識が高まり、外国の美術館との間にも好ましい関係が生じましたが、このことは今

所感

美術館長

重達夫

さらに京都は今日でも東京と並び美術の中心地でありますから、これらの展覧会が一般の美術愛好家とともに地元美術作家にどう参考になったか、ぜひ推しはかってみたいものだと思います。もとより外国の、しかも「古美術」に類するものが大部分で、その啓示は直接的ではないでしょうが、かえってジャカになる現代美術以上に、芸術についての思索を深め得ることができるとは思えないかと考えています。

それから美術館の今後の課題の一つに、館の所蔵品を充実させ、特徴ある常時陳列を完備していくことがあります。

戦後の常時陳列は昭和三十五年からはじめられ、好評を博することができましたが、残念なことに色んな

関係から文字通り常時陳列というまでには至らない現状です。これを打開してこの陳列を軌道にのせるためには、まず所蔵品の充実をはかることが基本になると考えています。それにともなう所蔵庫や、作品解説や美術講座のためのレクチャールームの新設が必要となってくるでしょう。創立以来三十年を経た当館は、今日の美術館の多角的な機能からすればそのほかに色々と施設不備な点が出てくるのは事実です。とにかく館員一同力をあわせて、今後更に、よりよき美術館にするために努力をかためたいと思っております。

東京、奈良の両国立博物館など国公立の施設は原則としてはぶぎました。

藤井有鄰館 一般にあまり知られな

藤井有鄰館 一般にあまり知られないが中国美術のコレクションとして著名である。静堂藤井善助氏の生涯の収集にかかるとので大正15年開館した。殷周代から清朝にいたるあらゆる種類の美術品がぎっしりつまっている。そのうち古印は六千点、宋の徽宗皇帝、清の康熙帝の印をふくんで

レクシオンによる美術館で絵画、書、大壁
関係の諸資料などを展覧。昭和34年に開館
した。常時陳列を行っている。京都市右京
区松尾万石町五七 TEL(38)2832

大阪府立博物館 昭和35年、大阪
市政70周年を記念して、郷土を中心にした
歴史博物館として開設された。大阪城域に

位置しているのも象徴的で、豊太閤關係の諸資料、文楽人形など特色のある作品の収集がある。先史から近代に至る「大阪の歴史」の常設陳列や「大阪の文化」の常設も行われ、郷土歴史博物館としての特色を発揮している。大阪市東区馬場町 TEL (941) 7177

正月いま・むかし 2月14日まで

藤田美術館 昭和26年、明治の豪商であり、著名な美術収集家であった元男爵藤田伝三郎氏および同家関係者の寄贈古美術品を収蔵展示する美術館として開館。

術品が根幹となっており、絵画、書画、彫刻、漆工、金工、陶磁器など国宝、重要文化財をふくめて約五千点を収蔵している。とくに茶陶には、耀変天目茶碗（国宝）など名品があり、根津美術館と双壁をなしている。春季、秋季の特別展を開催、学術講演会も聞かれる。大阪市都島区綱島町四〇

TEL(061)0382
 仏教美術と水指展 3月27日から5月まで
 逸翁美術館 実業界の雄逸翁小松一
 三翁が生誕をにかけて集めた美術品の寄贈に
 より、昭和32年に開館され、全国の各都市
 に特色のある小美術館を普及したいという
 翁の希望の一端が表現された。収蔵品は絵
 画、書蹟、彫刻、工芸品など三千余点。茶
 人であった翁の融達無礙、極めて広い視野
 の中で一点一点好みを遍して選択されたと
 ころに特色がある。春秋の特別展のほか常
 設陳列を開催。大阪府池田市建石町一九六
 五 TEL池田(5)43588
 御題「鳥」にちなむ美術館 1月5日か
 ら3月21日まで

1 奈良県天理市布留 TEL天理(2)151

寧楽美術館 事業宗故中村肇策氏が第一次世界大戦から第二次大戦にかけて集めた中国古代青銅器、和漢の古鏡、宋磁、朝鮮陶器、古印、また絵画では田能村竹田の亦復一染帖など多数の美術品を所有している。位置は奈良国立博物館の北側、名園依水園を敷地としているが、そのうち前園(西側)は元興寺摩尼珠院の別荘であった。屋内に三秀亭、捉秀軒、清秀庵の茶人文人趣味豊かなカヤぶきの建物があり、景観をひき立てている。奈良市水門町七四 TEL(074)2173

治兵尚窮の古稀を記念して、昭和6年に設立。奈良時代の経巻、燭、經篋、裂地のほかに、銅鏡、金銀器、勾玉、漆器、茶器、刀剣などコレクションの巾も広いが、とくに中国古銅器の名品、中国各代のご陶が有名。美術館自体や環境の美しさでも随一を誇つてゐる。春秋の展覧のほか随時小展開も行われる。神戸市東灘区住吉町茅台一五四五 TEL(85)6001
中国銅器および陶器の展覧 3月中旬より
り5月31日まで

市立神戸美術館 池長孟氏が昭和
初年から収集した「南蛮美術」を主体とし

滋賀県立琵琶湖文化館 奈良、

たコレクションで有名。昭和15年に創立された池長美術館が神戸市に寄附されて現名称となった。キリシタン関係の美術品、長崎通商時代を通じて西洋美術の影響を受け、陶磁器様式の総称で、泰西王侯騎馬図、平賀源内寄西洋美人図、司馬江漢寄英國風景人物図、狩野元秀筆京都兩帝寺園など名品がある。春秋の兩莖美術館のほか現代美術の展覧会もある。神戸市若台区篠内町一ノ三三五 TEL(2)3043

明治の神戸殿 2月7日まで

和歌山県立美術館 和歌山城跡の

京都に決く文化遺産をもつ湖国の文化のセ
ンターとして昭和36年開館した。博物館、
近代美術館および水族館を総合し、ほかに
熱帯植物館、公衆休憩所などがある。館は
城廓風の建物で、大津打出浜の湖上に建て
られ、すこぶる特設がある。博物館、美術
館でそれぞれ特別展が開かれ、美術館では
諸団体展もある。両館とも平時は常設陳列。
大津市上平蔵町 TEL(077)8179

TEL(3)2467

ここの数年、七月になると、東北や関東の山奥へ大自然の雄大な美くしさを求め、入るものですが、昨年は、今までに三度訪れ、その度に何時も興味を惹きつけられて、あつた雲霧独特の、あの集地松に睡まれた、美くしい村のイメージが、それを定着させる必要があればおさらいまでに酔酔してしまいました。

水田慶泉

七月十八日、烈しい雨の中を、画柄を求めて、出雲の村を歩き廻り、農家の門の下に、雨を避けてイーゼルを立て、或いは軒下でスケッチブックを開き、神の国、出雲の村の姿を求めました。

随 想

昨日、一昨日と良い天気だったので、大社附近から出雲高松へと学生に廻り、今日又この雨中の写生になったのですが、どうしても、まだ出雲のイメージを捉へる事が出来ません。

出雲市駅前の旅館に泊り、スケノチを開いて、あれこれ着想を練つて見るが、どうしても進まない。

一歩入りしたと思つたら、雨下を感ずしく往來する物音に目を覚ます。物すごい雨だ。そう古くもない旅達だが、方々で雨濡りするらしい。「そらバケツだ」「ここも濡って来た」宿の番頭から女中まで繰出で騒いで居る。部屋のカートンを開けて、街灯に照らされた街を見ると、天の底が抜けたかと思う程の猛烈な雨。鐵道は川の様に漣々と雨水が流れ、それに随の様な雨脚がたたきつけられ、

出雲の旅
水田慶泉

これが集中豪雨だと知らないし、大して気にもしないで、朝までぐすり眠った。

朝になると、「雨はどこへやら、さう陽ささきて居る。今日は一層の鉄で寧ろ生を」と駅へ出ると駅は人でごった返して居る。昨夜の雨でこの地方の各河川は氾濫し、同族は米子―出雲市間、浜田―出雲市間で各々三十枚箇所寸断され、ここ当

今宵は、見込みは立たないと云う。支線もバスも全線ストップだ。

兎に角、松園いのある所まで行つてみよう、なるべく土地の高さうな所を目当てに歩いて見る。——昨日まで背々と茂つて居た田園はすっかり冠水し、松園いの家々だけがその水面に浮んで居る。

特有のその強い農家の風根。「これだ」——ここで薩の出雲のイメージはやっと定着出来たのです。

制作にかかつてからも解決出来ない所が出て来て、又出張へ二度行きました。が、この制作中何時も思つて居た事は、この素朴な神の國出張を辱す様な事になつても、横自身の出張のイメージを忠実に定着せしめたいと云ふ事でした。勿論今度の作品も思つた様には出来ませんでした。が、（日本國家）

展覧会案内

2月

美術館

3月
ジョメトリカル・アート・グループ展 21日—26日

京都女子高校絵画彫刻デザイン展 1日—7日
山崎脩爾展
荒木高子個展 8日—14日
鈴木治個展 15日—21日
草邇会 6日—7日
洛東高校絵画クラブ展 9日—11日
燕雀会 13日—14日
京学大工芸科卒業制作展 20日—25日
朱雀高校美術クラブ展 27日—28日
大丸画廊
林正治新作展 2日—7日
古民芸ゲテモノ展 9日—14日
牧人社展 16日—21日
日本画小品展 23日—28日

土橋画廊

1965年京都アンデパンダン展 3日—8日

丸物

美術教室児童画展 5日—11日
美術館アトリエ展 11日—16日
美大作品展 18日—22日
南画院展 24日—30日
新関西西春展 25日—31日
書窓展 27日—28日
第6回植秀会展 6日—11日
京都市工芸指導所展 13日—18日
全京都こども工作展 13日—18日
全京都高校美術展 20日—25日
西川純個展 20日—25日

京都府ギャラリー

マロニエ画廊

あすなろ展 4日—7日
自由美術京都サークル展 9日—12日
第8回白中社展 14日—17日
パンリアル展 19日—22日
染色4人展 24日—27日
二人展 5日—8日
京女子大絵画部展 9日—11日
くれ美術展 12日—15日
立命館大学美術研究卒業展 19日—22日
オリビック東京大会芸術展 1月23日—2月21日
享夷展
京都国立博物館
平常陳列

1965年

京都アンデパンダン展作品募集

主催 京都都市
会場 京都市美術館 二階全館
会期 昭和40年3月5日—11日

募集作品 絵画、版画、彫刻（作品の寸法 形態については、設問、陳列作業に限りがありますのでその点を良識をもって考慮して下さい。陳列は京都市美術館が、本展全体の観点に立って行います。）

出品料 1人1点 300円
2点 500円
3点 600円

（ただし出品は1部門につき1人3点まで。一括して投入のこと。出品料は作品投入とともに納入のこと）

入 昭和40年3月2日 午前10時—午後4時
京都市美術館
（日時厳守のこと）

出 昭和40年3月12日 午前10時—午後4時
井島 勉 今泉寛男 中原佑介 森 啓
3月7日（日曜）午後1時30分から当館で賛助者を
囲む合歓会と懇親会を開催します。

参加希望者は別途会費として五〇〇円を搬入当日に
払い込んで下さい。

作品保管 上記搬入日から搬出日まで、主催者は善良な管理者
の注意をもって作品を保管しますが、不慮の災害に
よる損失は補償しません。出品者は、作品の毀損や
作品部分の亡失等が起らないよう制作に当って注意
して下さい。